

博士学位論文

戦前日本におけるイタリア・ファシズムの受容と伝播  
——下位春吉を中心に——

2016 年度

比較文化研究科

D12001

川田 真弘

指導教官 柏木 隆雄

はじめに

現在の日本において、下位春吉の名を知る人は少なからう。平凡社編『日本人名事典』（1979年）や小学館編『日本大百科事典』（1991年）など、主要な人名事典や百科事典には、下位春吉という項目は見受けられない。下位春吉の名が載せられているのは、管見の範囲では日本児童文学学会編『日本児童文学事典』（東京書籍、1988年）のみである。その『日本児童文学事典』では、下位について次のように説明している。

一八八三～一九五四（明 16～昭 29）教育家、口演童話家。東京高師在学中、学友の葛原 菡 と、校長加納治五郎に願い出て大塚講話会を創設した。「講話会のお父さん」と呼ばれていた。一九一五年イタリアのナポリにできた東洋語学校に日本語教授として赴任、第一次大戦前線に出動、勇名を馳せた。イタリアの首相ムッソリーニと親交があった。その著書『お凧の仕方』（一九一七）は先駆的著書で、口演童話界に大きな影響を与えた。代表作『ごんざ蟲』<sup>1</sup>

上記の記述では、下位春吉が口演童話家として活動をしていたことはわかるが、その下位がなぜイタリアに赴いたのか、なぜ第一次世界大戦に従軍したのか、なぜ当時のイタリア王国首相であったベニート・ムッソリーニ（Benito Mussolini, 1883～1945）と親交があったのか、そういった点が曖昧になっている。この項目の執筆者である倉沢栄吉（1911～2015）は、下位春吉についてくわしく知らなかったと考えられる。

イタリア・ファシズムの指導者であり、当時のイタリア王国首相であったベニート・ムッソリーニ（Benito Mussolini, 1883～1945）は、戦前の日本においては良くも悪くも注目を集めていた。この論文の第二章でくわしく取り上げるが、昭和に入ってから、ムッソリーニの辣腕ぶりに日本国内でも耳目が集まり、ムッソリーニやイタリア・ファシズムに脚光が当てられたことはよく知られている。そのような中で、ムッソリーニと親交があったとされた下位春吉は、当然のようにその当時のマスメディアによってクローズアップされ、彼は日本各地の講演会に招かれ、また『改造』や『現代』といった当時の主要な雑誌にテキストを寄稿するようになる。

後に第三章でくわしく述べるが、1883年（明治16年）に福岡県で生まれた下位春吉は、

---

<sup>1</sup> 日本児童文学学会編『日本児童文学事典』（東京書籍、1988年）P.363。この項目の執筆者は、倉沢栄吉。

東京高等師範学校卒業後、一時は教職に就いていた。上述の『児童文学辞典』における下位春吉についての記述のように、童話口演に傾倒していたが、その一方でダンテにも魅了されていた。下位はダンテ研究の一環のためにイタリア語を学び、東京外国語学校伊語科専修課程を修了する。東京外国語学校卒業後、その卒業時のスピーチがイタリア大使館に評価され、下位はナポリ王立東洋学院（現・ナポリ東洋大学）の日本語教師としてイタリアに赴任。

下位は現地で日本語を教える傍ら、イタリアの文学者と積極的に交流し、日本文学の普及に努めた。第一次世界大戦が勃発すると、下位は駐伊日本大使館とイタリア軍との連絡係の役目を担い、イタリア軍に同道して前線に赴いている。その活動の最中、下位は義勇兵としてイタリア軍に参加していたガブリエーレ・ダンヌンツィオ（Gabriele D'Annunzio, 1863~1938）と会見し、意気投合。その後、下位はダンヌンツィオと親しく付き合うようになる。

第一次世界大戦後、下位は戦前と同じように日本文学の普及に努め、日本文化紹介のための雑誌をイタリアで出版。その一方で、ダンヌンツィオとの交流を続け、ダンヌンツィオによるフィウメ占領（1919年）にも関与していた。

1924年（大正13年）、日本に帰国した下位は、ファシストを自称するようになる。以後、下位は日本国内で講演や執筆の活動を行うようになった。下位の活動は、1927年から1933年までの二度目のイタリア滞在期間を除いて、第二次世界大戦終戦まで続いた。第二次世界大戦後、下位は枢軸国への支持扇動の罪で1951年（昭和26年）まで公職追放され、そして1954年（昭和29年）に没する。

1924年以前の下位春吉は、『日本文学辞典』の項目の言う通り、口演童話家として評価されるべきであろう。また、日伊文化交流の担い手としての彼の業績は、一目置かれるところがあった。しかし、1924年以降の下位の活動が、彼を歴史に闇の中に埋没させたのだろうか。日本国内において、長らく日の目を見ることがなかったその下位春吉について、最近になって彼の活動に関する研究が着手され始めている。

1989年（平成元年）の日本歴史学会発行『日本歴史』十月号（497号）に所収された吉村道男「昭和初期の社会状況下における日本人のムッソリーニ像 —英雄待望論の側面—」において、下位春吉についての言及がある。ただし、吉村の論は、日本国内におけるムッ

ソリーニの評価の一片として登場するのみである。<sup>2</sup>翌 1990 年（平成 2 年）、劇作家の田之倉稔がその著書『ファシストを演じた人びと』の一章でダンヌンツィオを取り上げたとき、ダンヌンツィオのフィウメ占領に同道した日本人として下位の名を挙げている。その章の主たる対象はダンヌンツィオであるため、日本人・下位に関する記述は少ないが、吉村の論文よりも多くの紙数が割かれている。<sup>3</sup>1992 年には、教育学者の有働玲子が、口演童話の活動家としての下位を取り上げた。<sup>4</sup>

2000 年代に入ると、イタリア文学者の土肥秀行、日伊文化交流史家の大内紀彦、イタリア近現代政治史家の藤岡寛己の三者が、下位春吉に関する論文を発表。さらには、2012 年に「ファシズムと文学 一下位春吉を巡って」という題目でシンポジウムが開かれた。土肥と大内は、日伊文化交流の観点から、下位のイタリア滞在時の交友関係を探ることで、下位春吉について論じている。藤岡は政治史的観点から下位の行動や思想を追うもので、下位がファシズムに傾倒した理由を実父の影響と幼いころの貧困によるルサンチマンに求めている。

以上の先行研究を踏まえながら、本論においては、下位春吉について、その生涯を概観。彼の諸著作やイタリア留学時代及び帰国後の行動を通じて、大正、戦前昭和および戦中における日本の世論がイタリア・ファシズムを指導したベニート・ムッソリーニや、イタリア・ファシズムそのものがどのように捉えられていたのかを検討し、その時流にあった下位がファシズムという新しい思想をどのように紹介したのかを検討する。そして、下位春吉自身がファシズムをどのように考えていたのか、またどのように実践しようと考えていたのかを論じ、最終的に、下位が日本の歴史上及び思想史上においてどのような位置を占めるのかを考えるものである。

第一章においては、下位春吉とイタリア・ファシズムの関係性を探る上の前提として、第一次世界大戦から 1922 年のムッソリーニ内閣成立までの政治を中心としたイタリア史について概観する。1914 年に勃発した第一次世界大戦に対して、イタリア国内では参戦を巡って左右の枠を超えた議論が沸き起こるが、最終的にはムッソリーニを含む参戦派の示威行動によって、連合国側に立った参戦に踏み切った。しかし第一次世界大戦においてイタ

---

<sup>2</sup> 吉村道男「昭和初期の社会状況下における日本人のムッソリーニ像 —英雄待望論の側面—」（『日本歴史』十月号 497 号、吉川廣文館、1989 年）P.74

<sup>3</sup> 田之倉稔『ファシズムを演じた人びと』（青土社、1990 年）PP.108-116, PP.120-122

<sup>4</sup> 有働玲子「大正期の口演童話 下位春吉・水田光を中心にして」（『研究紀要』第二分冊 短期大学部(I) 25、聖徳大学、1992 年）PP.195-206

リアは多大な損害を被り、その一方で領土や賠償金はほとんど獲得できないで終わる。大戦後のイタリア情勢は不穏なものとなり、「赤い二年間」と称されるように左翼が台頭。その一方で、左派とファシストの間では暴力を伴う衝突が繰り返され、イタリア情勢はますます混乱を極めるようになる。最終的には、左派を暴力で抑え込んだファシストが伸張する。そして1922年、ムッソリーニは「ローマ進軍」というクーデター紛いの手法によって政権を奪取することになる。

第二章では、下位春吉が本格的に活動を始める前の日本の政治状況を概観し、下位春吉が積極的に世論に訴え始めた頃の日本のマスメディアや論壇の背景を検討する。日本も第一次世界大戦に参戦し、イタリアと同じように戦勝国の一員に名を連ねた。しかし第一次大戦後のイタリアは政情不安に陥り、そしてムッソリーニの独裁政権を誕生させることになった。一方の日本は、米騒動などを経て、本格的政党内閣である原敬内閣が誕生し、そして第二次憲政擁護運動の結果、加藤護憲三派内閣が成立。加藤内閣以降、日本では普通選挙制度が施行され、「憲政の常道」に基づいて立憲政友会と憲政会（のち立憲民政党）が交互に政権に就く二大政党制が成立し、まがりなりにも民主主義に基づく政治が始まった。民主主義が伸長しつつあった当時の日本の世論が、ムッソリーニ率いるファシスト党政権について、どのような見解を持っていたのか。日本におけるイタリア・ファシズム観の変遷を詳しく辿る。

第三章においては、主に下位春吉の生涯とその活動について詳述する。下位は1915年から25年までイタリアに長期滞在していたが、その間のイタリアは第一次世界大戦にはじまり、第一次大戦後の混乱、左右の衝突、そしてムッソリーニ政権樹立と、イタリア近現代史上もっとも重要な出来事が起きていた。さらに、下位は『死の勝利』などで日本でも知られていた詩人のガブリエーレ・ダンヌンツィオと交流があった。ダンヌンツィオとの友情と、ムッソリーニ政権の樹立を間近に見みたことは、下位の思想面の形成に大きな影響を及ぼした。また一方で、下位は現地のイタリア人文学者や、下位と同じくイタリアに滞在していた日本人と共に、日本文化を紹介する雑誌を創刊する。下位の文学者としての足跡もイタリアに残っている。下位の活動や彼の著作及びテキストを基に、彼がどのような思想的軌跡を辿り、また彼が日本帰国後にどのような活動をしたかを見て、下位春吉の人物道を再検討していく。

第四章では、下位春吉のイタリア・ファシズムに関する所論を検討しつつ、下位と同時代の知識人であり、『資本論』の完全邦訳をはじめて成し遂げた高島素之のイタリア・ファ

シズムに関する論とを比較する。高島と比べて、下位春吉がどのようなイタリア・ファシズム感を持っていたのかが、そこで明らかになる。戦前日本において、下位はイタリア・ファシズムに精通し、さらにはムッソリーニとも交流があるとされ、各地の講演会にひっぱりだこになるほどであった。その一方で、下位の言説に対する批判もあがった。その批判者のひとりが高島素之であり、高島は下位を「職業的紹介者」と揶揄し、さらにはイタリア・ファシズムを国家集権主義であり、いずれ経済的にも統制経済を実施するであろうと1928年時点で予測する。高島の見立てに下位は批判的であり、下位はイタリア・ファシズムが国家集権主義であることは認めつつも、経済は自由主義経済であると説く。1930年代以降、イタリア・ファシズムに耳目が集まっていた日本だったが、アドルフ・ヒトラー率いるナチス・ドイツが勃興し、ナチス・ドイツは驚異的な経済復興を成し遂げ、そして第二次世界大戦序盤戦においてナチス・ドイツ軍が欧州を席卷したことで、日本の世論はナチス・ドイツに注目するようになる。そのような中、下位春吉は表舞台に出ることがだんだんと少なくなり、下位は日独伊三国同盟締結を訴えはしたが、その存在の影が薄くなっていた。

下位春吉が何故イタリア・ファシズムを信じ続けていたのか。下位春吉にとってファシズムとはなんだったのか。また、歴史上における下位春吉の位置付けはどのようなものであるか。

いまだ下位春吉の名を知る人は少ない。下位はファシストを自称し、日本国内でイタリア・ファシズムを喧伝する活動を積極的に行っていたため、第二次世界大戦後の日本社会は、彼を歴史の闇の中に埋没させたままにしておいたのかもしれない。しかし戦前期において、遠くヨーロッパの地で日本文学の普及を図ったことは、現在においても評価されるべきであろう。また、下位がファシストであったという点についても、一文学者が熱烈なファシストに転身する様子は、戦前期日本の右派・国家主義運動について考察する上で、興味深い事例だと論者は考える。

以下、くわしく論じていくことにする。

## 第一章

### (1) 第一次世界大戦を巡るイタリア国内の動き

下位春吉は第二次世界大戦前、ファシストを辞任し、日本国内でイタリア・ファシズムやその指導者であるムッソリーニを称賛する講演や執筆活動を積極的に行っていた。その講演や執筆活動において、下位は第一次世界大戦におけるイタリア軍の活躍を話題としてよく取り上げている。本論第三章でも取り上げるが、第一次世界大戦当時、イタリアに滞在していた下位は、駐伊日本大使館とイタリア軍との間の連絡係の役目を担っていて<sup>1</sup>、その役割に沿った形で前線にも赴いている。彼が第一次世界大戦のことについて講演やテキストなどで積極的に取り上げていたのは、前線に同道した彼自身の雄々しさを強調することが目的のひとつだろう。もうひとつは、下位は第一次世界大戦がファシズムを理解する上で重要な出来事だと考えていたためだろう。下位の著作において、第一次世界大戦について次のような記述がある。

イタリアの愛国運動を説き、そのファッショ維新を説くためには、どうしても大戦期のイタリアをお話ししなければならぬ。これが解つてゐないと、その根本精神を理解することができない、と、思ふのであります。<sup>2</sup>

下位が指摘する通り、第一次世界大戦は後のファッショ運動に大きな影響を与えることになる。それでは、第一次世界大戦はどのようにファッショ運動に影響を与えたのか、そもそもどういう経緯でイタリアはファッショ国家になったのだろうか。まずは、第一次世界大戦前夜からファッショ政権成立までのイタリア史を概観していく。

1914年6月28日、サラエヴォにおいて、オーストリア・ハンガリー帝国のフランツ・フェルディナント皇太子とその夫人がセルビアのナショナリストによって暗殺されるという事件が起きた（サラエヴォ事件）。この事件にオーストリアは憤慨し、一ヶ月後の7月28日にセルビアに宣戦布告。これに対して汎スラブ主義の下、セルビアを支援していたロシアは、セルビアを助けるために7月31日に軍の総動員を決定する。ロシア軍の総動員という動きに対抗するために、ドイツも8月1日に総動員を決定し、2日付でロシア

---

<sup>1</sup> 下位春吉「滞伊十八年 ダヌンツィオとムッソリーニとを語る」(『現代』14(7)、大日本雄弁会講談社、1933年) PP.48-50

<sup>2</sup> 下位春吉『下位春吉氏熱血熱涙の大演説』(大日本雄弁会講談社、1933年) P.12

に、3日にはロシアの同盟国であるフランスにも宣戦を布告した。第一次世界大戦の勃発である。

ヨーロッパが全面戦争へと突入する中、イタリアではサライエヴォ事件の約三週間前の6月7日、アドリア海に面した街、アンコーナで共和主義者やアナキストによって組織されたデモ隊と治安部隊が衝突し、死者が発生。これに左派の活動家たちが抗議し、デモ隊と治安部隊が一週間にわたって衝突を続け、「赤い一週間」と呼ばれる事態へと発展していた。<sup>3</sup>その熱気が冷めやらぬ中で、第一次世界大戦勃発の報せがイタリアに届く。

1882年に、イタリアはドイツ、オーストリアと共に三国同盟を結んだが、オーストリアとは1866年の普墺戦争でオーストリアから回収することが出来なかったトレンティーノとヴェネツィア・ジューリアを巡る領土問題を抱えており、また1911年のリビア戦争において戦争遂行のための資源を使い果たしており、全欧州規模の戦争に参入するだけの余力はなかった。そして、「赤い一週間」でイタリア国内の社会不安が露呈したばかりであり、これも無視することは出来ない。したがって、時の首相アントニオ・サランドラ (Antonio Salandra, 1853~1931) は、同盟国が攻撃を受けた場合に限り自動的に参戦するという三国同盟の条文を盾に、イタリアの中立を宣言。議会の多数派を握り、四度 (1882~1883, 1903~1905, 1906~1909, 1911~1914) も首相を務めたイタリア政界の重鎮、ジョヴァンニ・ジョリッティ (Giovanni Giolitti, 1842~1928) も中立に賛成であり、イタリア社会党も絶対中立の立場を取っていた。

しかし、参戦論を主張する政治勢力は少なくなかった。保守的な自由主義派の中からは、三国同盟に従って参戦すべしと主張する人もいた。<sup>4</sup>しかし、それ以上にオーストリアから領土を回復する絶好の機会として三国協商側で参戦すべきと主張するものの方が多かった。著名な詩人であり、劇作家でもあるガブリエーレ・ダンヌンツィオ (Gabriele D'Annunzio, 1863~1938) も参戦論に立ち、各地の講演で参戦を説きまわっていた。また、フィリッポ・マリネッティ (Filippo Tommaso Marinetti, 1876~1946) を中心とする未来派futurismoもまた参戦論に立つ。1909年に彼らが発表した「未来派宣言」<sup>5</sup>において、戦争を「世界

<sup>3</sup> 北村暁夫・伊藤武編著『近代イタリアの歴史』(ミネルヴァ書房、2012年) P.121

<sup>4</sup> シモーナ・コラリーツィ著 村上信一郎監訳『イタリア 20世紀』(名古屋大学出版会、2010年) P.43

<sup>5</sup> 1909年2月20日に仏紙 *Le Figaro* 上で発表される。「未来派宣言」は全十一項目からなり、第九項で「われらは、世界の唯一の健康法である戦争を、軍国主義を、愛国主義を、無政府主義者の破壊行為を、死にも値する美しき理想を、女性蔑視への賛美を欲する」と宣言している。(藤岡寛己『原初的ファシズムの誕生』(御茶の水書房、2007年) P.71)



の唯一の健康法」と説いていたことを考えると、参戦は当然の選択であった。そして社会主義者からも参戦論を展開する者が出始めた。その一人が、当時イタリア社会党機関紙『アヴァンティ！』*Avanti!* の編集長を務めていたベニート・ムッソリーニ (Benito Mussolini, 1883~1945) である。

ムッソリーニは、1914年10月18日付の『アヴァンティ！』紙上において、社会党が掲げていた絶対中立を疑問視する論説を発表する。この論説は党内ですぐに問題となり、二日後の20日にムッソリーニは編集長職を辞任。その一ヶ月後には、彼は『イタリア人民』*Il popolo d'Italia* を創刊し、参戦論者に転換した。

参戦論が熱を帯び始めた中、政府は参戦か中立かを見極める行動に移していた。12月、新たに外相となったシドニー・ソンニーノ (Sidney Sonnino, 1847~1922) がオーストリアと交渉をはじめ、1915年3月になると英仏露の三国協商側とも協議を始める。オーストリアはイタリアを三国同盟に留めようと未回復地のトレンティーノの割譲を示唆するようになるが、各地の戦線で英国及びフランスが優勢であったことから、イタリアは協商国側に立って参戦する意思を固めていた。そして1915年4月26日、イタリアは三国協商側とロンドン秘密協定を調印。協商国は戦後に、未回復地であるトレンティーノ、ヴェネツィア・ジューリアの他に、南チロル、フィウメを除くイストリア、ダルマチアの一部をイタリアが領有することを了承し、その代わりにイタリアは協商国側に立って参戦することで合意したのだった。

だが、中立論者も黙ってはいない。風向きが変わりつつあることを感じた中立派は、街頭に出て、積極的に中立を訴えた。また、中立を支持していたジョリッティも、サランドラ首相に対してロンドン協定を破棄し、オーストリアとの交渉を再開するよう求め、300人以上の議員もジョリッティを支持したのだった。<sup>6</sup>参戦には議会の同意が必要としていたが、議員の多数が中立を支持している以上、サランドラには為す術もなく、彼は辞意を表明した。

ところが、このとき参戦派のダンヌンツィオが下院議場であるモンテチトーリオ宮殿前で過激な演説を打って参戦論者を扇動し、騒動を生じさせたのである。この光景には中立派の議員も恐れおののき、中立派の中心であったジョリッティも郷里のピエモンテに引き込んでしまった。この姿を見た議員の多くは、参戦容認へと雪崩をうつことになる。その結

---

<sup>6</sup> シモーナ・コラリーツィ著 村上信一郎監訳『イタリア 20世紀』(名古屋大学出版会、2010年) P.53

果、下院は賛成多数で参戦を承認し、上院においては全会一致で賛成した。1915年5月23日、イタリアはオーストリアに宣戦布告。自らの示威行動によってイタリアの参戦が決定した事実から、ダンヌンツィオは「光り輝く五月の日々」と称して、参戦論の勝利を讃えることとなる。<sup>7</sup>

もともと、戦争はダンヌンツィオの言うようには「光り輝」いていなかった。イタリア政府は当初、連合軍（協商国側）の優勢を見て、戦争が短期間で終わると予想していた。しかし、戦争は三年余りにわたって続き、そして大量の犠牲者を出すことになった。

主戦場であるオーストリアとの国境沿いのイゾンツォ川では、1915年5月から11月までの半年の間に四度も攻防戦が行われ、6万人余りの戦死者と17万人もの負傷者を出すのが、大きな戦果は得られなかった。<sup>8</sup>その後も数次にわたって攻防を繰り返すが、状況はまったく膠着状態であり、むしろ犠牲者をいたずらに増やすに過ぎなかった。イタリアは、開戦して最初の冬（1915-16年）までに死者・負傷者・捕虜・行方不明者として既に合計40万人の犠牲者を出していた。<sup>9</sup>膠着状態は1916年になっても変わらず、翌17年になってもようやく戦線が動き始める。

そうした中での1917年3月、ロシアで革命が勃発（ロシア二月革命）。2月23日、ロシア帝国の首都、ペトログラードで起きた大規模なデモは、政府側の武力鎮圧に反発して激化し、鎮圧を命じられたロシア軍もデモ隊に合流していく。反乱軍は次第に増えていき、鎮圧は不可能な状態へと陥った。3月15日、ロシア皇帝ニコライ二世は退位を余儀なくされ、ロシア帝国は崩壊。革命の余波は前線にも波及し、東部戦線はほぼ崩壊に近い状態へと陥り、同盟国に一時的な余力を与えることとなった。オーストリアはドイツから支援を受け、イタリア戦線において攻勢に出る。

1917年10月に始まったオーストリアとのカポレットの戦いで、イタリア軍は65個師団中38個師団が戦闘不能に陥り、約30万人が捕虜となる大敗北を喫した。<sup>10</sup>もともと、この攻勢でオーストリア軍の補給線は限界に達したため、この後のピアーヴェ川の戦い（1918年6月）以後、戦局はイタリア優位となり、1918年10～11月にかけてのヴィットリオ・ヴェネトの戦いにおいて、イタリア軍はオーストリア軍を降し、勝利を得る。この後、イタリアとオーストリアの双方は11月4日付で休戦条約に署名し、さらにはドイ

<sup>7</sup> コラリーツィ同書 PP.53-54

<sup>8</sup> 北村・伊藤前掲書 P.124

<sup>9</sup> コラリーツィ同書 P.54

<sup>10</sup> コラリーツィ前掲書 P.57

ツも 11 月 11 日で休戦条約に署名し、第一次世界大戦イタリア戦線は一応の終結を見る。終戦までに 60 万人以上の犠牲者<sup>11</sup>を出した末の勝利であった。

戦争に勝利しての終結に、多くの人は喜び、もちろん積極的に参戦論を唱えたナショナリストたちも喜んだ。参戦論者たちは、この勝利でイタリアの大国化への道が開けたと考えていた。ロンドン秘密協定が認めた領土を貰えるのは当然であり、さらに戦争で払った人的、金銭的犠牲に見合う領土が得られると予測されたからだ。

しかし、その領土がやすやすと手に入ることはなかった。大戦後のヨーロッパの将来を握っていたのは、時のアメリカ合衆国大統領ウッドロー・ウィルソン (Thomas Woodrow Wilson, 1856~1924) だった。ウィルソンは第一次世界大戦参戦に際して米国議会に十四ヶ条の提案 (秘密外交の禁止、民族自決、バルカン諸国の独立保障など) をしていたが、その提案とロンドン秘密協定が矛盾するのは誰の目にも明らかだった。加えて、問題をさらに拗らせたのはロンドン協定から抜け落ちていたフィウメの存在である。

## (2) 「傷つけられた勝利」とフィウメ占領

現在ではリエカという名でクロアチア共和国に属するこの街は、第一次世界大戦終結時にはイタリア系住民が多数を占め、さらには彼らによって構成される「イタリア=フィウメ民族会議 *Consiglio Nazionale di Fiume d'Italia*」が民族自決を理由にイタリアへの併合を求めている。<sup>12</sup>そのため、イタリアはロンドン秘密協定には記載されていないフィウメの帰属を求め、その一方でロンドン秘密協定の遵守も求める。だが、米国にしても、英国にしても、フランスにしても、フィウメの帰属に関してイタリアに譲歩するつもりはなく、何よりもウィルソンにとってみれば、自分の知らぬところで締結されたロンドン協定について考える必要もなかった。しかし、民族自決の原則に則ればフィウメをイタリアに帰属させなければならない。その一方で民族自決の原則でフィウメを含めたダルマチア、イストリア、トリエステ、ゴリツィアを要求するユーゴスラヴィアにも配慮をしなくてはならず……と、問題は平行線を辿った。

1919 年 1 月、問題が平行線のままにパリで講和会議が開かれる。三十二ヶ国もの代表が出席した会議は、容易に調整がつかなかった。それにはもちろん、フィウメ問題も含まれていた。三ヶ月後の 4 月になると、フィウメ問題に関してウィルソンから一つの提案が

---

<sup>11</sup> 北村・伊藤前掲書 P.125

<sup>12</sup> 北村・伊藤前掲書 P.129

為される。すなわち、イタリアのフィウメ領有を拒否し、フィウメを自立させるという案である。この提案はイタリア世論が受け入れず、またイタリア政府自身も受け入れられないものとして、会議に出席していた首相オルランド（Vittorio Emanuele Orlando, 1860~1952）は文字通り席を立って提案を拒否、イタリアの態度を明確にした。

しかし、オルランドが交渉の席を立ってイタリアに帰っている間にも議論は進み、6月28日にはヴェルサイユ条約が調印される。条約によってイタリアが得た領土は、トリエステとトレンティーノのみで、フィウメは引き続き交渉の対象とされた。この決定は、多くのイタリア人を落胆させ、とりわけ帰還兵やナショナリストたちを憤怒させた。彼らは、ダンヌンツィオが1919年1月「ダルマチア人への書簡」で「おお勝利よ、汝は傷つけられてはならない」と宣言したことから、第一次世界大戦の勝利を「傷つけられた勝利」と称するようになった。<sup>13</sup>そして、第一次世界大戦後のイタリアは、まさしく傷ついていた。

第一次世界大戦後、イタリアにはすさまじいインフレーションが起きていた。通貨リラの価値は、1920年までに1914年の四分の一にまで下落する。その一方で、1913年から22年までの賃金上昇率は、平均1.8%に過ぎず、さらには19年末時点で職を持たないイタリア人は200万人以上も存在した。また、ストライキの件数も増加していた。1914年には781件のストライキが起き、合わせて17万人の労働者が参加していたが、20年になると件数は二千件を超え、参加者数も200万人を超えるようになる。<sup>14</sup>

この情勢不安に、さらに帰還兵が加わった。戦時中、576万8277人<sup>15</sup>ものイタリア人たちが兵士として動員されたが、戦後、彼らはわずかな除隊手当を渡されただけで軍隊から放り出された。かつての兵士たちは政府に対して生活の保障を要求し、そのために組織を結成していき、そして、政治団体と結び付くようになる。中でも、マリネッティの率いる未来派とアルディーティarditi、そしてムッソリーニの結び付きは、後のファッショ政権誕生の端緒となったと言えよう。

アルディーティは、大戦中のイタリア軍において臨時に編成された突撃隊*reparti d'assalto*の通称である。彼らは敵陣への奇襲的突破を求められ、兵士たちの中からそれを実行できるだけの強さと勇敢さを持っている者だけが選抜される。また、危険な任務に見合う特典——例えば一般の兵士たちとは違う黒一色の特別の制服に、はるかに改善された

---

<sup>13</sup> ニコラス・ファレル著 柴野均訳『ムッソリーニ 上』（白水社、2011年）P.149 及びコ  
ラリーツィ前掲書 P.78

<sup>14</sup> ファレル同書 P.148

<sup>15</sup> ファレル前掲書 P.148

食事、特別手当、雑役の免除など——が与えられ、他の兵士たちから尊敬と羨望のまなざしで見られる存在であった。そして、アルディーティ自身も自己の勇敢さと、危険な任務を担うことを誇りに抱いていた。<sup>16</sup>

一方で、世間ではアルディーティには犯罪者や悪党が多いという悪評が流れており、彼らに偏見の目を向ける者が多かった。<sup>17</sup>上層部にとっても、アルディーティの勇猛さや血気盛んな気質は戦争中であれば頼もしいものであったが、戦後の平和な社会では厄介な存在でしかない。なによりもその荒々しさが政治団体に利用されることをもっとも危惧していた。戦争後、アルディーティ部隊は各地で解体されるか、国外の植民地駐留軍に追いやられることとなった。<sup>18</sup>

戦争中、他の兵士たちに比べてずっと危険な任務を担い、凄惨な思いをしたにもかかわらず、上層部からは邪魔者扱いされ、市民からは冷たい目を向けられる。このような状況に対して、アルディーティはイタリア - アルディーティ協会を結成し、団結して状況の打開を目指すこととなる。そして、協会への支援を表明したのが、未来派の機関誌『未来主義ローマ』*Roma futurista*であった。そして、未来派とアルディーティの結合に、ムッソリーニが乗ることになる。ムッソリーニも『イタリア人民』紙を通じてアルディーティ協会を支援していくようになり、そしてアルディーティを仲立ちとして、未来派とも結びついていく。

そして、1919年3月23日、ミラノのサンセポルクロ広場で行われた集会で、ムッソリーニは後のファシスト党（国家ファシスタ党 **Partito Nazionale Fascista**）の源流であるイタリア戦闘者ファッシ **Fasci italiani di combattimento** を設立する。この集会には、マリネッティも弁士として熱弁をふるい、またアルディーティ達も多く参加していた。

かつての参戦派が結集する中、衝撃的な事件が起きる。発端は、1919年9月10日にイタリアを含む連合国（協商国）とオーストリアが締結したサンジェルマン講和条約であった。講和条約において、オーストリアはイタリアにいわゆる「未回復のイタリア」と称される地域——トレンティーノ、ヴェネツィア・ジューリア——とイストリア、ダルマチアの一部を割譲することに応じたが、フィウメは含まれなかった。同年6月にオランダから首相を引き継いだニッティ (**Francesco Saverio Nitti, 1868~1953**) は、フィウメ領有を

---

<sup>16</sup> 藤岡寛己『原初的ファシズムの誕生』（御茶の水書房、2007年）PP.39-41、P.50

<sup>17</sup> 藤岡同書 P.51。

<sup>18</sup> 藤岡同書 PP.55-56

主張し続けてイタリアが国際的に孤立するようになることの方が不利益だと意識して、サンジェルマン条約を締結した<sup>19</sup>のだが、当然のようにナショナリストたちから強い反発を受ける。また、帰趨が決まっていなかった当時のフィウメは、イタリアを含む連合国軍が軍事占領していたのだが、1919年7月にイタリア軍はフランス軍と軍事衝突し、フランス軍側に9人の死者を出す不祥事を起こしていた。<sup>20</sup>連合国軍は、フィウメに駐留するイタリア軍の削減を言い渡し、イタリア側はフィウメ領有が遠退くことに危機感を覚えていた。そして、サンジェルマン条約への反発とそこから生じる危機感は、フィウメ占領という最悪の結果を招く。

1919年9月12日、詩人ガブリエーレ・ダンヌンツィオは、イタリア軍から脱走した兵士の他、未来派や帰還兵らを率いて、フィウメを占領。フィウメ駐留イタリア軍司令官は最初、兵を率いて進軍して来たダンヌンツィオに対して引き返すよう命じたが、ダンヌンツィオが拒絶するとそれ以上は手を出さず、それどころかダンヌンツィオをフィウメ市内まで護衛する有様だった。<sup>21</sup>占領後、ダンヌンツィオはフィウメのイタリア併合を宣言する。

ニッティ首相はもちろん、これを認めるわけにはいかず、ダンヌンツィオの行動を非難するが、すぐに鎮圧には向かわなかった。ダンヌンツィオの「義挙」にイタリア世論は沸騰しており、なによりも軍によるクーデタへの恐れもあって、武力鎮圧というカードは切りたくても切れない状態であった。ニッティはイタリア軍にフィウメを封鎖することだけを命じて、受動的な姿勢に甘んじることを選んだ。<sup>22</sup>結果として、ダンヌンツィオによるフィウメ占領は一年近くに及ぶこととなった。その間ダンヌンツィオは、革命的サンディカリストであるアルチェステ・デ・アンブリス (Alceste De Ambris, 1874~1934) を内閣首班に指名し、1920年8月31日にカルナーロ憲章 *Carta del Carnaro* を発表。<sup>23</sup>そして、イタリア王国保護下のフィウメ政府としてカルナーロ＝イタリア執政府 *Reggenza Italiana del Carnaro* を樹立した。

1920年11月、ニッティの後を継いで首相となったジョヴァンニ・ジョリッティ（五度

---

<sup>19</sup> 北村・伊藤前掲書 P.129

<sup>20</sup> 北村・伊藤前掲書 P.130

<sup>21</sup> コラリーツィ前掲書 P.78

<sup>22</sup> ファレル前掲書 PP.163-164

<sup>23</sup> 藤岡寛己「フィウメ占領期にみる革命的サンディカリズム——A・デアンブリスとカルナーロ憲章」(『駿台史学』第113巻、明治大学史学地理学会、2001年) P.37

目の首相登板である)が、ユーゴスラヴィアとラパッコ条約を締結する。イタリアはイストリアを獲得する一方で、フィウメについては独立した自由市とさせることで合意した。この条約を受けて、ジョリッティはダンヌンツィオにフィウメから撤退するように勧告するが、ダンヌンツィオは拒否。1920年12月24日、ジョリッティはイタリア軍に鎮圧を下命する。ダンヌンツィオ一隊の司令部が設けられたフィウメの宮殿にはイタリア艦隊からの砲撃が命中し、また陸からもイタリア陸軍がフィウメへの進撃を始める。四日後、ダンヌンツィオ側は52人の戦死者を出した後に、投降した。<sup>24</sup>

### (3) 「赤い二年間」

ダンヌンツィオによるフィウメ占領と並行して、イタリア国内では第一次世界大戦後の混乱が頂点に達する状況——いわゆる「赤い二年間」と称される混乱状態に陥っていた。前述したように、大戦後のイタリアはすさまじいインフレーションに見舞われており、また第一次世界大戦終結に伴う企業の業務縮小により、大量の失業者が発生していた。そういう不穏な社会情勢に、肥料不足に端を発する食糧不足という難問が加わる。食糧不足を解消するために、以前よりも多くの食料を国外から輸入する必要があった。また、第一次世界大戦を通じて発展した様々な工業——例えばフィアットのような自動車メーカーをはじめとする機械工業や製鉄業など——には原材料が必要で、それも国外に依存する状態である。その結果として、イタリアの対外負債は膨れ上がり、<sup>25</sup>イタリアの金準備の資金は外国に流れていく。当然、通貨の価値も下がり、インフレーションは進む一方であった。そして、食糧不足と物価高騰という二重苦によって、以下に述べるように騒擾事件が次々と引き起こされた。

1919年春、騒乱はまず農村から始まった。食糧不足もさることながら、イタリア中南部で未だに残っていた旧態依然とした農村社会——すなわち大規模地主と、土地に縛り付けられた小作農の関係——に対する抗議が、農民たちに騒乱への参加を促す要因となっていた。さらには、第一次世界大戦中、イタリア軍上層部は兵士たちの士気を鼓舞するため、戦勝の暁には褒美を与えると宣伝していたことも、騒動の遠因であった。農村出身の兵士たちは当然、「褒美」とは土地だと考えていたが、大戦が終わっても「褒美」は一向に渡さ

<sup>24</sup> ファレル前掲書 P.180

<sup>25</sup> 1920年時点でのイタリアの対外負債は、対アメリカで20億ドル、対イギリスで4億ポンド近くになっていた。(コラリーツィ前掲書 P.86)

れる気配がない。そこで、農民たちは社会への抗議と、何よりも「褒美」を受領するために次々と土地を占拠していった。政府は、これらの農民を鎮圧することは政府にとって必ずしも得策ではないと考え、1919年9月に農民たちが占拠した土地の内、未開墾地や粗放地の部分的な所有を認める政令を発して、騒乱の沈静化を図る。<sup>26</sup>しかし、地主側からすれば、この政令は農民におもねったものでしかなく、政府への不信感を募らせることとなった。一方で農民側にとっては自分たちの勝利であり、彼らはますます勢いづき、地主を襲撃するような事件も起きるようになった。

そして、騒乱は都市部にも飛び火する。特にイタリア北部の工業都市トリノでは、のちのイタリア共産党創設者の一人であるアントニオ・グラムシ（Antonio Gramsci, 1891~1937）らが1919年5月に創刊した雑誌『オルディネ・ヌオーヴォ』*Ordine Nuovo*で提唱されたソヴィエトに範をとった工場評議会が各社の工場で次々と組織され、労働者による権力奪取を目指す運動を展開していった。運動は1920年3月から4月にかけて、夏時間復活に反対する労働者の抗議をきっかけにトリノ全域でのゼネストという形に発展していくものの、工場評議会運動に否定的な労働組合主流派による圧力により、運動はしぼんでいった。しかし、経営者側は工場評議会運動をはじめとした諸種の労働組合運動が活発になり、過激化することを恐れていた。1920年5月、労働組合側の要求に対して、経営者側は過激な運動に発展することを恐れて工場を閉鎖することで応じたが、これが本当の意味での「過激な運動」に繋がることになる。

工場閉鎖という対応に労働者たちは反発し、農民たちに倣って、1920年8月から9月にかけて工場を次々と占拠していった。労働者たちは雇用主を締め出し、工場の自主管理を始めるようになる。その動きは北部イタリアをすぐに覆い、瞬く間に中南部にも波及していった。1920年9月のまるまる一ヶ月間は、各工場に赤旗が翻り、イタリアはロシアに続いて社会主義革命が成功するかもしれなかった。しかし、全国規模で運動を指導するには、その組織やカリスマ的指導者が欠如しており、また元来運動を指導できる立場にあった社会党や労働組合の内部では、グラムシの工場評議会運動を巡って意見が対立した。その結果として、工場占拠は長引くことはなく、同年6月に首相となったジョリッティによる労使間の斡旋もあって、工場占拠は一月ほどで自然に沈静化していき、「赤い二年間」も終わりを迎える。<sup>27</sup>

---

<sup>26</sup> コラリーツィ前掲書 P.87

<sup>27</sup> 北村・伊藤前掲書 P.135



前述したように「赤い二年間」は、イタリアが最も社会主義革命に近づいた時期であった。しかし当時、勢いに乗っていたのは、労働者や農民、そして社会主義者ばかりではない。ダンヌンツィオらナショナリストのグループも昂揚していたし、何よりも結成して間もないムッソリーニ率いるイタリア戦闘者ファッシ——ファシストも活動を盛んにしていた。ファシストは、その矛先を社会主義者に向けていた。

1919年4月15日、ミラノにおいて、ファシストとナショナリストたちは、デモ行進する社会主義者たちに襲いかかった。ファシストたちは社会主義者たちとの大乱闘の末、社会党機関紙『アヴァンティ！』編集部を襲撃し、放火する事件を起こす。11月には、社会党が行った王制反対のデモに対する懲罰として、再びファシストが社会主義者たちを襲った。このときには、ファシストが社会党所属の下院議員を「大逆罪に対する罰」と称して暴行を加える事件まで起こしていた。もっとも、社会主義者は相次ぐファシストの襲撃を深刻には受け止めていなかった。1919年11月に実施された総選挙において、選挙制度が中小政党にも有利な比例代表制へと変更されていたにもかかわらず、イタリア戦闘者ファッシは一議席も獲得できていなかったからだ。それに対して、イタリア社会党は156議席を獲得し、議会第一党の地位を確保していた。<sup>28</sup>

だが、「赤い二年間」で引き起こされた騒動と、その間の社会党の伸張に、政府や保守主義者からは社会主義者に対する警戒心が強くなっていた。政府や保守主義者たちは、社会主義者のデモやストライキに対抗する集団として、ファシストを利用するようになる。その最大の証左が、1919年の総選挙後のムッソリーニに対する処遇だろう。総選挙後の11月18日、ムッソリーニの他35人のファシストが武器の不法所持で逮捕されたが、翌日には釈放されている。このあまりにも早い釈放には、裏で大手新聞社の『コリエーレ・セラ』 *Corriere della Sera*の共同社主ルイーギ・アルベルティーニ (Luigi Albertini, 1871~1941)<sup>29</sup>が首相であったニッティに釈放を働きかけたからであった。<sup>30</sup>

また、地主や自作農、サラリーマンや教師、自営業者といった中産階級もファシストを支持するようになる。というのも、第一次世界大戦後の経済的打撃は当然、都市部の中産階級にも押し寄せたが、中産階級には彼らを擁護する組織がなかった。労働者には、国政

---

<sup>28</sup> ファレル前掲書 P.171

<sup>29</sup> アルベルティーニは上院議員でもあり、第一次ムッソリーニ政権に対しては賛成票を投じている。しかし、1924年のマッテオッティ事件ではムッソリーニを批判し、また同年のアチェルボ法（選挙改革法）にも反対している。（ファレル前掲書 P.236, 281, 354）

<sup>30</sup> ファレル前掲書 P.174

政党である社会党や巨大な労働組合が存在し、労働者の権利を擁護し、彼らの要求を実現させていったが、中産階級には彼らを擁護する組織は何もなく、むしろ労働者が行うストライキやデモは彼らの生活を直接的にも間接的にも脅かす存在でしかなかった。そして、農村部における中産階級者である地主や自作農にとっては、「赤い二年間」は自分たちの生活をはっきりと脅かしていた。なぜなら、小作農や小規模自作農らは、勝手に土地を占領していき、一方で農村部の地方自治体（コムーネ）は時流に乗った社会党が掌握しており、社会党を支持する小作農や小規模自作農たちばかりに顔を向けていた。当然、中産階級は社会主義者への反発を強め、ファシストに期待するようになる。<sup>31</sup>

そして、青年層——特に学生を中心としたインテリ層は、積極的にファシストを支持し、ファシズム運動に参加していた。1921年時点で、ファシストの中で学生が占める割合は、13%にも達している。<sup>32</sup>多くの若者がファシストを支持した理由は、第一に彼らのうちの多くが第一次世界大戦に従軍した兵士でもあったからだ。上述したように、第一次世界大戦後、復員兵の多くは不遇を余儀なくされていたが、それは二十代の青年層であっても例外ではなかった。ファシズム運動には従軍経験のある青年の他に、第一次世界大戦時には徴兵年齢に達していなかった若者も多く参加していた。イタリア現代史家のシモーナ・コラーリーツィ（Simona Colarizi, 1944~）は、若者らがファシズムに引き付けられたのは、老人たちが支配する自由主義的な国家よりも、ムッソリーニが提唱する「違法的で、民族のかつ革命的」<sup>33</sup>な世界の方がずっと魅力的だったからだと分析している。

1920年11月、社会党が政権を取っていたイタリア北部の街、ボローニャにおいて、市民に挨拶をしようと市庁舎のバルコニーに出ていた市長に向かってファシストが発砲した。ファシストからの攻撃という事態に備えていた社会党の活動家は、それに反撃して市庁舎の窓から爆弾を投げて対抗。その結果、双方含めて死者9名、負傷者50名以上という惨事に発展する。もっとも、この事件はファシストによる社会主義者への攻撃の始まりにすぎず、一ヶ月後には同じく北部の街、フェッラーラで同様の事件が起き、そして他の街でもファシストは社会党系の自治体や組織への襲撃を行った。相次ぐ襲撃に社会党の地方組織は壊滅的打撃を受け、さらには社会党内部の対立と党の分裂（1921年1月には最大綱領派が離党し、イタリア共産党 *Partito Comunista Italiano* を結成）も相まって、社会党

---

<sup>31</sup> コラーリーツィ前掲書 PP.97-98

<sup>32</sup> コラーリーツィ同書 P.93

<sup>33</sup> コラーリーツィ同書 P.94

は次第に弱体化していく。

ファシストがブルジョワジーからの支援と社会主義者への暴力による攻撃で勢いを増す中、首相のジョリッティはムッソリーニ率いるファシストを議会に参加させることで、彼らをコントロールしようとしていた。というのも、議会では、ファシストの「横暴」が社会党所属の議員によって非難され、民主主義派やカトリック系の議員からも抗議への同調者が出始めていたからだ。一方で、県知事をはじめ、カラビニエリ（憲兵隊）、警察といった地方の国家機関は、度々社会主義者からの攻撃にさらされ、特に警察は社会党機関紙『アヴァンティ！』から散々侮蔑されており、社会主義者よりもファシストを支持する傾向にあった。<sup>34</sup>ジョリッティ自身の政治的スタンスは、本来左派寄りの傾向<sup>35</sup>を持っていたが、地方を抑えるためにはファシストをコントロールできる方が望ましかったし、他の右翼——特にフィウメ占領を敢行したダンヌンツィオを抑えるには、ムッソリーニの協力が不可欠だった。そして、ファシストも議員となれば、暴力的な要素を控えるようになるだろうと、ジョリッティは楽観的に考えていた。<sup>36</sup>

ジョリッティから差し出された手に、ムッソリーニはすぐにその手を掴んだ。ファシストはその勢力を急成長させたが、それは社会主義者という対抗勢力があったからだ。その社会主義者も衰退が著しい中、ファシストがいままでと変わらず暴力的な面を押し出せば、次に国民から見放され、衰退することが目に見えていた。また、急成長するファシストの中では、「ラス」（原義は、アムハラ語でエチオピアの地方豪族を意味する）と称された農業地帯におけるファシズム運動の指導者たちが力を持つようになっており、彼らを統制することが難しくなりつつあるのが現状だった。ファシストの衰退を回避し、ラスを抑え込み、ファシストを統制し、そしてムッソリーニ自身が政治的にのし上がるには、政界に打って出るのが最善だった。また、ファシストの暴力性は、次に述べるように選挙においては大いに有効であった。

#### (4) 「ローマ進軍」

1921年5月15日に実施された下院総選挙では、ムッソリーニ率いるイタリア戦闘者フ

---

<sup>34</sup> ファレル前掲書 PP.192-193

<sup>35</sup> ジョリッティは首相時代に、女性労働・児童労働保護法や年金法など社会立法の制定を推し進め、また鉄道事業や電信・電話事業の事実上の国有化を実現した。（北村・伊藤前掲書 PP.98-99）

<sup>36</sup> コラリーツィ前掲書 PP.105-106

ファッシは、ジョリッティ首相率いる「国民ブロック」の一員として臨んだ。選挙期間中は、ファシストの他者に対する暴力性を最大限に活用し、国民ブロック全体では定数 508 議席中 275 議席を獲得し、イタリア戦闘者ファッシは 35 人のファシストをその一角に送り込むことに成功する。左派では社会党が 122 議席、共産党が 15 議席、カトリック系の人民党が 107 議席を獲得した。<sup>37</sup>ジョリッティ派が選挙に勝利したように見えたが、選挙運動は「イタリア史上最も暴力的」なものであり、100 名以上の死者を出すような有様で、素直に喜ばなかった。<sup>38</sup>そうした挙句、ファシストはジョリッティ支持を撤回し、人民党も同調。ジョリッティは選挙で勝利したにもかかわらず、総辞職を余儀なくされる。後任首相には、ジョリッティ内閣で国防相を務めたイヴァノエ・ボノーミ (Ivanoe Bonomi, 1873~1951) が就任したが、脆弱な政権と言わざるを得ないものだった。

ムッソリーニは、自身を含めたファシストを国会に送り込み、旧体制の象徴ともいえるジョリッティを首相の座から引き摺り下ろすことに成功したが、彼にはファシストの統制という難しい問題が残っていた。1921 年 7 月には、北西部リグーリア地方の町サルザーナにおいて、ファシストがとうとうカラビニエリ (憲兵隊) と衝突し、ファシスト側に死者を出す事態になっていた。この事態に接して、ボノーミ首相が呼びかけた平和交渉にムッソリーニは加わり、ファシストによる暴力を抑え込む道を選んだ。8 月 2 日にはムッソリーニと一部の社会党議員との間で和平協定が調印される。<sup>39</sup>しかし、ラスたちの反対により協定はすぐに形骸化し、協定調印後も暴力事件は収まらなかった。9 月 7 日には、フェッラーラ支部書記長で、後に空軍大臣、リビア総督などを歴任することとなるイタロ・バルボ (Italo Balbo, 1896~1940) が、2000 人のファシストを集め、エミリア・ロマーニャ地方の都市ラヴェンナで暴れまわり、社会党系のクラブなどを襲撃し、放火するという事件を引き起こしていた。<sup>40</sup>

ここに来て、ムッソリーニは地方の指導者であるラスらに妥協し、和平協定を破棄することに決める。その代わりに、ムッソリーニはそれまで政治運動のための組織でしかなかったイタリア戦闘者ファッシを政党として再編成することを認めさせた。<sup>41</sup>11 月、国家ファシスタ党 PNF, Partito nazionale fascista が成立。政党としての成立に伴い、ラスは依然

---

<sup>37</sup> ファレル前掲書 P.194

<sup>38</sup> コラリーツィ前掲書 P.108

<sup>39</sup> ファレル前掲書 PP.198-199

<sup>40</sup> ファレル前掲書 PP.199-201

<sup>41</sup> ファレル同書 PP.201-202

として力を持つものの、ムッソリーニの指導権が確立され、ファシズム運動全体を容易に掌握できるように再編成される。

1922年2月、国内問題でボノーミ内閣は総辞職する。後任首相にはジョヴァンニ・ジョリッティが立候補し、六度目の登板になるかと思われていたが、人民党党首のルイーゲ・ストゥルツォ (Luigi Sturzo, 1871~1959) の強硬な反対で政権を得ることが叶わなかった。ジョリッティに代わって政権の座に就いたのは、ルイーゲ・ファクタ (Luigi Facta, 1861~1930) で、彼はジョリッティ派の中でも小物と見做される政治家である。<sup>42</sup>ファクタは行政面では確かな手腕を持っていたが、政局の動きを左右するような事態になれば常にジョリッティの指示を仰ぐ始末で、多くの人からはジョリッティの傀儡と見做されていた。<sup>43</sup>

1922年春頃から、完全武装したファシストが、ポローニャやフェッラーラといったポー川流域の主要都市を次々と占拠していく事件が起きる。ファクタ内閣は成立早々、内閣存亡の危機にさらされる。この暴挙を前に、ファシストに対する非難はほとんど起こらず、むしろ事件に対して何ら対応を施さなかったファクタ首相に非難が集中した。7月22日、ファクタは事件を防げなかった責任を取り、辞任したものの、適当な後任者が見当たらず、また誰も火中の栗を拾いたがらないため、ファクタは再び首相に任じられた。

その一方、社会党を中心とする左派はファシストに対する反撃として、1922年7月31日にゼネラル・ストライキの実施を宣言。しかし、それは最悪の一手だった。ゼネストは一般市民に「赤い二年間」をはじめとする混乱の時期を想起させ、左派に対する警戒心を蘇らせる。また、ファシストはゼネストを好機として勢いづき、左派に対する暴力を一層強め、労働組合の支部の他、社会党系の市庁舎もファシストに占拠されるという事態にまで発展した。ゼネストは、完全な失敗に終わり、左派の寿命をさらに縮めることとなる。<sup>44</sup>

左派の失墜と反比例して、ファシストの勢力はさらに伸張した。議会の一角を占め、また暴力を持つファシストを、イタリア政府は無視することが出来ず、次の政権にはファシストの参加が不可避だということは政府にとっては言うまでもないことだった。また、イタリア王室では、王太后マルゲリータ (Margherita, 1851~1921) はファシストを積極的に支持し、国王ヴィットリオ・エマヌエーレ三世の従兄であるアオスタ公アメデーオ

---

<sup>42</sup> コラリーツィ前掲書 P.112

<sup>43</sup> 藤澤道郎「ダンヌンツィオとローマ進軍」(イタリア学会『イタリア学会誌』32号、1983年) PP.1-2

<sup>44</sup> コラリーツィ前掲書 P.113

(Amedeo di Savoia-Aosta, 1898~1942) もファシストに接近しつつあって、こちらも無視できない。<sup>45</sup>一方で、ファシストの暴力を政府に向かわせれば、政権をファシスト自身の力で得ることも出来るような状況だ。ファシスト指導部はローマへの進軍を望んだが、そこにムッソリーニが待ったをかける。

ムッソリーニは当初、政権への合法的な参加を望んでいた。<sup>46</sup>いかにファシストの勢力が大きくなり、また暴力を有していたとしても、その戦力は合法的な暴力機関である警察やカラビニエリ、そして軍にはとうてい及ばない。また、ジョヴァンニ・ジョリッティが政権に返り咲く可能性もあった。ジョリッティは、1919年から20年にかけて起きたフィウメ占領において、人気作家であり国民的英雄であるはずのダンヌンツィオに容赦なく砲撃を加えた人物だ。その砲撃が、次はファシストに向く可能性もある。最悪の結果を回避すべく、ムッソリーニは政府側と水面下での交渉を行う。

しかし、交渉は二ヶ月程で終わりを告げる。1922年10月24日、ナポリで開かれた国家ファシスタ党(PNF)党大会において、ムッソリーニは政府に対して首相の座を要求する立場を明らかにした。そして二日後の10月26日には、ファシストに対してローマへの進軍を命じた。ファシストたちは10月27日夜12時に地方の諸都市に結集し、翌日ローマへの進軍を開始し、そしてローマ近郊の都市で集合する、という計画である。ムッソリーニは自身が編集長を務める『イタリア人民』紙編集部のあるミラノに戻り、そこから電話を通じて進軍の指示を出していた。<sup>47</sup>

もともと、ローマ進軍に参加したファシストは三万人にも満たず、その装備も拳銃やライフル、棍棒などの軽装備。それに対して、ローマ防衛の任に就いていたイタリア軍は2万8400人とファシストとそれほど変わりはないが、機関銃や装甲車を装備していて、ファシストを簡単に蹴散らすことが出来るほどだった。<sup>48</sup>イタリア軍という力を背景に、10月28日、ファクタ首相は閣議を開き、戒厳令の布告と、ファシストの進軍からローマを防衛することを決定する。ファクタは国王の下を訪れ、戒厳令への署名を求めたが、国王はそれを拒否した。国王が戒厳令を拒否したのは、イタリア人同士が相撃つことを望ま

---

<sup>45</sup> ロマノ・ヴルピッタ『ムッソリーニーイタリア人の物語』(中央公論新社、2000年) P.132

<sup>46</sup> コラリーツィ同書 P.114

<sup>47</sup> ファレル前掲書 PP.216-218

<sup>48</sup> ファレル同書 PP.220-221

なかったためだと言われている。<sup>49</sup>

同日、ファクタは首相を辞任。翌 29 日、国王はムッソリーニを新首相に任命し、10 月 31 日に第一次ムッソリーニ内閣が成立する。もっとも、内閣はファシストの独裁ではなく、大連立の態を取っていた。

ムッソリーニは上述したように力によって政権を得たが、法を捻じ曲げて奪取したわけではない。政権を得る過程については物議をかもしもすこともあり、種々議論すべきところもあるが、結果は国王による任命という合法的なものであり、そして、これからは合法的に物事を進める必要があった。国民は、政治的混乱とそれに端を発する暴力の連鎖が終わることを望んでいたからだ。しかし、合法的に進めるにしても、1922 年 10 月時点で PNF は三十万人の党員<sup>50</sup>を擁していたが、議会内における勢力はわずか 35 議席。この状況では、ファシストによる独裁政権への合法的移行は不可能であったし、法を捻じ曲げて政権運営することはもっての外のことだった。国内最大の武装勢力である軍の忠誠は、国王に向いているのだ。<sup>51</sup>そのため、ムッソリーニ内閣の成立には旧来の自由主義政治家が結党した自由党やキリスト教系の人民党といった諸党派との協力は不可欠であったし、また政治的混乱の終結を国民に印象付ける必要があった。その結果、第一次ムッソリーニ内閣は自由党とカトリック政党である人民党を連立政権に引き入れて、成立する。PNF からの入閣は三名に抑えて、PNF と他党との協力体制と、政治的和解を国民にアピールした。<sup>52</sup>

ジャーナリストのニコラス・ファレル (Nicholas Farrell) は、その著書である『ムッソリーニ』において、この第一次内閣が「彼の勝利が限定的なもので革命的でない現実を反映していた」<sup>53</sup>と評しているが、まさしくその通りと言えよう。

第一次世界大戦への参戦を巡る争い、大戦後の混乱、「赤い二年間」、そして左派とファシストの衝突と、イタリアは数々の混乱に見舞われたが、その混乱を利用する形でムッソリーニは地歩を固めて行った。そして、最終的には首相という地位に就く。もっとも、混乱を利用したツケを払わされるかのように、ファシストが対決姿勢を示していた旧体制の象徴である自由主義政治家との提携を余儀なくされたのは皮肉としか言いようがない。そ

---

<sup>49</sup> コラリーツィ前掲書 P.115 及びファレル前掲書 PP.223-224

<sup>50</sup> ファレル同書 P.233

<sup>51</sup> ローマ進軍当時のローマ防衛司令官は「国王と政府の命令であれば、どのようなものでもつねにしたがった」と発言したとされている。(ファレル前掲書 P.223)

<sup>52</sup> コラリーツィ前掲書 P.115

<sup>53</sup> ファレル前掲書 P.234

のツケを支払いながら、ムッソリーニは完全なファシズム体制への移行を目論み、1924年の総選挙では選挙法を PNF にとって有利な制度に改正した。さらにはそれまでと変わらず暴力も利用して、圧倒的多数を制した。1926年にはファシズムに反対する政党や組織を解散させる措置が閣議決定された。そして、1929年の総選挙では、選挙方式がファシスト党の最高機関であるファシズム大評議会が単一の候補者名簿を作成し、有権者はその名簿に賛成か否かを表明するだけという形に改められた。その選挙方式で行われた総選挙では、当然ファシストが全議席を占め、合法的に一党独裁体制へと移行する。

混乱と熱狂を利用し、示威行動によって生まれた政権は、次は熱狂を増幅させて合法的に独裁権を奪取していく。多くのイタリア国民は、「混乱」に辟易し、「熱狂」に喝采を送る。また、その「熱狂」に喝采を送ったのは、イタリア国民だけではない。ドイツにおいては、後にナチス・ドイツ総統となるアドルフ・ヒトラー (Adolf Hitler, 1889~1945) も「熱狂」という炎の中に飛び込んだ。ムッソリーニが政権を奪取した翌年、ドイツの政権奪取を目論んでミュンヘン一揆 (1923年) を引き起こす。では、この「熱狂」を同じ時期の日本人はどのように見ていたのだろうか。

第二章では、第一次世界大戦から 1920年代中頃の日本に焦点を当て、当時の日本の状況と、日本のマスメディアがイタリア・ファシズムをどのように見ていたのかを検証していく。



## 第二章

### (1) 第一次世界大戦下の日本

第一次世界大戦後のイタリアは、戦勝国でありながらも、戦勝によって得られた利益は南チロル地方やトリエステ、トレンティーノといったわずかな地域が得られたのみ。さらには、通貨リラの価値が開戦前の 1914 年に比べて四分の一にまで下落するすさまじいインフレーションに見舞われ、200 万人以上という膨大な失業者が発生。そういった状態の中で、第一章でも述べたように、わずかな除隊手当しか与えられなかった帰還兵が加わり、情勢はさらに不穏なものとなっていく。後に「傷つけられた勝利」と称される程、第一次世界大戦後のイタリアは傷つき、そして第一章で説いたように、混乱の中にあった。

では、同じ第一次世界大戦の戦勝国であった日本は、どのような状態だったのだろうか。下位春吉は 1924 年（大正 13 年）にイタリアから日本に帰国してから、日本国内においてファシズムについて積極的に世論に訴え始めるようになるが、その頃の日本のマスメディアや論壇の背景を検討する必要があるだろう。1920 年代の日本の世情について述べる前に、話の前提として、第一次世界大戦が勃発した 1914 年前後の日本国内の事情から概観していこう。

1914 年（大正 3 年）の日本政界は荒れていた。1 月、シーメンス社の日本海軍高官への贈賄事件——いわゆるシーメンス事件が報じられる。折しも行財政整理と国民負担の軽減を求める声が、議会だけではなく、全国各地で叫ばれていた中である。そして時の内閣は海軍の重鎮である山本権兵衛（1852~1933）が首班を務めており、しかも海軍は戦艦 4 隻、駆逐艦 16 隻、潜水艦 6 隻の建造計画 1 億 5400 万円が 1919 年度（大正 8 年度）までの継続費として議会で提出。世論の批判は大きなものとなり、さすがに山本内閣とこれを支える立場にあった立憲政友会も世論を座視することは出来ず、戦艦 1 隻分の建造費を削った予算案と、さらには減税案を議会上程して世論の慰撫に努めた。しかし、野党（立憲同志会、立憲国民党、中正会）はもちろん、貴族院からも批判の聲が上がり、貴族院では駆逐艦と潜水艦の建造費を全額削除した修正案が可決された。衆議院は修正予算案を否決したため、来年度予算が不成立となり、山本内閣は総辞職を余儀なくされた。<sup>1</sup>

後任首相として選ばれたのは大隈重信（1838~1922）だった。当初、いわゆる「元老」たちは、貴族院議長の徳川家達を後任首相に推したが、徳川家達はそれを辞退。次いで、枢密顧問官の清浦奎吾を推薦。大命が降下し、清浦は組閣に着手した。だが、議会から清

<sup>1</sup> 今井清一『日本近代史 II』（岩波書店、2007 年）PP.103-107

清浦内閣反対の声が上がり、さらには海軍が艦艇建造計画とそのための予算案の復帰を強く要求し、要求を受け入れられないならば海軍大臣の推薦を拒否するとしたため、清浦内閣は流産となった。そして、三人目として挙げられたのが、帝国議会開設以来の政党政治家であり、言論界や国民からの人気も高い大隈重信であった。大隈を推したのは、元老の一人である井上馨（1836~1915）だ。井上は、議会や世論から超然とする立場を取る官僚や藩閥を中心とする内閣——いわゆる超然内閣では、現下の世論が受け入れることはないと考え、一方で議会第一党である立憲政友会を中心とする内閣の場合、政友会の党利党略のための政権に陥ると危惧していた。そのため、官僚や藩閥政治家ではなく、また政友会系の政治家でもない大隈が適任だと考えたのである。<sup>2</sup>

4月、第二次大隈重信内閣が、立憲同志会と中正会の支援を受けて組閣。新内閣は、民衆からの圧倒的な人気で迎えられた。しかし、その大隈内閣も早々に暗雲が垂れ込めるようになる。大隈内閣は政綱として、政弊刷新と国民負担の軽減、そして国防の充実を掲げていた。<sup>3</sup>しかし、「国民軽減の負担」と「国防の充実」が矛盾することは誰の目から見ても明らかだった。「国民軽減の負担」——すなわち減税は与党である同志会と中正会、そして世論の望みであり、一方で「国防の充実」は大隈を首相に引き立ててくれた元老の望みであった。大隈が世論と元老の板挟みになっているところに、第一次世界大戦という「転機」が訪れる。

第一次世界大戦勃発を、井上馨は、「今回欧州の大禍乱は、日本国運の大発展に対する大正新時代の天佑」<sup>4</sup>と歓迎したと言われている。確かに、第一次世界大戦の結果、日本の国際的地位が向上したことは周知のことであり、まさしく「天佑」であることには違いなかったが、世論と元老の板挟みにあっていただけの大隈にとっても「天佑」であっただろう。

日本政府は、当時軍事同盟を結んでいた英国から参戦要請が正式に来るより前から、水面下で参戦に向けての交渉をしていた。1914年8月3日には、外務大臣の加藤高明（1860~1926）が駐日英国大使ウィリアム・カニンガム・グリーン（William Conyngham Greene, 1854~1934）と会談。グリーン大使が、もし香港など東アジアにおける英国の権

---

<sup>2</sup> 国立国会図書館蔵「望月小太郎関係文書 38 井上侯・大隈伯会見要領筆記」（1914年）より。筆記では、井上は「国論民意の赴く所に鑑み、二藩出身の人に此局面に立つは宜しからず」と考え、「最早今日となりては大隈伯を除くの外断じて此紛糾せる時局を収拾する人はないと云ふことを自分は発議したのである。」と強力に推した、と記されている。

<sup>3</sup> 松岡八郎「第二大隈内閣の施政(一)」(東洋大学法学会『東洋法学』24(2)、1981年) P.40

<sup>4</sup> 井上馨侯伝記編纂会編『世外井上公伝 第5巻』(内外書籍、1934年) P.376

益がドイツによって攻撃された場合は日本の援助を期待していることをほのめかし、これに対して加藤はその援助に積極的である姿勢を示した。明くる4日、臨時閣議を経た声明では、第一次世界大戦に対する厳正中立を表明しつつも、時局次第では日英同盟に基づいて参戦することを表明する。

日本側の動きに対して、英国の反応は微妙なものだった。8月7日における加藤—グリーン会談では、英国はドイツによる通商破壊作戦への対応にのみ限って、日本の参戦を求めた。英国は、欧州が戦渦に見舞われている中、日本が勢力を拡大するのではないかという疑念を抱き、日本の全面参戦を抑えようとしたのだ。しかし、日本側は限定的な参戦ではなく、全面参戦を望み、8月9日にはグリーン大使に日本の無制限の参戦を打診。この打診に、英国側は日本への警戒心を強くして、参戦依頼を撤回する。<sup>5</sup>

それ以降、日英間で参戦範囲を巡って交渉が続けられるが、交渉は難航。交渉を続けながらも、日本は8月15日にドイツに最後通牒を送付した。日本及びシナ海からのドイツ艦船の撤退と、ドイツが持つ中国権益を将来的に中国へ還付することを目的として、日本への無条件引渡しを求めた内容だった。もっとも、日本が最後通牒を送付した後でも、日英の間では、参戦範囲を巡る交渉が続いていた。8月23日、最後通牒に対するドイツからの回答はなく、日本はドイツに対して宣戦布告する。

参戦が決まった以上、挙国一致体制で臨むべし、という雰囲気は日本全体、とりわけ日本政界に蔓延する。減税を巡る政争は一旦休止となり、減税運動の旗を振っていた商工会議所も運動を中止した。政府から参戦に向けての軍事予算案が提出されると、衆貴両院において全会一致で可決される。出兵に関する関連法案も議会を通過し、参戦に向けての準備は大きな障害もなく、着々と整えられた。衆議院は野党である立憲政友会が過半数以上を占め、大隈内閣を支える与党の同志会及び中正会は少数であった。第二次大隈内閣成立当初は、少数与党では議会を乗り切るのは困難ではないかと予測されていたが、ふたを開けてみると、予想に反して乗り切ることが出来たのだ。第一次世界大戦は首相大隈にとって、まさしく「天佑」であった。

その「天佑」である第一次世界大戦であるが、東アジアにおける戦争は欧州における戦争と違って、呆気なく終わった。日本陸海軍は、(1)東アジアにおけるドイツ権益の中心である膠州湾租借地の攻略、(2)ドイツ東洋艦隊の撃破、(3)ドイツ領南洋諸島の占領——この

---

<sup>5</sup> 松岡前掲論文 PP.45-49

三つを目的にして、作戦を練り、軍を派遣する。<sup>6</sup>

目的(1)の膠州湾租借地攻略は、派遣軍の山東半島上陸と攻略準備に手間取りはしたものの、1914年10月31日に膠州湾租借地の中心である青島要塞への攻撃を開始。一週間後の11月7日にはドイツ青島守備軍は降伏を申し出て、戦闘は終結する。日本は膠州湾の攻略に成功した。目的(2)について、ドイツ東洋艦隊は日本の宣戦布告後、港湾封鎖を恐れて、すぐに根拠地の青島から離れ、ドイツ本国に向かっていた。日本海軍は英国海軍と共同してドイツ艦隊の索敵を行い、また通商保護の任務も負う。さらには、英国と協定を結び、ドイツ領南洋諸島の分割占領の実施を決め、10月中旬には目的(3)も達成された。東アジアにおける軍事行動は、通商保護任務を除けば、1914年中に終わったのである。一進一退の攻防を続け、長期消耗戦の様相を見せ始めた欧州と比べると、まさしく呆気ないものだった。

戦争が終わると、日本に再び政治の季節がやってきた。戦勝という看板を携えた大隈は、この機会に政友会の打破を狙う。12月になると第35帝国議会を開き、翌年度予算案を提出。この予算案には、陸軍二個師団増設（増師）のための予算が計上されていた。増師問題は、元老たち——特に陸軍出身の山縣有朋（1838~1922）にとっては悲願であったが、政友会にとっては鬼門であった。政友会を基盤として1911年に成立した第二次西園寺公望内閣は、この増師問題を巡って陸軍と対立し、内閣解散に追い込まれている。大隈は増師案を議会で議論させ、これを巡る形で議会を解散させ、政友会を打破する算段であった。政友会総裁の原敬（1856~1921）は山縣と折衝して、解散の延期を図ったが、結果は芳しくなかった。予算案は結局、政友会及び立憲国民党が反対したため否決となり、大隈は衆議院を解散する。

1915年3月に実施された第12回衆議院総選挙は、大隈の人気に加えて、大隈が汽車の停車駅ごとに行った「停車場演説」や、大隈自身の演説を吹き込んだレコードの配布など、斬新な選挙パフォーマンスを行った結果、与党・同志会は定数381議席中153議席を獲得し、第一党の地位を得る。その他、同じく与党の中正会は33議席、政府支持の無所属議員を合わせると、与党勢力は240議席で過半数を超えた。それに対して、野党の政友会は、1900年の結党以来保ってきた衆議院第一党という地位を引き摺り下ろされる形となった。もっとも、選挙後には政府による選挙干渉が問題となり、まず内務大臣の大浦兼武（1850~1918）が辞任。それでも批判は鳴りやまず、7月30日には内閣総辞職を決めるが、

<sup>6</sup> 松岡八郎「第二大隈内閣の施政(二)」(東洋大学法学会『東洋法学』25(2)、1982年) P.5

元老からの慰留を受けて、内閣改造だけに留めた。なお、増師案は総選挙後の議会で可決されている。

選挙干渉問題で揺れる大隈内閣の存立を巡って駆け引きが行われていた 1915 年中頃、経済界では輸出が急激に伸びていた。第一次世界大戦開戦当初は、戦争に対する不安と世界経済の混乱によって、日本経済も一時は不況に陥っている。しかし、第一次世界大戦が長期戦の様相を見せ始めると、欧州からは軍需品や食料品の注文が来るようになり、欧州諸国の植民地であったアジアからは欧州製品の代替として日本製品の需要が高まっていた。日露戦争（1904 - 1905）以降、日本の貿易収支は輸入超過であったが、1915 年以降輸出超過に転じている。また、開戦に伴ってドイツから化学製品の輸入が途絶えると、政府は法律を制定して化学工業育成に努め、国内における化学工業分野の発展を促した。発展は、化学工業分野のみならず、工業界全体に及んでいる。特に造船業は、大戦勃発に伴う物資輸送のため船舶の需要が高まり、さらにはドイツによる通商破壊作戦による連合艦隊の撃沈と相まって、海外からの受注が相次ぎ、目覚ましい発展を遂げた。船舶不足の余波は海運業にも波及しており、そこに日本からの輸出増大も加わって、日本は海運業世界第三位の地位に上昇。そして、船舶価格や輸送費の暴騰は、いわゆる「船成金」を登場させることとなる。当時の日本は、未曾有の好景気——いわゆる大戦景気に突入した。

好景気である一方で、日本は驚異的なインフレーションにも見舞われた。経済専門誌『東洋経済新報』の物価指数によると、1913 年時点を 100 とした場合、第一次世界大戦前の 1914 年 7 月末の平均指数は 90.9 とデフレーション気味であったのに対して、大戦後の 1918 年 2 月末には 199.2 と驚異的な伸びを見せている。当然、食料等は暴騰し、1914 年時点で内地米一石の価格は 15 円 50 銭だったのに対して、1918 年には 25 円 50 銭となっている。その他、小麦は一石 10 円 3 銭だったのが 24 円 39 銭に、大豆は一石 11 円 11 銭が 18 円 85 銭といずれも高騰した。<sup>7</sup>好景気といえども、その恩恵は成金などの富裕層に限られており、一般庶民にとっては大きな打撃であった。そして、庶民は闘争に打って出るようになり、この流れは 1918 年には米騒動という全国的な運動となり、時の内閣を倒すまでに発展する。

1914 年時点において、官庁統計による労働争議件数は 50 件、参加人数 7904 人だったのに対して、1917 年には労働争議 398 件、参加人員 57,309 人に膨らんだ。<sup>8</sup>そして、前

<sup>7</sup> 竹村民郎『増補 大正文化 帝国のユートピア』（三元社、2010 年）PP.86-87

<sup>8</sup> 今井前掲書 PP.157-158

述したように1918年には米騒動が発生する。富山県の主婦らが暴騰を続ける米価に憤り、米屋に押しかけ、米の安売りを要求したことがきっかけとされている。その動きは瞬く間に全国に波及した。

米騒動当時、首相を務めていたのは元帥陸軍大将の寺内正毅（1852~1919）だった。第2次大隈内閣は鉄道予算を巡って貴族院と対立。元老の山縣有朋が調停に入るが、予算案に関して貴族院に譲歩させる代償として総辞職を余儀なくされ、1916年10月に大隈内閣は総辞職している。さて、代わって首相の座に就いた寺内に待ち受けていたのが、米騒動である。騒動が全国に波及したことを知った政府は、8月13日には天皇から300万円の下賜金を奏請し、さらには政府も1000万円を出して米価抑制に充てたが、世論の反寺内内閣の高まりを収めることは出来ず、1918年9月21日に総辞職する。寺内正毅の後任首相として就いたのは、政友会総裁の原敬であった。原は外相と陸海軍相を除いた閣僚をすべて政友会党员で充て、本格的な政党内閣を築く。原敬はそれまでの首相と違って爵位を持たない「平民宰相」として世論の期待を背負って、登場したのである。

## (2) 原内閣から第二次憲政擁護運動へ

原内閣が成立して約二ヶ月後の1918年11月、第一次世界大戦が休戦となる。戦争景気に沸いていた日本は、休戦を受けて一時景気は後退するものの、大戦による欧州の被害が甚だしく、輸出の好調は続き、第一次世界大戦による好景気も続く。その最中の1919年、原内閣は選挙法を改正し、選挙人資格を国税10円以上収める男子から3円以上に引き下げられ、選挙制度も大選挙区制から小選挙区制に変更、さらには衆議院議員定数も増やした。選挙人資格の緩和により有権者数は150万人弱から290万人弱に増加したが、制限選挙は続くこととなる。もちろん、普通選挙への移行を求める声は依然として高く、全国で普通選挙を求める運動が盛り上がっていた。翌1920年になると普通選挙法案が議会に提出されるが、野党の憲政会と国民党、そして超党派の普選実行会の三者がそれぞれ別個の普選案を提出していたのだ。本来なら一本化すべきだが、憲政会が自党案で一本化すべしと譲らず、まとまりがつかなかったためである。

さて、提出された普選法案に対して、原内閣は選挙法が改正されたばかりであるのに、総選挙を経ることなく、さらに選挙法を改正するのは如何かという点で反対する。そして本会議において、憲政会の島田三郎（1852~1923）が憲政党案の説明中に「階級制度の打破」という言葉を使ったため、原は「階級制度の打破」という重要な事柄ならば国民の判

断が必要だとして、衆議院を解散させた。<sup>9</sup>普選法案は流産となり、普通選挙制度の施行は1924年の加藤高明内閣まで待つこととなる。

1920年5月に実施された第14回衆議院総選挙は、定数464議席中、立憲政友会は278議席を獲得し、過半数以上を制した。憲政会は解散前の118議席から110議席に、国民党も同じく31議席から29議席にと、それぞれ議席を減らした。政友会が過半数を制することが出来たのは、ひとつには好景気と米騒動でも見られたように米価高騰により、政友会の支持基盤である農村地主の所得が増大したためである。もうひとつには、衆議院定数が増えたにも関わらず、憲政会は211名の候補者しか立てられなかったこともある。<sup>10</sup>

原内閣は衆議院で絶対多数を獲得して、さらには貴族院内の最大会派である「研究会」との連携しており、安定した政権運営が約束されたかに思えた。しかし、この頃には大戦景気はしぼみ、戦後恐慌と称される不況に突入していた。また、満鉄疑獄をはじめとする政友会のスキャンダルが相次いで発覚。スキャンダルに対する非難の声は日に日に高くなっていき、1921年になると陸軍大臣の田中義一（1864~1929）が狭心症を理由に辞任の意向を示したことで、原内閣は政権末期の様相を見せ始めた。さらには財政政策を巡って、積極財政を唱える大蔵相高橋是清（1854~1936）と、健全財政を唱える農商務相山本達雄（1856~1947）が対立。また、高橋は高等教育機関増設を巡って文部相の中橋徳五郎（1861~1934）とも対立していた。そして、追い打ちをかけるように宮中某重大事件が起きる。皇太子裕仁親王（後の昭和天皇、1901~1989）の妃に内定していた久邇宮良子女王（後の香淳皇后、1903~2000）の家系が色盲であるとして、元老の山縣有朋らが婚約辞退を迫った。この事件に対して、原は明確な態度を示さず、国粹主義者からの反感を買うこととなった。そして1921年11月4日、原は東京駅で暗殺される。

同年11月13日、高橋是清が新首相に任命され、高橋内閣が組閣された。また、立憲政友会総裁の地位も高橋が引き継いだ。しかし、首相が高橋に変わっただけで、蔵相を含め原内閣の閣僚は書記官長を除いて全員留任（蔵相は高橋が兼任）。そのため閣内の対立は、そのまま引き継がれることとなった。また政友会内において、高橋ら党人派と山本達雄を中心とする官僚派の対立が先鋭化していた。1922年5月、高橋は内閣改造を行って閣内対立の解消を図るが、中橋文相、山本農相、そして鉄道相の元田肇（1858~1938）が内閣

---

<sup>9</sup> 望月和彦「大正デモクラシー期における政界再編」（桃山学院大学『桃山法学』(15)、2010年）P.100

<sup>10</sup> 望月前掲論文 P.101

改造に反対。反対を受けて、高橋は内閣改造問題を保留として先送りにしたが、6月になると再度改造の意向を示した。このときも中橋と元田は改造に反対に回ったため、高橋は閣内不一致を理由に内閣総辞職を選んだ。もっとも、政友会は引き続き高橋に大命が降下するであろうと考えていたが、読みは外れ、代わって首相に任じられたのは、寺内、原、高橋の三内閣で海軍相を務めた海軍大将加藤友三郎（1861~1923）であった。

加藤友三郎を首相に推したのは、元老の松方正義（1835~1924）と枢密院議長の清浦奎吾である。元老らが軍人の加藤を選んだのは、党内の内紛を収められず、内閣を瓦解させた高橋に首相を続けさせることを躊躇したためだった。一方で松方は、加藤友三郎が組閣を辞退する場合を考慮して、その場合は憲政会の加藤高明を奏薦することを考えていた。加藤高明が首相に就任する可能性があること知った政友会は、憲政会に政権が渡ることを回避するため、加藤友三郎に閣外協力する旨を伝えて、大命拝受するよう説得。加藤友三郎は説得を受け、組閣する。<sup>11</sup>

しかし、加藤友三郎は1923年8月に急逝。加藤友三郎内閣の後継として大命が降下したのは、海軍の山本権兵衛であった。さらに第2次山本内閣が1923年12月に摂政皇太子裕仁親王が社会主義者から狙撃を受けた事件——いわゆる虎ノ門事件の責任を取り辞任すると、枢密院議長の清浦奎吾が政権を継いだ。憲政会に政権が渡ることを厭って、非政党系の加藤友三郎内閣を選んだ政友会だが、その代償なのか、三代に渡る貴族院系内閣の組閣を許すこととなる。そして、高橋内閣瓦解の原因となった政友会内の内紛は未だ続いており、衆議院で絶対多数の勢力を誇りながら政権を取れないことは、内紛に拍車をかけることとなった。そして高橋総裁が清浦内閣不支持を決めると、床次竹次郎（1867~1935）ら官僚派が反発して政友会から離党。政友本党を結成し、清浦内閣に閣外協力する立場を取った。

これに対して政友会は、憲政会、革新倶楽部の呼びかけに応じて護憲三派を結成し、清浦内閣打倒を掲げ、第二次憲政擁護運動を展開する。もっとも、世論の盛り上がりは欠けていた。三党は政党内閣確立で提携したものの、具体的な内容はなく、普通選挙については合意すらできていないという惨状。長年普選実施を避けてきた政友会は、普選に関しては各候補者の自由意思に任せるという態度を取り、憲政会と革新倶楽部は普選実施を訴えていたが、保守派、官僚派の牙城である貴族院の改革には躊躇していた。そもそも、憲政会には総裁（加藤高明）、副総裁（若槻礼次郎）が揃って貴族院議員である。

---

<sup>11</sup> 望月前掲論文 P.109



そして打倒の対象である清浦内閣もひ弱な内閣といえた。そもそも清浦は 1924 年 1 月 1 日に大命を拝受したものの、組閣に難航したため、1 月 3 日には大命拝辞の意向を漏らしている。しかし、貴族院内の最大会派である「研究会」が清浦内閣支持を表明したため、清浦は大命拝辞を翻すことにしたが、閣僚人事を研究会に一任する始末。そして、1924 年時点で唯一残った元老である西園寺公望も、清浦内閣は目前に控えた衆議院総選挙を中立的に施行するための選挙管理内閣としてしか考えていなかった。<sup>12</sup>

1924 年 1 月 31 日、護憲三派は内閣不信任案を提出。議会は混乱し、その混乱を收拾することを目的に清浦内閣は衆議院を解散する。総選挙は、1923 年 9 月 1 日に発生した関東大震災の影響で、選挙人名簿作成に時間がかかったため、1924 年 5 月 10 日に実施された。

選挙結果は、護憲三派の大勝に終わる。定数 464 議席中、護憲三派は合わせて 284 議席を獲得。護憲三派を構成する三党の内、憲政会は 154 議席、政友会は 101 議席、革新倶楽部は 29 議席を得ており、政友会を抑えて、憲政会が比較第一党の地位に躍り出た。これに対して、清浦内閣支持に回った政友本党は、与党という立場にありながらも、解散前の 140 議席から 114 議席に議席数を減らすことになった。

総選挙後、清浦内閣はすぐに総辞職はせず、居座りを画策して多数派工作を行ったが、実を結ばず、6 月 7 日に総辞職。6 月 9 日、憲政会総裁加藤高明に大命が降下し、護憲三派連立の加藤高明内閣が組閣される。長年の懸案であった普通選挙法も 1925 年 3 月に成立した。これ以降、1932 年に犬養毅内閣が瓦解するまでの約八年間、政党内閣が続き、西園寺公望は「憲政の常道」としてこれを支援する立場を取った。

### (3) 1920 年代の日本におけるファシズムに対する視線

さて、加藤内閣成立の二年前である 1922 年、イタリアではベニート・ムッソリーニが政権を獲得したが、その手法は第一章でも述べたように、力を背景にした政権奪取だった。また、加藤内閣成立の同年である 1924 年 4 月に実施したイタリア下院議員総選挙では、選挙法を与党・国家ファシスト党 (PNF, Partito nazionale fascista) の有利なように改正し、さらには暴力も使い、議会の三分の二を手中に収めている。ムッソリーニの手法を、当時の日本人はどのように見ていたのだろうか。

ムッソリーニの名が日本の新聞紙上に初めて名前が挙がったのは、おそらく 1919 年 12

---

<sup>12</sup> 望月前掲書 PP.114-115

月 10 日付『東京朝日新聞』朝刊であろう。「伊国噂の新帝」という見出しで、次のような記事が掲載された。

伊国皇帝の従兄弟アオスタ公即位せんと風説傳へられたりアオスタ公はダヌンチオ氏と通ずるミロ提督と関係ありて消息通間の注意を惹き居たる人物なり然るに此風説に關係ある事実としてミラン電報は報じて曰くポポロ・ヂタリア紙社長にして急進派軍人党首領たり且つ国民党员たる上ダヌンチオ氏の友たるベニトムツソリニ氏は兵隊上りにてアルヂッチ壯士団長なるヴェクチ大尉及未来派の詩人マルネッチ氏と共に起訴されたり憲法を改正し政府を乗取る目的にて騒動を醸さんと一軍閥を組織せし廉を以てなりと因にボロニヤ、ネーブルス等には過激派の同盟罷業あるも目下大勢は平穩なり<sup>13</sup>

当時のイタリア国王はヴィットリオ・エマヌエーレ三世であるが、彼に代わって従兄のアオスタ公アメデーオが新国王に即位するという風説が流れた、その背後にムッソリーニという男が関係している、という記事である。ムッソリーニに関して、当時の新聞は「ポポロ・ヂタリア紙社長にして急進派軍人党首領たり且つ国民党员」と紹介している。1919年12月時点で、ムッソリーニは自らが主宰する新聞社『イタリア人民』*Il Popolo d'Italia* 編集長であり、イタリア戦闘者ファッシ *Fasci italiani di combattimento* の中心であった。新聞中の「急進派軍人党」とは、イタリア戦闘者ファッシのことだろう。しかし、最後に「国民党员」とあるが、この「国民党」という政党はカトリック系政党である人民党を指していると思われる。しかし、ムッソリーニが人民党に関わっていたという事実はない。

いずれにせよ、1919年にムッソリーニは初めて政治的人物として日本の新聞に取り上げられたが、ムッソリーニが注目されたのは同じ時期にフィウメ占領を敢行していたガブリエーレ・ダンヌンツィオとの関係と、「兵隊上り」という意外性であったためだろう。また、「憲法を改正し政府を乗取る目的にて騒動を醸さんと一軍閥を組織せし廉を以て」起訴されたという記述から、ムッソリーニを革命志向の過激派と見做し、ムッソリーニに対して批判的な立場をとっていることが伺える。

ファシストという言葉は、1921年3月5日付『東京朝日新聞』朝刊の「フロレンスに猛烈な市街戦」という記事において、はじめて登場した。記事では、ファシスト（イタ

<sup>13</sup> 1919年12月10日付『東京朝日新聞』朝刊2面

リア戦闘者ファッシ) のことを「極端愛国団体」<sup>14</sup>と説明。これ以降、新聞紙上においてファシストは「国粋党」や「国粋団」という訳を与えられ、イタリア情勢を伝える記事に度々登場するようになる。

また、1921年7月31日付『東京朝日新聞』朝刊に「伊国の新結社ファスシスチ団」という題で、ファシストを紹介する署名付きの記事が掲載された。記事を書いたのは船尾栄太郎(1872~1929)である。船尾は和歌山県出身の実業家で、慶應義塾を卒業後、三井銀行、三井物産、大日本製糖など経て、三井信託副社長に就任している。

船尾の記事は、まず1919年から20年にかけての「赤い二年間」と称される社会主義勢力の伸長と彼らが引き起こしたストライキや暴動の頻発を挙げ、それを収拾したのが当時の首相のジョヴァンニ・ジョリッティであること、そして社会主義者を抑えるために、ジョリッティはダンヌンツィオを操り、一方で「ファスシスチ団」を使って、社会主義勢力を打破した——という内容である。そして、「ファスシスチ団」を以下のように説明している。

……昨秋から今春にかけて伊太利全国に亘つて甚だしい社会不安の裡に毅然として強力なる一の反抗運動が起こつた止むに止まれぬ公共心の発露と唱へ一の団体が出来た。之が忽ちの中に全国を風靡し今年三月頃には已に会員の数三百五十万人となり、秩序を保ち法律を維持し、一時此国の天空に墨の如き暗雲を漲らした過激派分子を片端から掃討し遂に全然屏息せしむるに至つた。此団体は自らを称してファスシスチといふ。

ファスシスチ団の目的とするところは法律秩序の維持と政府の権力の支持にありといふ。ファシスチの名に因つて来るところは羅馬の古代国家の威力の表示として執政官の前にリクトルが手にした東樺<sup>ファッシ</sup>から取つたものである。<sup>15</sup>

船尾は、イタリア政府がダンヌンツィオやファシストといった右派勢力を裏で操っていると考えたのだろう。しかし、実際は第一章でも述べたように、ジョリッティにとってダンヌンツィオは社会主義者と同様に「抑え込む」対象であり、ファシストはダンヌンツィ

<sup>14</sup> 1921年3月5日付『東京朝日新聞』朝刊5面

<sup>15</sup> 船尾栄太郎「伊国の新結社ファスシスチ団」(1921年7月31日付『東京朝日新聞』朝刊3面)

オを牽制するためのカードの一つでしかない。そして、記事中ではファシストを「法律秩序維持と政府の権力の支持」のための団体と説明しているが、ファシストもまた社会で暴れ狂う「過激派分子」のひとつであり、政府にいつ弓を引くかわからない存在であった。

1922年になると、ファシストはさらに活動的になり、ファシストを率いるムッソリーニはイタリア政界の動向を左右する人間の一人となる。それに伴い、日本においてもムッソリーニやファシストに関する情勢を伝える記事は多くなり、また詳しく述べられていくようになった。例えば、『東京朝日』は1922年8月22日付朝刊において「暴れたファスチ 革命気分の伊太利」という無署名の記事を掲載。その内容は、先に紹介した「伊国の新結社ファスシスチ団」と比べると文字数は少ないものの、より詳しく、またより正確にムッソリーニやファシストに関する事柄を伝えていた。例えば、ムッソリーニはかつて社会党員であったこと（この点に関しては、「伊国の新結社ファスシスチ団」も、さらには1919年12月10日付『東京朝日新聞』朝刊の記事「伊国噂の新帝」でも取り上げられていない）、1919年から20年にかけての「赤い二年間」では、社会主義者に対して暴力で対抗したこと、そしてこの暴力の連鎖にイタリア政府は何ら有効な対策を為し得なかったこと——などを列挙。そして、次のように述べている。

◇ファスチの政綱なるものは曖昧だ、彼等はプログラムを提ぐるよりも拳骨を振り上げてゐる。昨年五月の総選挙のために政綱らしいものを作つたが、それは社会主義者、サンヂカリスト及国権主義者の所説を接ぎ合せ、捏まぜた速成品であつた。彼等の標榜は矢張り社会主義者、共産党員の跋扈抑圧に在るといふ方が早分りする、ただ彼等が最近革命的（反政府的）傾向を帯びて来たとは注目を要する<sup>16</sup>

ファシストが暴力主義的な組織であることを重ねて説明し、また「彼等が最近革命的（反政府的）傾向を帯びて来た」として、ファシストによるクーデターの可能性を示唆し、注意を呼び掛けている。そして、その注意は約二ヶ月後に現実のものとなった。

イタリア時間1922年10月28日午前、時のイタリア首相であるルイージ・ファクタは、ムッソリーニが仕掛けたローマ進軍という暴力の誇示を前に為す術も無く、辞職。その情報は、日本時間1922年10月29日付『東京朝日』朝刊の社説欄に「伊太利の政変」と称して早々に載った。社説ではファクタ政権瓦解の原因はファシストによる暴力が原因であ

---

<sup>16</sup> 1922年8月22日付『東京朝日新聞』朝刊2面

り、ファクタ自身について「非常に卓抜した人物では無いけれど、今日傑在欠乏せる伊太利政界殊に辣腕家が恵まれるを甚だしい同国の現状では、氏は首相として不適當な側ではなかつた」<sup>17</sup>として擁護。そして、後任首相については、ジョヴァンニ・ジョリッティ、フランチェスコ・サヴェリオ・ニッティ、ヴィットリオ・エマヌエーレ・オルランドのいずれかが選ばれるだろうと予測している。朝刊の締め切り時刻を考えれば、この記事は日本時間 10 月 28 日夜頃、イタリア時間 10 月 28 日昼頃に書かれたのであろう。まだ後任首相は決まっていない時間帯である。ムッソリーニが後任首相に決まったのは、イタリア時間 10 月 29 日朝のことだ。後任首相が誰となったのかを未だ知らない記者は、以下を結びとしている。

……然も是嘗て民間の守旧的暴力を以て革命的暴力を制せんとした伊太利為政者の小策の罪なることを思ふと、後の政治を執るものゝ、大に以て戒めとす可き所なるを感ぜざるを得ぬのである。<sup>18</sup>

この無署名記事の筆者は、ファシストは社会主義に対する反動でしかなく、その反動を利用して社会主義勢力の伸長を抑え込もうとした当時のイタリア政府の対応は、小手先の対応でしかないと非難。イタリアの後任内閣に、そしておそらくは日本の為政者にも、安易に暴力を頼らないように求めている。

1922 年 10 月 30 日、イタリアにおいてはムッソリーニ内閣組閣に向けての準備が着々と進められている中、同日付『東京朝日』朝刊には「国粹団内閣が果たして成立せば代議政体の危機」という見出しが躍った。記事では、冒頭で「伊太利政変は報道区々で判断の仕業に苦しむが……」と述べ、情報が錯綜している点を提示。その上で、未確認情報と前置きして、ムッソリーニがイタリア国王に招かれていることを記し、もしムッソリーニ内閣が成立しても、議会におけるファシストの議席数は十数名にしか及ばない、そんな少数政党の党首を首相にすることは「代議政体の危機」である——と記述。もっとも、記事は続けて、いずれはファシストと既成の政治家（記事ではジョリッティとサランドラの名が挙がっている）との間で妥協が成立して、新しい内閣が組閣されるであろうこと、しかし

---

<sup>17</sup> 1922 年 10 月 29 日付『東京朝日新聞』朝刊 3 面

<sup>18</sup> 1922 年 10 月 29 日付『東京朝日新聞』朝刊 3 面

新内閣はファシストの要求をどこまで受け入れるかが問題だ、と述べている。<sup>19</sup>

「代議政体の危機」と大上段に振りかざした見出しが躍っているが、その内容は記事が書かれた時点で得られた情報や外電をまとめたものに過ぎず、政治体制の議論に踏み込んだものではない。しかし、新聞紙上で明確に「代議政体の危機」という表現を用いたことは、新聞記者が、また当時の世論も、代議政体の価値を認めていたと言えるだろう。

1922年10月時点で、日本の首相は海軍大将加藤友三郎であり、いわゆる超然内閣であった。一方で、この頃になると普通選挙運動が盛り上がり、1922年初頭には全国各地で普通選挙を求める集会が開かれている。また、同年3月には全国水平社が、4月には日本農民組合、そして7月には日本共産党が結成。日本社会には民主主義的、平等主義的な雰囲気広まり、社会運動や労働運動が熱を帯びてゆく時期であった。そんな社会の中で、暴力によって政権を得ようとしているように見えるムッソリーニの行動は時代の流れに逆行しているように見え、警戒心を抱かせた。1922年10月31日付『大阪朝日新聞』朝刊に掲載された社説「伊太利の動揺 国粋党の大運動」では、次のように記している。

所がこのファシストは昨年五月十五日の総選挙の際には未だ政党としての積極的政綱も有せず（同党曰く行動即政綱也と）、又その実力につき未だ十分の自信がなかつたから、僅かに三十余名の代議士を得たのみであつた。然るに同派が力試しを為して、今年に入りその実力を知るや、現在の代議院は伊国民を十分に能く代表してゐるものではないと言ひ出し、故に宜しく代議院党派の現在の分野に立脚する内閣組織をやめ、国内に於ける国粋党の実勢力に比例して、同国の代表者を内閣に入れ、内務大臣その他の重要椅子をこれに与ふるか、又は代議院を解散して総選挙を行ふかを政府に要求するに至つたのである。

若しこれがほんとうの議院政治国、法治国であつたら、最大限度の譲歩としては、一先づ現内閣を維持して議会解散総選挙を行ひ、果して国粋党のいふやうに、同党の国内に於ける実勢力が現在議会に於ける員数の約三四倍に該当するかを、選挙民に聞く外ないのである。然るに後継内閣が国粋党の内乱的暴力のために圧迫されて、現代議院の約十五分の一の勢力を有するに過ぎない同党の代表者を入閣せんとすることで既に議院政治上の変則で、況や同党首領ムッソリーニ氏に内閣組織を属する如きこと

---

<sup>19</sup> 1922年10月30日付『東京朝日新聞』朝刊

は議院政治を全く覆すものである。<sup>20</sup>

そして社説の結びとして、ファシストの暴力は「全国民の力、世論の力によつてこれを排斥せなければ、伊太利の動揺は其の国の名物たる地震と同様いつまでも止むまい。」と述べている。

社説中において、ファシストの暴力を使った政権奪取は「議院政治上の変則」であり、またムッソリーニの入閣は「議院政治を全く覆すもの」、そして暴力は「全国民の力、世論の力によつてこれを排斥せなければ」ならないものだとして記述している。ファシストの暴力主義の否定と議会政治の擁護を表明したことは注目すべきであろう。1922年10月30日付『東京朝日』朝刊「国粋団内閣が果たして成立せば代議政体の危機」と同じく、議会政治を擁護した記事であるが、「国粋団内閣——」は主にイタリア情勢を伝える記事であり、議会政治の擁護を明確にしたものではない。これに対して、「伊太利の動揺 国粋党の大運動」は、ファシストの政権奪取は議会政治に反するものとして非難しており、「国粋団内閣——」より踏み込んだ内容だ。当時の日本の世論が、暴力主義に否定的であり、議会政治擁護が世論において優位であったことがうかがえる。また、記事「伊太利の動揺——」は、新聞社としての立場や意見を表明する社説として掲載されている。しかも『大阪朝日』は、1924年1月1日付朝刊の部数が百万部を突破した程の大新聞社だ。その『大阪朝日』が議会政治の擁護と暴力主義の否定の立場を明確にした点から、当時の日本社会が議会政治に肯定的な社会であったことをうかがわせる。

上のようにファシストに対して警戒を示す記事が多いが、ファシストに対して好意的な記事もある。前述の1921年7月31日付『東京朝日』朝刊「伊国の新結社——」もその一つだ。また1922年11月1日付『読売新聞』朝刊に掲載された記事には、「何よりも節約第一 国粋党内閣の旗印 廿年来初めての民主的首相」という見出しが躍っている。クーデター紛いの手法で政権を奪取したムッソリーニを「民主的」と称して、彼に好意的な立場をとっていると見てよい。記事は、ムッソリーニの首相就任は、「過去廿年間に亘る非民主的政治家の政権掌握に終焉を与えた」と記述。また「ファスチスチ党は何等の伝統何等の義務又は党派的関係にも束縛されない」ので、大胆な経費削減と健全な経済政策を行えるだろうと期待を示している。新政権の経済財政政策に期待を示すことは、予測として許さ

---

<sup>20</sup> 1922年10月31日付『大阪朝日新聞』朝刊1面

れるだろう。<sup>21</sup>しかし、ムッソリーニの政権奪取を「民主的」と評することには疑問を呈せざるを得ない。確かに二十世紀以来のイタリア政界はジョヴァンニ・ジョリッティを中心に、党派間の妥協と均衡で政治は動いていた。だが暴力によって政治を動かしたり、政権を奪取しようとする事はなかった。

もっともファシストを評価するような記事は、1922年時点では少数派で、大多数は批判的だ。記事「何よりも節約第一 国粋党内閣の旗印——」が載った前日（1922年10月31日）の『読売』には、社説「国粋党と国粋会」も掲載されている。その社説の内容は、同じ『読売』の記事「何よりも節約第一 国粋党内閣の旗印——」で示した好意的評価とは異なり、かえってファシストを非難する内容である。ファシストは愛国者を名乗っているが、本質的には暴力団であることを述べ、その上でファシストとその指導者であるムッソリーニを次のように評している。

……首領のベニート・ムッソリーニ氏は以前には社会主義者であつたが、対独戦争には一転して極端なる戦争論者となつたといふが、兎に角戦争といふものが暴力主義者を産むに至つたことは自然の結果であり、従つて戦後に於ける反動主義の瀰漫が世界押しなべての傾向となつたことも怪しむに足らない。世人は危険思想といへば直に急進主義と思ふ。然し反対主義の国家に危険なるは、急進主義に劣らぬのみでなく、寧ろ一層甚だしいことは伊太利のファシストの適切に示す所である。……<sup>22</sup>

さらには、ファシストの暴力的な傾向を示すために、ファシストが取った行動——正当な選挙で選ばれた社会党系の議員や市長を脅して辞職に追い込み、選挙になると乱暴狼藉を尽くすなど、国家の秩序を大いに乱している——を挙げて、彼らを非難。そして、ファシストがここまで暴れ回つたのも、社会主義者に対抗するための手段として政府や資本家からの支援があつたためだ。ところが、「今や政府は飼犬に手を噛まれるの有様」となつてしまった。最後に、「吾人は我国の識者は伊太利の事情に就て学ぶ所あるべきである。」と、社説は結んでいる。<sup>23</sup>

同じ頃、日本には大日本国粋会（国粋会）という組織があつた。1919年11月、東西の

---

<sup>21</sup> 1922年11月1日付『読売新聞』朝刊

<sup>22</sup> 1922年10月31日付『読売新聞』朝刊

<sup>23</sup> 同上



侠客（やくざ）が合同し、政友会所属衆議院議員であり、当時の内務大臣である床次竹次郎を世話役として結成した右翼団体である。この国粋会は、1922年1月22日には新年会で集まっていた堺利彦（1871~1933）をはじめとする社会主義者らを襲撃し、暴行を加えた。この事件以外にも、国粋会はたびたび社会主義者らを攻撃している。

この社説は、表題でわかるように、ファシストと国粋会を対比させ、国粋会が暴力を用いる点を批判し、これを放置（もしくは黙認）しているといずれイタリアのファシストのように政府を攻撃するようになるかもしれないと、世論に訴える内容だ。国粋会の動向に注意を払う一方で、当時の世論がファシズムに強い警戒感を持っていたこともわかる。記事中で「世人は危険思想といへば直に急進主義と思ふ。然し反対主義の国家に危険なるは、急進主義に劣らぬのみでなく、寧ろ一層甚だしいことは伊太利のファシスチの適切に示す所である。」<sup>24</sup>と記している点に注目したい。世間一般では急進主義が危険思想だといわれているが、その実ファシズムは急進主義よりも危険であると、社説でははっきりと述べているのだ。

いずれにせよ、この頃のファシスト及びムッソリーニに対する日本の世論は、あまり好意的ではない。1922年11月8日、9日、10日、12日付『東京朝日』朝刊上において、農商務省出身の官僚で社会政策学者の永井亨（1878~1973）が「フラスシズムとボルシェヴィズム」という連載記事を書いている。記事は「フラスシスチとボルシェヴィストの主義殊にフラスシズムとボルシェヴィズムの心理を比較考察して世人の注意を惹起」することを目的として、まずファシズムの成り立ちや特徴——特に労働政策を中心に記述。そして、ファシストの労働政策がボルシェヴィズムのそれと類似している点を指摘している。社会主義に対して強い警戒心を抱いていた当時の日本において、ボルシェヴィズムとファシズムの類似性を指摘する記事が掲載されたことは注目に値するだろう。しかも、ボルシェヴィキ政権に対する干渉を目的とした出兵、いわゆる「シベリア出兵」が1922年10月末日によろやく撤兵が完了した頃である。1918年8月から1922年10月ま続いたシベリア出兵において、日本はボルシェヴィキを「敵」として戦っていた。その「敵」とファシストが類似していると指摘することは、日本人にファシズムへの警戒心を抱かせるには十分なものだっただろう。

そして11月12日付朝刊に掲載された最終回では、まずある学者が分析したというボルシェヴィズムの心理的特徴を以下のように挙げた。

---

<sup>24</sup> 同上

誇大的我利心、極端なる不忍耐、知識の虚栄、放蕩にして排他、感情的刺激の欲求、過度なる独断、誇強的言語、衝動的の判断、感動的不安定、熱烈なる英雄崇拜、陰謀的の性癖、急進的性急、矛盾性の心理、信念に近き固執強情等はその特徴であると訊いた。<sup>25</sup>

そして永井は、ファシズムには「知識の虚栄」だけがないように思えるが、その他の一切はボルシェヴィズムと共通していると記述する。その上で、イタリアの民衆は熱狂的であり、情熱的であると指摘。そんな彼らはかつて社会主義に色めきだっていたが、今はファシズムに色めいている。しかしファシズムから社会主義に再転する可能性もあるし、何なら「恐怖時代」に転ずる可能性もあるので、その点を心配しないでもない——と、記事を結んでいる。<sup>26</sup>

実際、永井は連載初回（1922年11月8日付『東京朝日』朝刊）の冒頭で、この連載記事を執筆しようとした理由を二つ挙げている。一つは、ファシストの主張する標語のひとつに「忠君愛国」があること。もう一つは、「我國民が兎角感情に走り理性を欠き外国の思想をもその儘受け入れ易いこと」を指摘。そして、「忠君愛国」という標語は、日本人の脳裏を支配しやすく、またムッソリーニの英雄的活動やファシストの軍隊的行動に心を奪われて、日本人の思想に何らかの影響を及ぼしたり、ファシストに共鳴したりするかもしれない。今回の連載はそれを諷めるためのものである——と、自身の懸念を説明している。そして永井の懸念は、的中した。

#### (4) ムッソリーニに魅了される人々

1923年8月29日付『東京朝日』夕刊に、東京朝日新聞編集局長で政友会所属衆議院議員である安藤正純（1876~1955）が、ムッソリーニにインタビューをした記事「伊国首相と語る」が掲載された。インタビューでは、安藤がムッソリーニにファシズムの目的や日伊貿易の進展の可能性を尋ねる一方、ムッソリーニから日本におけるダンテの評価を尋ねられたが、安藤自身はダンテに関しての造詣はそれほど深くないので当たり障りのない返

---

<sup>25</sup> 永井亨「フラスシズムとボルシェヴィズム」（1922年11月12日付『東京朝日新聞』朝刊）

<sup>26</sup> 永井亨上掲文

答しかできなかったことは残念だ——などと記述。そしてムッソリーニの印象については、次のように記している。

……同氏は年齢僅かに四十、引締まつた口と重々しき話振りに加へて頭髪の中央が既に疎かな事は之れまでの経歴の波乱を察せしめるが、また一見其の偉大な体格には精力の充溢せるを察し得べく蓋し一個の豪傑に過ぎず想像して居た余は応対の慇懃にして尊大の風無く柔剛共に備はつた建設的政治家たるを感ぜしめられた、同氏を■■せる者は大臣次官悉く青年であつて同氏は之を手足の如く活動させて居るが此の点から見て現代伊太利の状態は我が維新当時の如きものである……<sup>27</sup>

豪傑のような外見とは裏腹に礼儀正しく、建設的な政治家だと称揚し、ファッショ・イタリアを明治維新の頃の日本のようにだと持て囃す。記事中には、ムッソリーニに対する批判は一文句も出ていない。会見に応じてくれたことへの感謝の気持ちとして、多少のリップサービスは含まれているだろう。安藤がムッソリーニにインタビューした日は、華氏 96 度（摂氏約 35 度）の盛夏でありながらも、ムッソリーニは執務しており、さらには「四十名の会見要求者詰掛け」ていたという。<sup>28</sup>しかし、それまで編集局長としてファシズムやムッソリーニに対して警戒心を剥き出しにした記事を掲載していたにも拘らず、いざムッソリーニと引見することが叶ったら、手のひらを返すように称賛することは、いささか記事の信頼性に疑問を持たざるを得なくなってしまう。そして、翌日（1923 年 8 月 30 日）付夕刊のコラム「今日の問題」でも、ムッソリーニに対して従来『東京朝日』の態度とは異なる評価をしている。

伊太利では社会党と国粋党と争つて内乱が勃発しやうとした時ムソリーニ氏が現れて政局を收拾した。

○

日本は内外共非常の危機に面して居る、此時局を收拾するのはムソリーニの如き人物で

<sup>27</sup> 安藤正純「伊国首相と語る」（1923 年 8 月 29 日付『東京朝日新聞』夕刊）。■■部は解読できず。

<sup>28</sup> 安藤上掲文

なくてはならない、斯る人物が政党に居ないとは情けない。<sup>29</sup>

上のコラムの記述は、ムッソリーニは「社会党」や「国粹党」とは関係のない在野の実力者であり、彼の尽力でイタリアの混乱は収拾された、と読み取れる書き方だ。しかし実際は、すでに何度も述べたように、ファシスト率いるムッソリーニが社会党との抗争を起こし、最後にはクーデター紛いの手法で権力を得たのである。これ以前の日本の新聞の記事では、ムッソリーニが元社会党員であったことや、ムッソリーニが暴力によって政権を得たことなどは、無視せずに記述されている。さらには、ボルシェヴィズムとの類似性を指摘した永井亨著の連載記事「フラスシズムとボルシェヴィズム」を載せて、ファシズムに対する不信を見せていた。それにもかかわらず、このコラムのように永井が警告した通りムッソリーニに「心を奪はれて」、あっさりとムッソリーニを肯定するようになってしまった。

ムッソリーニに「心を奪はれ」た人物は他にもいる。1924年12月9日付『東京朝日』朝刊において、「下位春吉氏帰る」と題した記事が載った。その年の12月8日に神戸港に入港した船で、下位春吉が帰国したことを伝える記事だ。記事の副題には「新渡戸博士も同船で帰朝」とある。『武士道』の著者として、また国際連盟事務次長として国の内外で高い評価を得ていた新渡戸稲造（1862~1933）を差し置いて、下位春吉という人物が記事の主演として遇されている。この記事では、下位春吉の帰国前後の動向にのみ焦点を当て、新渡戸に関しては副題で触れただけで、記事中に新渡戸の名前は一切出していない。

そして記事は続いて、大阪市中央公会堂において朝日新聞社主催で下位春吉及び新渡戸稲造の両氏による講演会が開かれた旨を記している。『東京朝日』によると約1,500名の聴衆が集まった中で開かれた講演会で、新渡戸は「国際連盟の組織及其目的」について講演し、紙面に掲載されたその要約は以下の通りである。

インターナショナルこそは日本人の心を失はず自国を愛する為めに他国を尊重するといふ考へである国際心は愛国心の延長である<sup>30</sup>

これに対して、下位は「伊太利の国情」としてファシスト政権を紹介する講演を行った。

<sup>29</sup> 1923年8月30日付『東京朝日新聞』夕刊

<sup>30</sup> 1924年12月9日付『東京朝日新聞』朝刊

以下が、記事に掲載された下位の行った演説の要約である。

伊太利には第二のルネツサンスが起つたファッシュ運動の精神は実に徹底せる国民皆兵運動で同運動の憲法は祖国義務規律の三つが根幹を成し日本に於ては同運動は社会主義の反動なりと思つて居るが決して然らず国家があらん限り憂国の団体は其生命を持続する<sup>31</sup>

新渡戸の演説は約 50 文字で要約されたのに対して、下位の演説は新渡戸の約二倍の約 120 文字でまとめられている。その一方で、この講演会については同日の『大阪毎日新聞』も伝えていた。<sup>32</sup>『大阪毎日』の記事は「新渡戸博士と下位氏の講演」と題して、新渡戸及び下位の講演会が開かれたことを報じ、両者の講演内容の要約を載せている。もともと、両者の講演内容については、主催した『朝日』よりも詳細に報じ、またその分量も両者とも一千文字程度と同じくらいの量だ。

『大阪毎日』の記事によれば、新渡戸の講演は、『朝日』でも伝えている通り新渡戸自身が事務局次長をしている国際連盟についてであり、国際連盟総会を国会に、理事会を内閣に例えて、聴衆に連盟の機構をわかりやすく説明。そして連盟のような組織は以前にも存在していたが、連盟には事務局という執行機関が存在しているから組織が安定していること。国際連盟の目的は世界から戦争を無くすことであり、連盟が仲裁に入ることで何度も戦争の危機を未然に防いだ。連盟はまだまだ完全な組織とはいえないが、連盟をなくしても国際関係が好転しないことは確かである。そして、国際協調の精神は愛国心の延長であると述べ、日本国民に国際協調を訴える——そういう形で講演を結んでいる。

新渡戸の講演に続いて、下位の講演では、まず日本人の間には現代イタリアに関する知識が皆無であると指摘。下位は、現代イタリアの代表的作家であるガブリエーレ・ダンヌンツィオと共にイタリアから飛行機で日本に向かう計画を立てていたが、ダンヌンツィオがフィウメ占領を敢行したためその計画は流れたこと。しかし、外国からの圧力がダンヌンツィオを決起させたのであり、これはイタリア人の精神的勝利であり、またこの精神こそがファッシュ運動である。そして、ファシストの運動は日本精神の発露とも言え、いわば武士道である。だが、ファシズムはドイツや英国を通じて日本に伝えられたため、ファ

---

<sup>31</sup> 同上

<sup>32</sup> 1924 年 12 月 9 日付『大阪毎日新聞』

シズムが日本に誤って伝えられている。ファシストは政治団体でもなく、反動団体でもない、愛国団体である——下位はそのように訴える。そして、ファシズムは労働者や社会主義者を圧迫するような運動ではなく、労働者を真に国家のために生かすための運動であると述べ、下位自身が今回日本に帰国したのは、現代イタリアの本当の姿を日本国民に伝え、そして日本国民を覚醒させるためであると語って、講演を結んでいる。

1920年代は国際協調がうたわれていた時代であり、そういった時代の中での新渡戸の講演は聴衆に受け入れられたであろう。その一方で、下位の講演はあからさまにイタリア・ファシズムを礼賛するような内容であるが、イタリア・ファシズムも当時のマスコミの耳目を集めていたテーマであったため、聴衆も下位の講演に興味を惹かれたであろう。

その一方で、『東京朝日』の記事では、新渡戸稲造よりも下位春吉を大きく取り上げ、その講演の要約も『大阪毎日』に比べると短いものだ。『東京朝日』の態度は、第三章でくわしく取り上げるが、『東京朝日』が以前より下位春吉の動向を伝えていた関係もあるだろう。また、朝日新聞社は1918年（大正7年）の白虹事件<sup>33</sup>で大阪府警察部により告発され、『大阪朝日新聞』の不買運動が置き、さらには当時の『大阪朝日』社長 村山龍平（1850~1933）が右翼の襲撃を受けている。この苦い記憶から、当時の『朝日』編集部は、国際協調をうたう新渡戸よりも、愛国主義的な講演をした下位にクローズアップさせたと考えられる。

第一次世界大戦の勃発に端を発する大戦景気、シベリア出兵、米騒動、原敬内閣成立、そして第二次憲政擁護運動を経て、日本は政治的にも経済的にも成長していった。1924年に成立した加藤高明内閣下で男子普通選挙制度が実現することとなり、民主主義的雰囲気日本の世の中を覆うこととなる。それに対して、第一次世界大戦に勝利したものの、「傷つけられた勝利」と称されるほどの痛手を負ったイタリア。第一次世界大戦後は左右の対立が激しくなり、その隙を突くようにファシストが台頭し、ファシストを率いるムッソリーニが最終的には暴力によって政権を得た。民主主義が根付きつつある日本と、暴力によって政権奪取が為されたイタリア。当時の日本のマスメディアは、暴力を用いて政権を獲得したファシストに対して可能な限りの警戒心を以て応じ、その暴力主義的な面を批

---

<sup>33</sup> 1918年（大正7年）、米騒動問題に関する関西記者大会を報じた同年8月26日付『大阪朝日新聞』夕刊の記事中において、君主に対する反乱・暗殺の予兆を意味する故事成語「白虹日を貫けり」が引用されたことに対して、大阪府警察部が新聞紙法違反に当たるとして記事の筆者と編集人を告発した事件。（吉川弘文館編『国史大辞典』の松尾尊兌「大阪朝日新聞筆禍事件」より）

判していた。

しかし、ファシスト率いるムッソリーニの行動に触発されたり、民主主義的風潮の蔓延と同時に広まった平等主義的風潮の中で台頭する左翼に対するアンチテーゼとしてファシズムを見出したりする人々もいた。1920年代後半になると、特に前者の理由でムッソリーニを「英雄」のように見る言説が増えていく。1925年1月から12月にかけて、大日本雄弁会講談社が発行する雑誌『雄弁』誌上において望月紫峰（望月茂、1888~1955）が「快傑ムッソリーニ」と題して、ムッソリーニの伝記を連載。<sup>34</sup>その後、ムッソリーニの伝記が相次いで出版されることとなった。

民主主義的、平等主義的な雰囲気蔓延しつつある1920年代の日本に対して、独裁主義的かつ権威主義的に政権を運営しているように見えるファシスト・イタリア。本来なら相容れぬ二つの国であるが、上述の連載記事「フラスシズムとボルシエヴィズム」で著者の永井亨が指摘したように、「党首（引用者註：ムッソリーニ）の英雄的行動や軍人文士の援助や団体の軍隊的行動に心を奪はれ」やすく、またファシスト党の掲げる「忠君愛国」という標語は「我国民の脳裏を支配し易い」ことも相まって、ファシズムを受け容れる土壌が出来つつあった。その中で、マスメディアによってムッソリーニの「英雄的行動」がクローズアップされる。小村の鍛冶師の息子が立身出世を果たし、一国の宰相にまで登り詰めた——という話は、日本人の琴線に触れるものがあっただろう。1920年代後半になるとムッソリーニの伝記が相次いで出版されたことが、その証左と言える。<sup>35</sup>そうになると、ファシスト政権は、剛腕政治家による力強い政権へとイメージが変わってゆく。1923年8月30日付『東京朝日』夕刊コラム欄に「日本は内外共非常の危機に面して居る、此時局を收拾するのはムソリーニの如き人物でなくてはならない」とあるように、次第に日本国内にもムッソリーニのような政治家への待望論が現れるようになった。

そういった雰囲気の中で下位春吉は帰国し、ムッソリーニやファシズムに関する講演を数々こなし、それに関する著作を相次いで世に出していった。下位は1914年から1924年までの約十年間、イタリアに滞在していた。彼がイタリアに滞在していた時期は、第一

---

<sup>34</sup> 福家崇洋『日本ファシズム論争』（河出書房新書、2012年）P.52

<sup>35</sup> 1927年に上田作一『ムッソリーニ首相』（公民教育研究会）、同じ年には児童向け小説である三井信衛ほか『少年英雄物語』（金の星社）の一章分がムッソリーニに割かれている。1928年には、奥村毅『快傑ムッソリーニ』（榎本書院）、薄田斬雲『我輩はムッソリーニである』（忠誠堂）、1929年にムッソリーニ著・岡田忠一訳『ムッソリーニ自叙伝』（金星堂）が出版されている。

次世界大戦参戦を巡る衝突、第一次世界大戦、大戦後の混乱、赤い二年間、そしてファシストによる政権奪取と、イタリア史上における重要な出来事と重なっている。また下位は講演や著書上において、ガブリエーレ・ダンヌンツィオやムッソリーニと交友関係にあったと何度も述べている。ダンヌンツィオは名高い小説家であり、ムッソリーニに至ってはイタリア王国首相であり、1920年代当時の日本人の注目を集めた存在だ。その両者と交友関係を持っていたと豪語する下位も当然、日本人の注目を集めた。

ファシズムを盛んに宣伝し、ダンヌンツィオやムッソリーニと友誼を結んでいたと語る下位春吉とは、何者なのだろうか。第三章では、彼の生い立ちとイタリア滞在時代を述べることとする。



### 第三章

#### (1) 青年・下位春吉

1970年11月に角川書店が出版した『日本近代文学大系第7巻 泉鏡花集』に添えられた附録の月報には、小説家の吉屋信子（1896~1973）が「私の泉鏡花」というエッセイを寄せている。エッセイでは、吉屋が初めて泉鏡花の小説を読んだときのこと、泉鏡花に熱中していた文学少女時代のことが記されていた。そのエッセイの冒頭で、吉屋がローマを訪れた折のことを語っている。吉屋がパリに滞在していた時分（1928年頃）、同伴した友人（吉屋のパートナーである門馬千代）の教え子を尋ねるために、ローマを訪問。その教え子の名を下位桃代といい、彼女の父親は下位春吉という。

吉屋が下位の住んでいたフラットの、書齋兼応接間に通されたときのことだ。大きな本棚にはイタリア語の書籍が並んでいたそうだが、吉屋が目にしたのは、「紫陽花色の羽二重表紙に金文字の鏡花全集十五巻」であった。そのときの印象を、吉屋は次のように記している。

それは下位春吉氏が、『ムッソリーニ伝』などを書かれ、ムッソリーニに傾倒した熱血男子で、その人がはるばる日本からイタリーまでこの鏡花全集を持って来られ、異国の仮りの住居の書齋の中に並べていられるのが、意外だったと同時に、私も自分の家の本棚にやはり同じ全集を置き並べてきたのを思いだしたいへんなつかしい気がして、下位春吉氏に親近感を覚えたのを忘れない。<sup>1</sup>

吉屋はこのエッセイ上で、前置きもなく下位春吉という名を挙げている。また下位春吉という人物に関する注釈もない。このエッセイでは、戦前下位春吉という者が家族と共にローマに住んでおり、彼はイタリア語を解し、そして『ムッソリーニ伝』を記すなどムッソリーニに傾倒していた人物——ということしか書かれていない。しかし、前置きも注釈も無く、下位の名を出していることからうかがえることは、1970年当時は下位春吉とは如何なる人物なのかを説明しなくても、知っている人がいるだろうと吉屋が考えていたことがうかがえる。しかし現代において、下位春吉の名を知っている人は少ないだろう。

下位春吉は1883年（明治16年）、福岡県夜須郡秋月（現在の朝倉市秋月）において、当地の士族、井上喜久蔵の四男として生まれた。なお喜久蔵は1876年に起きた秋月の乱に関

<sup>1</sup> 吉屋信子「私の泉鏡花」（『日本近代文学大系月報』13、角川書店、1970年）P.1

わっていたが、処罰は免れている。生家の井上家は旧秋月藩に仕える下級武家であり、俸禄も平均的な 30 石程度。維新後には典型的な没落士族となった。<sup>2</sup>下位春吉は後に、自分が生まれた頃には父母兄弟全員が炭坑夫として働くほどに生活は窮乏していた、と新聞社のインタビューで語っている。<sup>3</sup>しかしイタリア文学者の土肥秀行は、土肥の著した論文「下位春吉とナポリの文芸誌「ラ・ディアーナ」—下位春吉伝(上)—」上において、「こう語ることによって、日中戦争勃発後に農村振興運動に打ち込んだ下位は、耐乏生活に慣れた自分を暗にアピールするのだった。」<sup>4</sup>と指摘している。

福岡県立東筑中学校を卒業した年、春吉は東京から旅行に来ていた材木商である下位嘉助の目に留まる。下位嘉助は、将来有望な青年として地元では有名だった春吉を自身の後継者にするために養子に迎え、1907年には嘉助の娘、富士と結婚させた。<sup>5</sup>もっとも、春吉は1903年に東京高等師範学校（現筑波大学）英語科に入学し、養父の思惑とは離れていった。

下位は東京高師在学中、ダンテに傾倒していた。彼は中学生のときに教師からダンテの話聞いたことでダンテに興味を覚え、東京高師に入り英文がよく読めるようになると、英文の『神曲』を読むようになり、さらにはドイツ語やフランス語が出来る友人を集めて、それぞれの翻訳版『神曲』の比較研究をするようになる。<sup>6</sup>後にイタリア渡航の目的を「たゞダンテの研究が目的」<sup>7</sup>と下位自身が語っており、初期の新聞報道では下位はダンテ研究家と紹介され、また新聞のインタビューでは「親父の貸家が五六軒あるから、其の中の二軒をぶつつぶして、新しく小ざつぱりとした、私立公開図書館を建てる積もりだ」<sup>8</sup>とも下位は語っている。この私立公開図書館とは、おそらくダンテ関連の書籍を集めた図書館を想定していたのだろう。

卒業後は教職についていて、東京府立第一高等女学校で英語の教師をやっていたと下位

---

<sup>2</sup> 藤岡寛己「下位春吉とイタリア＝ファシズム——ダンヌンツィオ、ムッソリーニ、日本——」（『福岡国際大学紀要』25号、福岡国際大学、2011年）P.54

<sup>3</sup> 1937年3月6日付『東京朝日新聞』夕刊3面

<sup>4</sup> 土肥秀行「下位春吉とナポリの文芸誌「ラ・ディアーナ」—下位春吉伝(上)—」（『イタリア図書』39号、イタリア書房、2008年）P.12

<sup>5</sup> Reto Hofman, *The Fascist Reflection Japan and Italy, 1919-1950* (Columbia University, 2010) P.25

<sup>6</sup> 文史朗「ナポリの詩人下位（一）」（1921年5月7日付『東京朝日新聞』3面）

<sup>7</sup> 下位春吉「滞伊十八年 ダヌンツィオとムッソリーニとを語る」（『現代』14(7)、大日本雄弁会講談社、1933年）P.48

<sup>8</sup> 1921年5月9日付『東京朝日新聞』P.2

は作品中で述べている。<sup>9</sup>一方で、1911年に東京高等師範学校内に大塚講話会を設立。頻繁に講話会を開き、童話口演に熱を入れた。下位は口演童話家として高度な技量を持ち、難易度の高いシリーズものの口演を得意としていた。「ロビンフッド」は月1回の割合で、2年間余り続けられたという。<sup>10</sup>また1917年には童話口演の理論書として『お凧の仕方』を刊行。下位独自の「お凧論」を基本としているものの、お凧の技術に関する注意や練習法を詳細に著している。

その一方で、下位は東京外国語学校伊語科専修課程に進学していた。おそらくダンテを研究するに当たって原書講読に必要な語学力を得るためだろう。下位は、専修課程5期生として1914年3月に卒業。その年には、本科の卒業生がおらず、唯一の伊語科卒業生であったため、卒業式では専修課程修了生総代としてイタリア語で謝辞を述べている。この謝辞で下位は伊国政府賞品を授かり、また駐日イタリア大使からナポリの王立東洋学院（現ナポリ東洋大学）の日本語教師に推された。これがきっかけで、下位はイタリアに旅立つこととなる。

イタリアに着くと、下位はナポリの王立東洋学院の日本語教師として勤務する一方、当地で知り合った若手詩人のゲラルド・マローネ（Gherardo Marone, 1891~1962）と日本文学の紹介を行う。下位は、マローネが立ち上げた文芸誌『ラ・ディアーナ』*La Diana*に日本の同時代の歌人、与謝野晶子や前田翠溪、泉鏡花の作品のイタリア語訳を掲載した。1917年には、これら発表した作品の他に与謝野鉄幹、佐佐木信綱、吉井勇など「明星」系の歌人の作品も合わせて*Poesie giapponesi*（『日本の詩篇』）をイタリアで出版。*Poesie giapponesi*は、イタリア各地の新聞で書評が掲載されるなど、大反響を呼んだ。<sup>11</sup>

だが、*Poesie giapponesi*が出版されて間もなく、同地の新聞（*Il Giornale d'Italia*）の文芸面で、文芸評論家「ベルロンチ」（Goffredo Bellonci, 1882~1964）によって猛烈な批判にさらされることとなった。もっとも、その批判内容は、『日本の詩篇』に載っている詩はすべて未来派の詩人の悪戯に過ぎず、与謝野晶子などといった詩人は実在しない架空の詩人であり、編者である下位春吉という人物もまた架空の存在である——というものだった。この評論に対して、下位は別の新聞に反論を寄せて、「思ひ切り皮肉な文」<sup>12</sup>でこれを

<sup>9</sup> 下位春吉『フアツシヨ運動』（民友社、1925年）P.23

<sup>10</sup> 有働玲子「大正期の口演童話 下位春吉・水田光を中心にして」（『研究紀要 短期大学部』第25(1)号、聖徳大学、1992年）P.199

<sup>11</sup> 土肥秀行「下位春吉とナポリの文芸誌「ラ・ディアーナ」—下位春吉伝(上)—」P.14

<sup>12</sup> 下位春吉「伊国に紹介されたる日本文学」（斎藤昌三編『書祭』人巻、書物展望社、1940

擲揄。このことがきっかけとなり、下位はイタリアの文壇に名を連ねることとなり、また文芸記者としての地位を獲得することとなる。<sup>13</sup>

## (2) 下位春吉とダンヌンツィオ

1915年、イタリアはロンドン秘密協定に基づき三国同盟を破棄し、オーストリアに宣戦布告する。下位は当時、駐イタリア大使の伊集院彦吉（下位の文では「伊集院彦七」と表記しているが、これは誤植だろう）からイタリア政府との連絡係の役目を担っていた。だが、下位が帰国後に雑誌『現代』に寄せた記事では、そのころ自分は神経衰弱を患っていて、医者から読書と考え事を禁じられ、ローマ近郊の温泉で静養をしていた。<sup>14</sup>そこで軍司令官のアルマンド・ディアズ（Armando Diaz, 1861~1928）と会い、戦地訪問を持ちかけられる。下位は「鉄砲玉のヒューヒュー飛んで来る所では、ちよつと考へごとなんかして居られません、考へごとをしないためには持つて来い」<sup>15</sup>だとして戦地訪問を承諾した——と語っている。

下位は北部の戦地へと向かう。一旦大本営が置かれたパドバで足止めされるが、突撃隊（アルディーティ）の軍服を支給してもらうことで、前線へと進んだ。前線ではかつて駐日イタリア大使館付特命武官であり、日露戦争では日本軍に同道していた経験のあるエンリコ・カヴィリア大將（Enrico Caviglia, 1862~1945）率いる砲兵隊に合流。戦地で下位は、塹壕を回り兵士たちの士気を鼓舞するための演説をしていた。童話口演で鍛えられた下位からすれば、得意とするところだっただろう。一方で戦闘にも参加しており、グラッパ山の塹壕への突撃に参加した。またトレント解放時には部隊の一員として、街の中心のダンテ広場まで行進をしている。

この戦場での経験は、1919年に*La guerra italiana. Impressioni di un giapponese*（後に『大戦中のイタリア』（信義堂書店、1926年）という邦題で日本でも出版している）として纏められた。これは、翻訳や共著、日本語教科書を除くと下位の唯一のイタリア語著作であり、その序文にはダンヌンツィオと首相指名直前のニッティ（後に下位は「弱腰」と貶めているが、関係はあったようで、彼から1596年版の『神曲』を貰っている<sup>16</sup>）が名を連

---

年) P.23

<sup>13</sup> 下位春吉「伊国に紹介されたる日本文学」PP.22-23

<sup>14</sup> 下位春吉「滞伊十八年」PP.48-49

<sup>15</sup> 下位春吉「滞伊十八年」P.50

<sup>16</sup> 1921年5月9日付『東京朝日新聞』P.2

ねている。この著作の編集と出版はマローネが引き受け、後書きを残している。しかしその後、下位とマローネの関係は希薄となる。なぜならマローネは反ファシズムの立場をとる一方で、下位はファシズムに傾倒するようになるからだ。

マローネとの関係が希薄なる一方、下位はガブリエーレ・ダンヌンツィオとの関係が深くなる。

下位とダンヌンツィオが始めて邂逅したのは、第一次世界大戦中、下位が前線に訪れる前であった。知人の新聞記者アントニオ・ベルトラメリ (Antonio Beltramelli, 1879~ 1930) の紹介でダンヌンツィオの飛行隊が置かれている飛行場を尋ねたことが始まりである。<sup>17</sup> ダンヌンツィオは若い頃に日本趣味があつて、その点で下位と懇意になったのだろう。しかし、後に書いた「人間ダンヌンツィオ」では、たがいに戦線で相知ったと述べているが、これは自分を勇ましく見せるための演出だろう。<sup>18</sup>

下位は帰国後、様々な雑誌に寄稿し、また講演活動にいそしむようになるが、その中でダンヌンツィオとの交友関係をよく話題に挙げ、様々なエピソードを紹介している。その一つが、イタリア - 日本大陸間横断飛行計画だ。下位が帰国後に雑誌『現代』に寄稿した記事によると、1919年、下位はダンヌンツィオから『日本へ飛行機で行くからヴェニスまでやつて来い』<sup>19</sup>という通知を届けられた。下位がヴェネツィアにあったダンヌンツィオの邸宅に赴くと、下位とダンヌンツィオ、そしてイタリア空軍の士官三人で日本まで飛行で行く計画を伝えられた——と記述している。もっとも、この大陸横断飛行計画は何度も計画されたが、その都度失敗に終わっている。一度目は、「シベリアの南を経て蒙古を抜け、満州、朝鮮を通り日本へ行く。一日に二千キロメートル飛んで、一週間で日本へ行く」<sup>20</sup>という計画であったが、同道する予定であったイタリア空軍の士官が試験飛行中にアルプス山中の氷河の上に不時着し、為す術も無く凍死してしまうという事故が起きたため、中止。二度目は、計画の段階で潰えた。そして三度目の計画は、いよいよ出発というタイミングまで進んだ。この三度目の計画は日本の新聞でも報じられ、1920年(大正9年)1月17日付『東京朝日』では「伊国飛行隊の出発は愈確實」という見出しで、大陸横断飛行の実施を伝えている。そして、同じ紙面上で「羅馬に於ける日本作家下位春吉氏が同乗して来

---

<sup>17</sup> 土肥秀行「下位春吉とナポリの文芸誌「サクラ」—下位春吉伝(下)—」(イタリア図書(40)、イタリア書房、2009年) P.3

<sup>18</sup> 下位春吉「人間ダンヌンツィオ」(『日伊協会会報』3号、日伊協会、1942年) P.42。

<sup>19</sup> 下位春吉「滞伊十八年」 P.54

<sup>20</sup> 下位春吉「滞伊十八年」 PP.54-55

る」と述べ、下位春吉の略歴が報じられた。二日後の1月19日付『東京朝日』紙上では、「詩聖の愛機に同乗して帰来する下位春吉氏」と題し、下位春吉と彼の家族の写真を添えて大々的に報じた。もっとも、この三度目の飛行計画はダンヌンツィオと下位を飛行機に乗せることなく出発した。ダンヌンツィオは1919年9月にフィウメ占領を敢行。下位は当初ダンヌンツィオから手紙を渡すので一人で行ってこれと頼まれたが、伊集院彦吉に「君がダンヌンツィオと一緒にいくといふことであつたら意味がある。(中略)併しダンヌンツィオが行かないのに、君が一人で手紙だけ持つて行くなんて、それは無駄だ」<sup>21</sup>と言われ、そのままイタリアに留まり、後述するようにフィウメを訪れる。もっとも、後に群馬県桐生市で行った演説を書き起こした『下位春吉氏熱血熱涙の大演説』(大日本雄弁会講談社、1933年)では、自分もフィウメ占領に参加したため行けなかったとしているが、これもまた自分を勇ましく見せるための演出だろう。<sup>22</sup>なお、当の飛行計画は、代わりにイタリア空軍パイロット二人が1920年2月14日にローマを発ち、同年5月31日に大阪に到着している。

第一章で述べたように、ダンヌンツィオは1919年9月12日にイタリア軍から脱走した兵士の他、未来派や帰還兵らを指揮し、当時連合軍の占領下に置かれていたフィウメを占領した。下位が帰国後に雑誌『現代』に寄せた記事では、「私はダンヌンツィオと一緒にフィウメに引返して決死隊員になりフィウメを守ることになった。」<sup>23</sup>と述べているが、それを客観的に示す形跡はない。一方で、第二次世界大戦に下位をインタビューしたインドロ・モンタネッリ (Indro Montanelli, 1909~2001) は、下位はフィウメにいるダンヌンツィオとムッソリーニの間を取り持つ連絡役を担っていたと記述している。モンタネッリによると、当時ダンヌンツィオによるフィウメ占領を鎮圧するために出動したイタリア軍のフィウメ包囲軍指揮官がカヴィリア大將(前述したように、元駐日イタリア大使館付武官であり、第一次世界大戦で下位が同道したイタリア軍部隊の指揮官)であり、彼からの便宜もあって、ダンヌンツィオとムッソリーニとの間を行きかうことが出来た——と言う。<sup>24</sup>もちろん、この話の真偽も定かではない。

しかし、下位がフィウメを訪れたことは、確かなようだ。下位は1920年2月1日にフィウメに来訪、翌2日には歓迎正餐会が開かれ、その席上でダンヌンツィオが歓迎の辞を述

<sup>21</sup> 下位春吉「滞伊十八年」P.55

<sup>22</sup> 下位春吉『下位春吉氏熱血熱涙の大演説』(大日本雄弁会講談社、1933年)P.36

<sup>23</sup> 下位春吉「滞伊十八年」P.56

<sup>24</sup> Indro Montanelli, "Shimoi", *L'impero bonsai* (Rizzoli, Milano, 2007) P.168

べた。<sup>25</sup>この正餐会の様子は、下位も帰国後に雑誌『改造』に寄稿した「ダンヌンツィオの横顔」(1938年4月)に書かれている。なお、「ダンヌンツィオの横顔」上では、下位がフィウメを訪れたのは「一九一九年の晩秋」となっている。おそらく友人であるダンヌンツィオの義挙に応えるために、いち早く駆けつけたようにアピールするためであり、実際は1920年2月が正しいだろう。そのように判断するのは、上で述べた1919年から20年にかけては日伊大陸間横断飛行計画があるからだ。出発直前の1920年1月に発行された日本の新聞において、下位の飛行計画参加が伝えられている。<sup>26</sup>このことから、下位は大陸横断飛行の準備があり、フィウメを訪れる余裕はなかったのではないかと推測される。

さて、「ダンヌンツィオの横顔」では正餐会はどのように描かれたのであろうか。以下は本文から正餐会の様子を描いた部分を抜粋したものである。

一九一九年の晩秋、それはフィウメ籠城中のことであつた。岡の上の司令部で食事の後、コーヒーを啜つて皆談笑してゐる時、予のすぐ右の椅子に坐を占めてゐたダンヌンツィオが、低い声で『シモイ』と呼ぶ。『何?』と振り向くと、『静かに!』と目で叱つて、予に早口で囁いた。『君起つて、何でもいゝから、日本語で今日は。サヨナラ。アリガタウ……ペラペラと十語か二十語づつ纏めて朗々と話せ。おれが皆を驚かして見せる』予は何の事か解らぬが、求められる儘に立ち上がった。ダンヌンツィオは皆を静まらせて、『今之からシモイ君が日本の詩を誦誦する。それをおれが翻訳するから聴いてゐろ』といふ御披露だ。予はすぐに手品の種が解つた。そこでいろはにほへとかからチシンプイプイ、……鬼は外福は内、……如是我聞一時佛在……そりや聞えませぬ傳兵衛さん……口から出まかせに一句切りつつやつて息を休めると、ダンヌンツィオが勿體らしくそれを翻訳して行く。落花を悼む詩となり、梢の露をあはれむ歌となり、行雲を讃へ、清流をめで月にあこがれ、蟲の音に嘆く千種萬様の『日本詩』となつて誦せられる。勿論押韻の短詩である。その一つ一つ食卓の四方から讃嘆の聲が揚がる。<sup>27</sup>

ダンヌンツィオが日本語に精通しているように思わせるような「手品」である。イタリア文学者の土肥秀行は、ダンヌンツィオのこの「手品」を、「ジャポニザンとしてのダヌン

<sup>25</sup> 藤岡寛己「下位春吉とイタリア＝ファシズム」P.56

<sup>26</sup> 1920年1月17日付『東京朝日新聞』P.5及び1920年1月19日付『東京朝日新聞』P.5

<sup>27</sup> 下位春吉「ダンヌンツィオの横顔」(『改造』20(4)、改造社、1938年)P.456

ツィオが 1880 年代の半ばに、ジュディット・ゴーチエ＝西園寺公望訳の『蜻蛉集 *Poèmes de la libellulle*』(Gillot, 1885 年)を真似て、*Outa giapponese* (日本風ウタ)とのシリーズを著した場合を想起させる、いかにもダヌンツィオ的な悪戯である。」<sup>28</sup>と評している。

イタリア軍の包囲化にあり、フィウメに籠城していたことを感じさせない華々しさが見て取れる様子であるが、その様子はこの年(1920年)のクリスマスには、イタリア首相ジョリッティの鎮圧命令により潰えることとなる。

さて、下位はダンヌンツィオと邂逅して以来、彼に傾倒していくようになるが、当時の彼のイタリアにおける身分はあくまでも王立東洋学院の日本語教師であり、文学者の一人である。そして、下位は文学者としての活動もしている。それが、1920年6月にナポリで創刊した文芸誌 *Sakura* だ。

後に下位が寄稿した「伊国に紹介されたる日本文学」(斎藤昌三編『書祭』人巻、書物展望社、1940年)によれば、下位がイタリアに滞在していた当時イタリア国内で最も権威ある日本文学研究書として「アルカンヂエリの『日本文学史』」(おそらく *Pacifico Arcangeli, Letteratura e costumazia giapponese*, Milano, Hoepli, 1915) という本があったのだが、その内容は「お話にならぬ」<sup>29</sup>程度であったと言う。そして、下位が『日本の詩篇』を出版したときのイタリア人文芸記者による批判も、この『日本文学史』を典拠にした批判だったらしい。また、王立東洋学院教授のバルトロメオ・バルビ (Bartolomeo Balbi) が主宰する *L'estremo oriente* という出版社から *Tsubaki Myu* という名の「日本の女流作家」の小説 7 編が出版されていることは、「最も愉快」なものだと皮肉っている。<sup>30</sup> 下位が雑誌 *Sakura* を創刊することを決意した背景には、当時のイタリア国内における日本文学の地位の低さ——特に、同僚である王立東洋学院教授が主宰する出版社から、日本人が知らない「日本の女流作家」の小説が 7 冊も出ているという事実への危惧を抱き、行動を起こしたのだろう。

PRIMA RASSEGNA MODERNA EUROPEA DELL'ARTE E DELLA POESIA DELL'ESTREMO ORIENTE (極東の芸術と詩に関する近代ヨーロッパ初の評論誌) という副題を与えて創刊された雑誌 *Sakura* は、下位春吉を編集長として、在イタリア日本大使

<sup>28</sup> 土肥秀行「下位春吉とナポリの文芸誌「サクラ」—下位春吉伝(下)—」 P.4

<sup>29</sup> 下位春吉「伊国に紹介されたる日本文学」 P.21

<sup>30</sup> 下位春吉「伊国に紹介されたる日本文学」 P.25



館からの援助<sup>31</sup>の下、1920年6月から1921年3月の間に全6号（5号及び6号は合併号として発行）を発刊。<sup>32</sup>編集者にはElpidio Jenco、Giulio Gaglione、Attilio Colucciといったイタリア系の名前が続く中、Koreyoshi Dan——すなわち團伊能（1892~1973。なお、第1号ではKoreyoshi Dan、第2号以降は名義がINŌ DANになっている）の名前がある。團伊能は、三井合名会社理事長團琢磨（1858~1932）の長男であり、後に東京帝大美術史学科助教授、また第二次世界大戦後には参議院議員を務めた人物だ。下位は彼らと共に、日本文化や同時代の日本文学の紹介してゆく。例えば第1号の内容は以下の通りである。

La Redazione: Fior di Ciliegio（「さくら」※創刊に寄せての編集部挨拶）

Elpidio Jenco: Yosano Akiko（与謝野晶子について）

Yosano Akiko: «Onde del Mare azzurro»（与謝野晶子『青海波』のイタリア語訳、下位春吉と Elpidio Jenco の共訳）

Koreyoshi Dan: L'influsso ellenico nelle arti antiche del Giappone（日本の古代芸術におけるギリシャの影響）

Harukichi Shimoi: Mori Ōgai（森鷗外について）

Mori Ōgai: «Il trionfo della morte»（森鷗外『影』のイタリア語訳、下位春吉と A. Colucci の共訳）

Koreyoshi Dan: Il «Koma-inu»（狛犬）

L'affresco dell' Hōkai-ji（法界寺のフレスコ画）

Kōzō Nakamura: Il tempio di Ho-o-do（鳳凰堂）

Harukichi Shimoi: Duello poesia（「詩の決闘」※歌合）

Anraku-an Sakuden: Dal «Sei-sui-shō»（安楽庵策伝『醒睡笑』のイタリア語訳、下位春吉と R. Vingiani の共訳）

Filippo Trapassi: Note Bibliografiche（文献目録）

上記のように、その内容は同時代の日本文学として与謝野晶子の詩をはじめとして、古代日本文化におけるギリシャの影響を研究した学術的なものや、歌合のような日本の伝統

<sup>31</sup> 1924年12月2日付『東京朝日新聞』P.7に掲載された記事「十年のナポリを捨て、詩人下位氏帰る」において、「……大使館が宣伝の意味で助けてゐた……」という記述がある。

<sup>32</sup> 国文学研究資料館のデータベースに全巻所収されている。

[http://base1.nijl.ac.jp/~kiban-s/database/sakura\\_pdfpage.htm](http://base1.nijl.ac.jp/~kiban-s/database/sakura_pdfpage.htm)

文化、醒睡笑といった俗的な笑い話、平等院鳳凰堂のような建築物まで、幅広い範囲に渡って日本文化を紹介。また、狛犬や平等院鳳凰堂の図版も挿入されている。わずか三十数ページ程度（第1号で36ページ、合併号である第5・6号でも54ページ）の雑誌であったが、上述した「極東の芸術と詩に関する近代ヨーロッパ初の評論誌」という副題に恥じぬ充実ぶりであった。その充実ぶりから、イタリア国内はおろかヨーロッパ中に、果ては南米にまでSakuraは広まったと、後に下位は語る。また、下位の友人であるダンヌンツィオはもちろん、ムッソリーニも読んでおり、ムッソリーニは毎号感想や批評を送ってくれる程の熱心な読者であったとも語っている。<sup>33</sup>

しかし、雑誌発行を助けていた日本大使館と下位の間で折り合いが悪くなると、援助が途絶えるようになり、Sakuraは1921年3月に発刊を止めた。<sup>34</sup>だが、下位は日本文学の紹介と言う作業を止めることはなく、Sakuraで紹介した与謝野晶子『青海波』や樋口一葉『にごりえ』（第5・6号で紹介）の完全訳や狂言集（第3号で團伊能が紹介）などの叢書を手掛け、1921年までに6冊を発刊している。

1921年（大正10年）の皇太子裕仁親王（のちの昭和天皇）は、欧州を訪問。その一環として7月11日から18日まで、イタリアを訪れている。その際、下位は在イタリア日本大使館の臨時囑託として、裕仁親王の案内役に抜擢。<sup>35</sup>そして、7月16日に日本大使館で開かれた晩餐会では、裕仁親王から「下位春吉教授が文学上日本の為に活動しつつあるのを称賛」<sup>36</sup>された。このときの会見の経験があったためだろうか、下位が日本に帰国後の1925年3月、皇族講話会で『最近の伊太利政情に就て』の進講をする機会を得ることになる。<sup>37</sup>

1921年、外務省からの援助を受け、下位は家族をイタリアに呼び寄せた。<sup>38</sup>しかし、三年後の1924年に帰国。1924年（大正13年）12月2日付『東京朝日』に「十年のナポリ

<sup>33</sup> 下位春吉「伊国に紹介されたる日本文学」PP.23-24

<sup>34</sup> 1924年12月2日付『東京朝日新聞』P.7。記事中に「……我が大使館との折り合いもよくなり……」という記述がある。

<sup>35</sup> 1921年7月12日付『読売新聞』P.5

<sup>36</sup> 1921年7月17日付『読売新聞』P.5

<sup>37</sup> 1925年3月15日付『読売新聞』P.5。北白川宮妃房子内親王（1890~1974）主宰の講話会で、「最近の伊太利政情に就て」進講したと述べられている。

<sup>38</sup> JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. B03040726300（外務省外交資料館）「宣伝関係雑件／囑託及補助金支給宣伝者其他宣伝費支出関係／本邦人ノ部 第三卷」より。また、1921年7月31日付『東京朝日新聞』P.5に「下位氏の家族 伊太利からお迎え」という記事が掲載される。記事では、在イタリア日本大使館が下位をイタリアに引き止めるために、家族をイタリアに呼び寄せた、と記述している。

を捨てて詩人下位氏帰る」という見出しで、下位の帰国を報じる記事が掲載される。記事によると、帰国の理由として在イタリア日本大使館との関係悪化と、1923年（大正12年）9月1日に発生した関東大震災により下位家の家作がなくなり、下位家からの送金が途絶えたことを挙げている。また、イタリア滞在中に下位春吉の次女ふみ子が亡くなり、「夫妻共に心を痛めてみた」ことを述べ、帰国理由の一つに挙げている。<sup>39</sup>

しかし、歴史家で哲学者のベネデット・クロッチェ（Benedetto Croce, 1866~1952）が第二次世界大戦後に発行する雑誌 *Quaderni della "Critica"* の Agosto 1946, N.5 に掲載された RICORDI E LETTERE DI AMICI GIAPPONESI (pp.101-111) では、下位春吉がイタリア人女性に夢中になっていることを知った春吉の妻・富士が日本に連れ帰った、と書いている。<sup>40</sup>

### (3) ファシスト・下位春吉の帰国とその活動

1924年（大正13年）12月8日、下位は帰国。第二章第四節でも述べたように、彼の帰国は12月9日付『東京朝日』で取り上げられる。国際的に名高い新渡戸稲造も下位と同じ船で帰国したが、新渡戸については少ししか触れられず、焦点は下位に当てられていた。そして、帰国同日に行われた朝日新聞社主催講演会では、新渡戸が国際協調を説く一方で、下位はファシズムの宣伝のような演説を行ったが、こちらも焦点は下位に当てられており、新渡戸の演説が50文字程度に要約されたのに対して、下位の演説は倍以上の約120文字にまとめられている。<sup>41</sup>

帰国翌年の1925年3月、下位が行った講演等（国民新聞社主催の講演会、政友会本部で行われた講演会、家庭科学社の記者によるインタビューの要約）をまとめた『フアツシヨ運動』が、民友社から出版。10月には「愛国的熱血青年を集めて一大愛国運動を主唱し」<sup>42</sup>で、興国青年党を旗揚げする。石川龍星著『日本愛国運動総覧』によると、下位の自邸があった東京府下世田谷町元宿に興国青年党本部が置かれ、以下を教条として掲げたという。

<sup>39</sup> 1924年12月2日付『東京朝日新聞』P.7

<sup>40</sup> Benedetto Croce, "Ricordi e lettere di amici giapponesi", *Quaderni della "Critica"* Vol.2 No.5 (Laterza&Figli, 1946)。インターネット上で公開されている (OJS: Open Journals Sapienza, Sapienza Università di Roma <http://ojs.uniroma1.it/index.php/quadernidellacritica>)

<sup>41</sup> 1924年12月9日付『東京朝日新聞』P.7

<sup>42</sup> 石川龍星「日本愛国運動総覧」（『戦前社会思想事典第六巻』、大空社、1992年）P.35。原本は、1932年に東京書房より出版されたが、ここでは1992年に大空社が出版した復刻版を使用。

- 一、皇室中心主義を根本とし祖国の独立強大を図るべし。
- 一、百の論議は一の実行に如かずと知るべし。
- 一、進んで戦を挑む勿れ、若し敵の襲撃を受けたらば全力を企して自己を防衛すべし。
- 一、己れの力を充実して己れを強くすることを計れ。
- 一、長上に対しては絶対の服従をたすべし。
- 一、動作は敏活なれ。
- 一、一旦議決したる以上は各自の個人的意見を棄て多衆の決したる処に従ふべし。
- 一、質素、著実、勤勉剛健、快活なるべし、艱難欠乏に堪ゆるを厭ふべからず。
- 一、相互に絶対無限の義務に服し自ら進んで自己を主張すべからず。<sup>43</sup>

石川によると、下位は興国青年党を日本におけるファシズム政党として発展拡大させることを念頭に、彼の郷里である福岡県に八ヶ所の支部を設立し、党勢の拡大に努めたと記述。しかし、その勢力はなかなか振るわず、運動資金に行き詰まるようになり、1927年夏頃には解党したと述べている。<sup>44</sup>

一方で、下位は精力的に活動をしていた。1924年12月10日から1927年7月3日までの間に、『東京朝日』上に掲載された下位春吉に関する報道は全部で14本。1927年（昭和2年）5月4日には「イタリーの子供祭」、同5月11日には「歌の都ナポリの民謡際」と題する下位のエッセイを載せているが、その量はおおよそ200文字程度。この二つの記事以外は、下位が登壇する講演会を知らせる記事が3本、下位の帰国を祝した友人等からの広告が2本、下位の著作に関する広告が2本、ダンヌンツィオに関して下位がインタビューを受けた記事1本（1927年3月19日付朝刊）、名前だけの登場3本。そして最後の一本は、下位春吉が再びイタリアに向かうため、その送別会が開かれたことを報じる記事だった（1927年7月3日付）。以下は、その記事である。

四日イタリーに向ひ永住的に渡航する下位春吉氏は二日午後三時から五時まで皇族講話会に召され「イタリーの国家的活動」についての進講の光栄に浴した後同六時より丸之内中央亭本店に開会の送別会に臨んだが小川鉄相、小笠原長生子、頭山満

<sup>43</sup> 石川龍星上掲書 P.36

<sup>44</sup> 石川龍星上掲書 PP.35-37

翁その他二百余名の来会者あり鉄相の送別辞に対し下位氏のあいさつあり食堂を開いて後新興国家主義団体有志の熱烈なる演説あり頭山翁の発声にて聖寿万歳を奉唱した<sup>45</sup>

送別会の前には、皇族への進講という名誉に浴し、そして送別会には 1927 年当時現役の鉄道大臣であった小川平吉（1870~1942）をはじめ、宮中顧問官である子爵予備役海軍中将小笠原長生（1867~1958）、そして右翼の巨頭である頭山満（1855~1944）が参加していたことは、注目すべきだろう。送別会に現役閣僚、海軍中将、右翼の巨頭が参列したことは、下位の人脈の広さを物語っている。そして、皇族への進講は、前述した 1925 年 3 月に続いておそらく二回目の進講であり、下位が日本政府から知遇を得ていたといえるだろう。

しかし記事の通り、下位は 7 月 4 日に家族と共に日本を発ち、イタリアに一旦居を移すこととなる。一方で、彼のイタリア移住と前後して、福島県会津若松市東部にある飯盛山に安置されている白虎隊記念碑に関して、一騒動があった。

白虎隊は、会津藩が戊辰戦争の勃発に際して 16 歳から 17 歳の武家の男子たちで編成した部隊である。新政府軍が会津に迫ると、白虎隊も出陣するが、抗戦むなしく敗走。20 名の隊員が飯盛山に落ち延び、会津藩の敗北を悟って自刃した。飯盛山には現在、自刃した 20 名の内、亡くなった 19 名を偲んだ墓があるが、その対面に白虎隊記念碑がある。記念碑の側にある説明文には、「ローマ市寄贈の碑」として次のような来歴が記されている。

白虎隊士の精神に深い感銘を受けたローマ市は昭和 3 年ローマ市民の名をもって、この碑が贈られた。

この碑の円柱は赤花崗で、ベスピアス火山の噴火で埋没したポンペイの廃墟から発掘した古代宮殿の柱である。

さて、記念碑が寄贈されたとされる 1928 年（昭和 3 年）4 月 4 日付『東京朝日』朝刊に、「白虎隊碑建立は下位氏の宣伝か」と題した記事が載る。記事によると、1925 年（大正 14 年）に会津若松を訪れた下位は、「ムッソリーニ氏の手を通じ同国の青少年団の義金によって飯盛山上に白虎隊表徳碑建立の計画をもたらした」という。この計画に会津若松市民は感激したが、待てど暮らせど続報が来ない。不思議に思った会津出身の物理学者で、東京

<sup>45</sup> 1927 年 7 月 3 日付『東京朝日新聞』P.11

帝大総長や貴族院勅選議員、枢密顧問官などを歴任した山川健次郎（1854~1931）が在京イタリア大使館に問い合わせたところ、この計画が「全く下位氏一個の希望」に過ぎないことが分かった。<sup>46</sup>

この騒動は、外務省内はおろかイタリアにも飛び火する。1928年（昭和3年）1月5日に、在ローマ日本大使館から外務大臣宛に「在当地下位春吉ノ行為ニ関スル件」と題された一通の電報が発せられた。電報によると、下位の白虎隊碑建立計画には陸軍も協力しており、陸軍が移送費を工面する準備を整えていたが、「今日マデ何ノ音沙汰無之為メ」陸軍が在ローマ日本大使館に調査を依頼。日本大使館がイタリア「日伊協会」会長に下位の計画を尋ねたところ、「何等知ル処ナキヤ」と計画を否定し、さらに「全ク下位ノ売名的偽言ナリト断定シテ憚ラス」と断じた。また、「ム」首相官房長「マメリー」氏にも尋ねるが、彼は「飛デモナキ事ナリ、察スルニ下位ノ詐欺的言動ナルヘン」と答え、さらには「本件ハ「ム」首相ノ名誉ニモ関スル事」だとして非難している——と伝えている。

また、この電報にはローマ大学からの抗議についても触れられている。下位は日本を離れ、再びイタリアに居を移した理由として、ローマ大学の日本文学講座の教授に招かれたためとされているが、実際にはその職には就いていない。しかし、下位は現在ローマ大学教授であるという噂があるからか、彼宛の郵便物が大学に配達されてくるので甚だ迷惑である、という抗議が日本大使館になされた。<sup>47</sup>

白虎隊記念碑に関する件とローマ大学からの抗議と併せて、在ローマ日本大使館は下位について、下位は「売名ノ為屢此種詐欺的言動」があり、また「国交上ニモ面白カラサル影響ヲ及ホス処アル」点を非難している。

白虎隊記念碑については、会津若松市民を失望させないため、また疑問を呈したのが枢密顧問官である山川健次郎であったこともあるだろう、日本政府がイタリア政府に働きかけ、イタリア政府も日伊友好の観点から、ポンペイの古代宮殿の柱一基がローマ市民名義で会津若松に贈られ、1928年（昭和3年）12月1日に会津若松市で除幕式が行われた。なお除幕式には、白虎隊記念碑建設会総裁として名を連ねていた高松宮宣仁親王（1905~1987）や、同会会長であった近衛文麿（1891~1945）が出席した。

さて、下位の二度目のイタリア滞在に関しては、上述の白虎隊記念碑に関する騒動以外、

<sup>46</sup> 1928年4月4日付『東京朝日新聞』P.7

<sup>47</sup> JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. B04012322200（外務省外交資料館）「本邦記念物関係雑件／白虎隊記念碑関係 第一巻」

1933年の再帰国まで目立った動きはない。イタリア滞在中は、彫刻家のヴィンチェンツォ・ラグーザ（Vincenzo Ragusa, 1841~1927）の妻で女流画家のラグーザ玉（1861~1939）と家族ぐるみで交流していた。「ラグーザ・玉の発見と日本への帰国—下位春吉家の人々との交流を通じて—」を著した大内紀彦は、「現在とは比較にならぬほどイタリア在住の邦人が希少だった当時、玉にとって小野七郎（引用者註：下位春吉の女婿、後に東京日日新聞ローマ支局長）や下位家の面々との友好関係が特別の意味合いを帯びたものであったことは想像に難くない。」と指摘している。<sup>48</sup>

#### (4) 1933年以降の下位春吉の軌跡

1933年、上述したように下位は家族を連れて再帰国する。1933年（昭和8年）5月9日付『東京朝日』には、シンガポールからの特電として「下位春吉氏命令で帰国」と見出しを付けた記事が載った。記事では、下位の帰国を以下のように報じている。

大使館を通じ外務省より突然の帰国命令に接した下位春吉氏は家族を連れて帰国の途箱根丸で六日寄港、三等デッキで鉢巻姿勇ましく夫人にたしなめられながらあわを飛ばしつつ気焔をあげ

帰国の理由は分らぬが国際ルンペン下位春吉の年貢納めだ、現下の欧州は近い将来に戦争が起きはせぬかと見てみるが、自分はバルカンを中心に近く爆発が起ると思ふ、ムソリーニは世界唯一の偉人だ、イタリー国民は日本の連盟脱退に同乗理解といふよりもむしろ快さを叫んでる

と語った<sup>49</sup>

一方、1933年5月25日付『読売』夕刊に載った記事「「ムツソリーニにもよく云つておいた」駐伊「私設」公使下位氏横浜着」では、下位の言葉として次のように記している。

「帰つて来た理由は別にないまあ非常時ニツポンを見に帰つて来た訳だ、本当のことを言へば駐伊帝国大使に宛て下位を帰国させると云ふ電報に接し大急ぎで帰つて来た

<sup>48</sup> 大内紀彦「ラグーザ・玉の発見と日本への帰国—下位春吉家の人々との交流を通じて—」（『イタリア図書』48号、イタリア書房、2013年）PP.10-15

<sup>49</sup> 1933年5月9日付『東京朝日新聞』P.11

ものだが多分日本に永住することにならうムツソリーニともお別れをして来た、もう一つ本当の事をいへばイタリー日本大使館の囑託をしてみた関係で政府で僕のやうなものでもイタリー通だとあつてイタリーの事情を聞くかも知れないイタリーの極東政策は兎も角誤つてゐるのではないか、日本に奪はれた支那の貿易市場を回復しやうとしてゐるが日本を敵として極東政策はあり得ないものだそれはムツソリーニにもよくいつておいた」<sup>50</sup>

外務省の帰国命令について、真偽のほどは定かではない。欧州で第二次世界大戦が勃発するのは1939年9月であり、第二次世界大戦において主動的役割を果たすことになるアドルフ・ヒトラーは、1933年1月に首相に就任したばかり。またイタリアの膨張主義政策も、1935年のエチオピア侵攻（第二次エチオピア戦争）まで待たなければならず、下位が予期していたバルカン半島を中心に起きる爆発——すなわちイタリアによるアルバニア侵攻は、1939年4月である。当時のイタリアを含む欧州において戦争はまだ遠くの存在であり、日本外務省が帰国を命じるほど危険な地ではなかった。

1930年から32年までローマ駐箚日本大使を務めていたのは、第二次世界大戦後に内閣総理大臣になる吉田茂（1878~1967）であった。ファシズムに傾倒し、ムツソリーニに熱中し、さらには白虎隊記念碑を巡る一連の問題のきっかけを作った下位は、リベラリストである吉田から敬遠され、その姿勢は吉田の後任の松島肇（1883~1961）にも受け継がれ、帰国を命ぜられた可能性もある。

一方で、1931年9月に関東軍が南満州鉄道の線路を爆破した事件（柳条湖事件）に端を発する日本と中華民国との間の緊張状態において、イタリア政府は1932年から33年にかけてムツソリーニの女婿であるガレアッツォ・チャーノ（Gian Galeazzo Ciano, 1903~1944、後にイタリア外相）を駐華公使に任じ、33年5月にはイタリア政府は中華民国へ軍事顧問団の派遣を決定するなど、その立ち位置を中華民国側に置いていた。<sup>51</sup>このことを考慮すると、ムツソリーニと親しいと自称する下位から「イタリーの事情を聞く」ために日本政府から召還を受けたことも考えられる。

下位帰国の真相は、不明である。集められた事象から分析すると、白虎隊記念碑を巡る

<sup>50</sup> 1933年5月25日付『読売新聞』P.2

<sup>51</sup> 岡俊孝「伊・エチオピア紛争(一九三五年)と日伊関係の展開」(『法と政治』40(4)、関西学院大学、1989年) PP.846-847



一連の問題をはじめとした「売名ノ為屢此種詐欺的言動」で、下位が大使館から不興を買っていたことは、想像に難くない。その中において、東アジアでは1931年に満洲事変が勃発し、1932年3月には満州国建国、そして1933年3月に中国大陸を巡る一連の問題から日本は国際連盟を脱退するなど、東アジア情勢の不透明さが顕著となっていた。東アジアの先行きが見通せない中、日本政府の気持ちは欧米諸国の出方だ。欧米諸国のひとつであるイタリアは上述したように中華民国との関係を深めている。日本政府はイタリア政府の出方を見極めるため、イタリア滞在期間が長く、常々ムッソリーニとは親しいと豪語し、また皇族への進講という経験を有していた下位春吉に白羽の矢を立て、そして下位を疎ましく思っていたらう在ローマ日本大使館は厄介払いの良い機会と言わんばかり帰国命令を發した——と考えられる。

さて、下位は二度イタリアに長期滞在した。一度目は、1914年から1924年までの十年間イタリアに滞在していたが、その間に下位は現地の文学者と交流し、ダンヌンツィオと友誼を結び、日本文学の普及に努め、その一方で第一次世界大戦に従軍し、手記を著すなど、その足跡を色濃く残している。それに対して、二度目の滞在となる1925年から1933年までの八年間は、具体的な活動記録はほとんどない。二度目の帰国（1933年）後に下位が積極的に行うこととなるに講演活動や執筆活動においても、この八年間に関しては話題に上ることはなかった。

下位は何故、この八年間の活動を話題にしなかったのだろうか。おそらく、一度目に比して、二度目の滞在は華に欠けると考えたのだろう。上述したように、帰国した1933年以降、下位は日本に留まり、講演活動や執筆活動を積極的に行うこととなるが、当時の日本は内では右翼や軍部によるクーデター未遂事件が相次ぎ、外では大陸において日本、中華民国、大陸に権益を持つ欧米諸国との間で緊張状態が続いていた。その一方、下位の二度目の滞在時期である1925年から33年までの欧州は、比較的平穏であった。いつ日中間で全面戦争が起きるかわからない当時の日本で、平穏な欧州の話では聴衆の受けが取れないと考えた下位が、自らがつぶさに体験した第一次世界大戦の話題の方が受けが良いだろうと考えたことは想像に難くない。

ダンヌンツィオとの交流やファシスト・イタリアの状況、そして第一次世界大戦の従軍経験という話題を引っ提げて、下位は講演活動や執筆活動をこなしていった。執筆活動では、出版部数100万部を突破した『キング』をはじめ、『現代』や『改造』といった当時の主要な雑誌に寄稿し、さらには1941年までに40冊程の著書を出版する。以下は、1933年

以降に下位春吉名義で出版された著書の内、共著を除いたものである。

- 『ファシズムの真髓と伊太利の産業統制』（大阪図書、1933年）
- 『社会労働問題講演集第2輯 伊国の産業政策と労働憲章』（関東産業団体連合会、1933年）
- 『ファシヨ運動と伊太利の農村振興政策に就て』（長野県人東京連合会、1933年）
- 『伊太利の組合制国家と農業政策』（ダイヤモンド社、1933年）
- 『伊太利より帰りて 非常時日本に呼びかく』（京都府教育会、1933年）
- 『伊国ファシヨ運動の精神と事業』（内閣統計局、1934年）
- ベニート・ムッソリーニ原著『これが伊太利軍だ 一九一五—一九一八年伊太利戦に対する外人の証言』（グリエルモ・スカリーゼ、1935年）
- 『日本人の誤りたる伊エ紛争観』（東京パンフレット社、1935年）
- ベニート・ムッソリーニ原著『世界国民に告ぐ』（国体明徴会、1936年）
- 『昭和の青年と世界の展望』（日本書荘、1937年）
- 『イタリアのエチオピア征服』（グリエルモ・スカリーゼ、1937年）
- ウーゴ・ナンニ原著『原料争奪の世界戦』（改造社、1940年）
- 『ファシヨ・イタリアの社会事業』（ミルコ・アルデマーニ、1940年）
- 『イタリアの参戦を回る世界政局の動向』（日本協会出版部、1940年）
- ガレアッツォ・チャーノ原著『現下の国際情勢におけるイタリアの立場』（ミルコ・アルデマーニ、1940年）
- ミルコ・アルデマーニ原著『欧洲戦後の世界革新』（国際事情研究所、1940年）
- ミルコ・アルデマーニ原著『今日のイタリア』（大民社出版部、1940年）
- 『農村青年に与ふ』（上田屋書店、1941年）
- ミルコ・アルデマーニ原著『伊国戦線を説く』（イタリア大使館情報官室、1941年）
- ミルコ・アルデマーニ原著『裏から覗いた英国』（イタリア大使館情報官室、1941年）
- ルイージ・バルジーニ原著『英米裸形三態』（イタリア大使館情報官室、1941年）
- ベニート・ムッソリーニ原著『ムッソリーニ全集第8巻 世界新秩序への胎動』（改造社、1941年）
- マリオ・アッペリウス、ルイヂ・バルジーニ原著『我等に備へあり ルーズベルト大統領演ずる所の芸当』（イタリア大使館情報官室、1941年）

ベニート・ムッソリーニ原著『厳冬の後に陽春来る』（イタリア大使館新聞情報官室、1941年）

ベニート・ムッソリーニ原著『ムッソリーニ全集第9巻 我が塹壕日記・其他』（改造社、1941年）

上の一覧を見れば、翻訳が多いということがわかる。その翻訳もムッソリーニの著書はもちろん、ムッソリーニの女婿であり、イタリア外務大臣であったガレアツォ・チャーノの著書もあるが、中でも注目すべきはグリエルモ・スカリーゼとミルコ・アルデマーニという二つの名だろう。グリエルモ・スカリーゼ（Guglielmo Scalise）は1934年から39年まで駐日イタリア大使館付駐在武官を務め、ミルコ・アルデマーニ（Mirko Ardemagni）は駐日イタリア大使館に配属されていた情報官であった。上の一覧では、グリエルモ・スカリーゼが出版元となった著書が二冊、ミルコ・アルデマーニまたはイタリア大使館情報官室（新聞情報官室）が関わったものは九冊もある。先述したインドロ・モンタネッリのインタビューによると、下位はモンタネッリに「ムッソリーニはわたしに、帰国してイタリアの宣伝をしてくれと提案した。」<sup>52</sup>と打ち明けたという。ムッソリーニ直々の依頼かどうかは不明だが、駐日イタリア大使館付駐在武官や大使館スタッフが下位の著作の出版を引き受けていたという事実は、駐日イタリア大使館ひいてはイタリア政府がイタリアとファシズムを宣伝するために支援していたことが予想できる。それを裏付けるかのように、下位の著作ではムッソリーニやファシスト・イタリアを批判する記述はなく、ムッソリーニとファシスト政権の政策を称揚し、批判の矛先は社会主義者やファシスト等政権前のイタリア政府に向けている。そのため、日本で始めて『資本論』完全訳を果たした高島素之（1886~1928）は、下位のことを「最も熱心なムッソリーニとファシズムの紹介者であろうが、忌憚なくいへば氏は如何にも職業的紹介者」<sup>53</sup>だと評したのだ。

もともと、学生時代に培った童話口演の技術が活かされたのか、下位の講演は各地で評判だったようだ。1933年に出版された『伊太利の組合制国家と農業政策』（ダイヤモンド社）のはしがきで「本文の講演をした下位春吉氏は、わざわざ紹介する必要もないほど有名な」<sup>54</sup>と紹介していることから、下位の講演が評判であり、また評判高島が「職業的紹介者」だ

<sup>52</sup> Indro Montanelli, “Shimoi” P.169

<sup>53</sup> 高島素之『ムッソリーニとその思想』（実業之世界社、1928年）P.167

<sup>54</sup> 下位春吉『伊太利の組合制国家と農業政策』（ダイヤモンド社、1933年）

と評したことがうなずけるほど活動していたことがわかる。

そして、下位のムッソリーニとファシズムの礼賛は留まるところを知らず、1935年に勃発した第二次エチオピア戦争に際しては『日本人の誤りたる伊エ紛争観』（東京パンフレット社）を刊行して、イタリア擁護の論戦を張った。第二次エチオピア戦争に対して、当時の日本はエチオピアに同情する見方が大勢を占めていた。また上述したように、日本と中華民国との間の緊張状態において、イタリアはその立ち位置を中華民国側に置いていた。さらには、1940年に開催される予定の第12回夏季オリンピックの開催都市をめぐる、東京とローマが争っていた。一度は、駐イタリア日本大使の杉村陽太郎（1884~1939）が1934年12月にムッソリーニと直接交渉して、ローマの立候補辞退を取り付けたが、1935年にオスロで開かれた国際オリンピック委員会総会では一転、ローマは改めて1940年オリンピックに立候補を表明。1935年2月26日付『大阪朝日新聞』では「イタリー寝返つて“東京大会”に一難関」という見出しが躍った。<sup>55</sup> 中華民国に対する立ち位置と、1940年オリンピックをめぐる争いから、当時の日本人のイタリアに対するイメージが大きく悪化していたことは想像に難くない。そのような中で、下位は第二次エチオピア戦争について、イタリアは平和的かつ好意的にエチオピアと接していたが、エチオピアがイタリアを敵視したため、イタリアはやむにやまれずエチオピアに侵攻した——とイタリアを擁護する。

欧州で第二次世界大戦が開戦すると、下位はドイツ・イタリアと協調し、日独伊軍事同盟を締結して、蘭印（オランダ領東インド、現インドネシア）や仏印（フランス領インドシナ、現ベトナム・ラオス・カンボジア）に進出すべきだと息巻く。1940年に発行された『イタリヤの参戦を回る世界政局の動向』（日本協会出版部）では、第二次世界大戦は「青春の血沸きかへる若人の国と、年寄りの、よぼよぼの、中風病みの国との戦争」<sup>56</sup>もしくは「伸びようとする現状打破の力と伸びさせまいとする現状維持の力と、この二つの力の衝突」<sup>57</sup>であると定義し、戦争はとことんまで続けられるだろうと予想しているが、下位は初戦の勝利から楽観的に独伊枢軸が勝利するだろう予想した。

ムッソリーニのイタリアをたたえる一方で、下位は文学者としての一面をとときどき覗かせている。1940年発刊の齊藤昌三編『書祭 人巻』（書物展望社）に「伊国に紹介されたる日本文学」を寄稿し、イタリアにおける日本文学の状況と自身が発行した雑誌『サクラ』

<sup>55</sup> 1935年2月26日付『大阪朝日新聞』P.15

<sup>56</sup> 下位春吉『イタリヤの参戦を回る世界政局の動向』（日本協会、1940年）P.25

<sup>57</sup> 下位春吉『イタリヤの参戦を回る世界政局の動向』PP.37-38

に関して述べている。1942年には、『日伊学会』（日伊学会編）で「伊国宗教説話」という紹介記事を三回に渡って掲載した。「予はカトリック信者でないために、或ひは思ひ設けぬ誤謬に陥りはしないか……といふ懸念がある」<sup>58</sup>という前置きをして、イタリアの守護聖徒に関して記している。「伊国に紹介されたる日本文学」と「伊国宗教説話」の二つは、政治色を抑えており、特に「伊国宗教説話」ではほとんどを守護聖徒に関する記述に割いており、連載第一回冒頭で「政治、社会、産業等の分野におけるファッショ・イタリアの立法、施設、事業に関する出版物が続々として市場に現はれるやうになつた事は、喜ぶべき現象である。」<sup>59</sup>とだけ述べ、それ以降はムッソリーニやファシズムについて言及されることはなかった。

精力的にファシズムの宣伝を行っていたが、終戦によって下位は表舞台から容赦なく引き摺り下ろされた。下位は枢軸陣営への支持扇動の罪により、1951年まで公職追放の身に甘んじざるをえなかった。<sup>60</sup>他方、1949年に『女性線』と言う雑誌に「ナポリの『歌まつり』』と題されるエッセイを寄稿している。そのエッセイでは、それまでのファシズムやムッソリーニへの礼賛は消え、終始ナポリの伝統的なまつりの紹介に費やされている。もちろん下位独特の熱い文体がところどころ見られるが、おおよそはそれまでの情熱が失せていったような淡々とした文体で綴られている。

その五年後の1954年11月30日、下位は脳出血のため自宅で亡くなる。享年71。<sup>61</sup>

---

<sup>58</sup> 下位春吉「伊国宗教説話(1)」(『日伊学会』4号、日伊協会、1942年) P.113

<sup>59</sup> 下位春吉「伊国宗教説話(1)」 P.113

<sup>60</sup> Indro Montanelli, “Shimoi” P.169。総理府官房監査課編『公職追放に関する覚書該当者名簿』(日比谷政経会、1949年) P.570に下位春吉の名がある。

<sup>61</sup> 1954年12月1日付『朝日新聞』夕刊 P.3に訃報が掲載されている。

## 第四章

### (1) ファシスト・下位春吉と国家社会主義者・高島素之

三島由紀夫（1925~1970）が記した評論十編を掲載する『小説家の休暇』（新潮社）がある。そこに収められた「新ファシズム論」では、左翼系の雑誌からファシスト呼ばわりされたため、かえってファシズムに興味を覚えたという三島が、ファシズムに対する三島自身の考察を述べたものだ。その中で三島は、まず現代の世界で行われている政治形態を「技術的な政治」と「世界観的な政治」の二種に大別する。近代以降の政治は世界観ではなく、科学でもなく、また芸術でもなく、政治は「一種の高度の生活の技術」と言う。しかし二十世紀にいたって、「技術的な政治」では解決しえない問題が出て、その解決に乗り出したのが「世界観的な政治」であり、その代表が Kommunismus とファシズムであると、三島は述べる。そして、Kommunismus とファシズムは共に「人工的な政治理念」であり、「世界観的な政治の最大の特徴は、一個人から生れた思想乃至観念の、現実における実現ということであり、権力は技術的なものではなく体系的なものになり、政治理念は、宗教道徳科学芸術あらゆるものを包括し、そのため一見、文化主義のような形をとることさえある。」<sup>1</sup>という。それ故、三島は「日本のいわゆるファシストたちは二十世紀的現象としてのファシズムとは縁が遠かった」と断じている。何故なら、戦前の右翼のほとんどは天皇主義者であり、そして天皇制は自然発生的なものであり、「人工的な世界観的政治形態」であるファシズムとは相容れないはずだと、三島は論じた。三島はまた、「日の丸の鉢巻や詩吟や紋付の羽織袴」の日本のファシストにインテリゲンチヤはついてゆかず、三島曰く「ニヒリズムにおもねった」ファシズムは、楽天主義的な日本の右翼とは程遠かっただろうと考察する。

三島由紀夫は、ファシズムを二十世紀の人々の精神が生み出した現象であり、歴史的な事件であると見た。十九世紀後半から二十世紀初頭にかけて欧州ではニヒリズムが蔓延し、その延長として反理知主義が盛んになっていた。そして、ニヒリズムと反理知主義におもねって現れたのがファシズムだと、三島は述べる。それ故、三島から見れば楽天的な日本の右翼とニヒリストの亜種であるファシストとの間には、隔たりがあっただろうと考察したのだ。

さて、前章で述べた下位春吉は、1933年（昭和8年）5月にイタリアから日本へ帰国す

---

<sup>1</sup> 三島由紀夫『小説家の休暇』（新潮社、1982年）P.212

る際、その船上での姿は「鉢巻姿勇まし」<sup>2</sup>い様子だった。また、同じく 1933 年 10 月に雑誌『キング』の附録として発行された『下位春吉氏熱血熱涙の大演説』（大日本雄弁会講談社）では、1931 年（昭和 6 年）に起きた柳条湖事件に端を発する日本と中華民国との間の武力衝突——いわゆる満州事変について、下位は「日本が英国に代り、米国に代つて、世界第一の地位に立ち、完全にして牢乎たる日本の地盤が、全世界の指導者として確立されるといふ、歓ばしい非常時、光明と希望に満ちたる非常時が、今もう一步の努力によつて完成せられようとしてゐるのであります。」<sup>3</sup>と、複雑に入り組んだ国際関係を考慮せず、ニヒリズムとは程遠い楽観的な将来を示している。下位の姿は、まさしく三島が語るように二十世紀的現象から程遠い「日本のいわゆるファシスト」だった。

三島は「日本のいわゆるファシスト」にインテリゲンチヤはついて行けないだろうと、戦後振り返って考えた。それでは、戦前期の日本の知識人は、下位春吉と彼の語るファシズムをどのように見ていたのであろうか。

そもそも、ファシズムとはどういうものなのだろうか。

ファシズムについて、『広辞苑』では、狭義にはファシヨ政権期のイタリアにおける政治的理念及びその体制を指し、広義にはイタリア・ファシズムと共通の本質を持つ傾向・運動・支配体制を指すもので、その共通の本質は、全体主義的かつ権威主義的で、議会政治を否認し、市民の自由を極度に抑圧し、対外的には侵略政策をとることとしつつ、一方で合理的な思想体系は持たない、と定義する。<sup>4</sup>『国史大辞典』においては、ファシズムは資本主義の全般的危機や内外の行き詰まりを背景に現れるもので、全体主義と指導者原理を基本とし、反自由主義的、反民主主義的な性格であること。内にあつては近代法治主義や議会政治を形骸化し、外に対しては近代的な国際秩序を否定し、権威主義的国際秩序の構築を目指す。イデオロギー面では、合理的な理論体系はなく、ナショナリズムや軍国主義など既成のイデオロギーを寄せ集めて独特の理論を作り上げていて、民族や国家などの「全体」に最高の価値を求める極端なナショナリズムにある、と説明する。<sup>5</sup>

『広辞苑』及び『国史大辞典』におけるファシズムの説明は、全体主義的かつ反民主主義的な政治運動及び支配体制であり、対外侵略を容認するものだとしている。この説明は、世間一般におけるファシズムのイメージをあらわしているだろう。しかし、『国史大辞典』

<sup>2</sup> 昭和 8 年（1933 年）5 月 9 日付『東京朝日新聞』11 面

<sup>3</sup> 下位春吉述『下位春吉氏熱血熱涙の大演説』（大日本雄弁会講談社、1933 年）P.131

<sup>4</sup> 岩波書店編『広辞苑 第五版』の「ファシズム」の項より。

<sup>5</sup> 吉川弘文館編『国史大辞典』の安部博純「ファシズム」より。

の説明では、ファシズムの本質を「資本主義の全般的危機における反革命の特殊な形態」とし、「単に当面の革命を潰すという意味での反革命にとどまらず、「近代」の原点であるフランス革命の事業を覆して革命の永久的根絶をはかる。」と書いている。この記述には左翼的なファシズムの見方——すなわち、ファシズムとは社会主義革命に対する資本主義側の極端な反動思想である、という考えが根底にあることが見て取れる。そのため、この項目の執筆者は「反革命」にファシズムの本質を求めるのだが、「反革命」だけをファシズムの本質とするのは難しいだろう。

政治学者の山口定（1934~2013）は、その著書『ファシズム』（岩波書店）において、ファシズムを比較史的観点で運動、思想、体制の三側面から分析。そして、政治運動におけるファシズムの一般的特性は、「指導者原理」を組織原理とし、制服を着用した政治的暴力の専門部隊を持ち、運動の基盤を中間層に見出し、運動の指導者層にはいわゆる「軍人くずれ」を中心としている、と見る。思想面では、ナショナリズムの激しい昂揚と「指導者」崇拜によって国民社会の再統合を求め、その一方で政治的・社会的没落の危機に瀕した中間層の意識を反映するために、既成の伝統的支配層に反発し、またマルクス主義や社会主義には敵対するという二面性を持つものとした。体制面では、(1)一党独裁とそれを可能にするために画一的で全面的な組織化の強行、(2)自由主義的諸権利の全面的抑圧と政治警察を中核とするテロの全面的制度化、(3)「新しい秩序」と「新しい人間」の形成に向けた大衆の動員、(4)軍や官僚、財界など既成支配層の反動化した部分（「権威主義的反動」）と中間層を基盤とした急進的大衆運動（「疑似革命」）との政治的同盟——この四点に整理している。<sup>6</sup>

山口のファシズム論において重視されているのが「権威主義的反動」と「疑似革命」という二つの概念である。山口は、ファシズムの思想は急進化した中間層のイデオロギーに由来する要素が色濃いと指摘。<sup>7</sup>その一方で、ファシズムの支配体制は「権威主義的反動」と「疑似革命」が結合によって成立すると言う。<sup>8</sup>つまり、既存の支配層に反発する急進的な中間層（「疑似革命」）がなければファシズムは運動面でも思想面でも成り立たないが、その一方で、既存の支配層の一部（「権威主義的反動」）と結びつかなければファシズムは体制化されない、ということが読み取れる。

---

<sup>6</sup> 山口定『ファシズム』（岩波書店、2006年）PP.15-36

<sup>7</sup> 山口上掲書 P.34

<sup>8</sup> 山口上掲書 P.226



論者はファシズムを現状に不満を持つ者たちの集合体としての意識であると考え、ファシズムの語源は、イタリア語のファッショ *fascio*（原義は「束」）であり、さらにこのファッショの由来は、古代ローマの執政官が権威の象徴として持っていたファスケス *fascēs* という斧の周りを木で束ねたものだ。このファスケスのように、現状に不満を持つ者をムッソリーニが一つに束ねた。第一章でも述べたように、ファッショ運動は、元社会主義者のムッソリーニをはじめ、未来派、第一次世界大戦からの帰還兵、中産階級、青年層、サンディカリストなどが集まってできたものだ。ムッソリーニは第一次世界大戦に対する中立論で固まった当時のイタリア社会党に不満を持ち、未来派は既存の芸術や権威に反発する。帰還兵は自分たちを邪魔者扱いする社会に不満を抱き、中間層は自分たちの生活を脅かす社会主義者に反発し、青年層は既存の政治体制に疑問を呈する。現状に不満を持つ者たちはムッソリーニの下に集まり、ムッソリーニは疑似革命的な呼びかけ<sup>9</sup>や社会主義者たちへの敵対心を煽ることで不満を持つ者たちを束ねた。

もっとも、束ねた側のムッソリーニには、彼自身の下に集まった人たちの不満に同意し、その解消に努め、その一方で集まった人たちを統制しなければならない。そのため、彼の政策は機会主義的になり、またイデオロギーよりも行動を重視するようになる。

さて、先の章でも取り上げたように、高島素之は『読売新聞』に寄稿したコラム上で、下位を「最も熱心なムッソリーニとファシズムの紹介者」と評する一方で、「職業的紹介者」と批判している。高島のコラムの論点は、映画を見た際に弁士がムッソリーニを「皇室中心主義者」と称賛していたことに対して、ムッソリーニは本を正せば共和主義者であり、政権獲得の手段としてイタリア王室の存在を認めただけに過ぎない、と主張するところにある。この高島のコラムに対して、詩人の福士幸次郎<sup>10</sup>（1889~1946）が1927年（昭和2年）12月14日付『読売新聞』紙上において、「高島素之氏を駁す ムッ

---

<sup>9</sup> 1919年6月6日付のイタリア戦闘者ファッショ機関紙『イタリア人民』*Il Popolo d'Italia*において、ファシストのマニフェストが発表された。そのマニフェストでは、男女普通選挙制の実施、労働や産業などに関する専門の評議会の形成とその代表者の政治参加、八時間労働制、最低賃金制、産業と公共事業の管理のプロレタリア組織への委託、老齢年金の受給年齢の引き下げ、軍需産業の国有化、あらゆる資産に対する強力な累進課税制度などを訴えている。このマニフェストは、藤岡寛己著『原初的ファシズムの誕生』（御茶の水書房、2007年）に藤岡訳による日本語版が資料として所収され（同書PP.157-159）、またイタリア語版 Wikisource に原文が掲載されている。

[https://it.wikisource.org/wiki/Manifesto\\_dei\\_Fasci\\_italiani\\_di\\_combattimento,\\_pubblicato\\_su\\_%22Il\\_Popolo\\_d'Italia%22\\_del\\_6\\_giugno\\_1919](https://it.wikisource.org/wiki/Manifesto_dei_Fasci_italiani_di_combattimento,_pubblicato_su_%22Il_Popolo_d'Italia%22_del_6_giugno_1919)

<sup>10</sup> 福士幸次郎は1932年（昭和7年）に日本ファシズム連盟を結成している。（内務省警保局編『社会運動の状況』）

ソリーニは皇室中心主義」という評論を寄稿し、ムッソリーニは皇室中心主義者であると反論した。福士は其中で、高島が下位を「職業的紹介者」とであると批判したことを「下位春吉氏を暗にブローカー扱ひする等、彼の暴状は余りにひどい因にいふ。」<sup>11</sup>と反発する。福士の反論に対して、高島は第三章で述べた白虎隊記念碑を巡る騒動を持ち出した上で、次のように返している。

が、それもよしこれもよし、降りかかる火の子なら『下位春吉』を『ブローカー』とも呼ばうぢやないか。ムッソリーニの兄弟分らしく吹聴し、故国への『売り込み』を忘れないところは鞘取りをしたせぬに拘らず、これをブローカーと呼ぶのは当今の常識である。(中略) 下位春吉といふ人は、少くとも僕よりはブローカー的だらうぢやないか。<sup>12</sup>

福士の反論を逆手に取り、下位はブローカーであると扱き下ろしたのである。またイタリア政府をも巻き込んだ白虎隊記念碑騒動にも言及しており、高島は下位を信用できないと思っていたことがうかがえる。

その一方で、高島はムッソリーニについては好意的に見ている。高島は著書の中で、新聞社(時事新報)から現代世界の人物の中で誰がいちばん好きかと尋ねられたとき、ムッソリーニの名を挙げたこと明かし、彼の性格について次のように語った。

……、かばかり浮世の荒波で叩き上げられた情熱と、強情と、鉄腕の人傑たる彼れが、ときどき稚氣と銜気を彷彿させる地がねを遠慮なく露出してゆくところが、ひどく気に入ったといふのであつた。<sup>13</sup>

高島は上記のようにムッソリーニの人柄を称揚しつつも、ムッソリーニを礼賛しているわけではないとも言う。その理由として、ムッソリーニの思想と、高島が掲げる「国家社会主義」との間には共通する点は少なく、むしろ反対する点が非常に多いと語る。そして、ムッソリーニの思想には、思想というほどの体系もなく、「西洋には不死の死といふ言葉

---

<sup>11</sup> 昭和2年(1927年)12月14日付『読売新聞』4面

<sup>12</sup> 高島素之『ムッソリーニとその思想』(実業之世界社、1928年)P.186

<sup>13</sup> 高島前掲書P.81

があるが、強いてムツソリーニの思想を求めるならば、それは恐らく無思想の思想」<sup>14</sup> または「素朴プラグマチズム」<sup>15</sup>だと批評した。そして、その「素朴プラグマチズム」を根底として、その上に極端な実行主義とオポチュニズムで、ムツソリーニの思想——すなわちファシズムは成り立っていると、高島は考察する。

高島の考察に対して、下位はファシズムをどのように見ていたのであろうか。下位は著書や雑誌に寄稿した記事、そして講演と、様々な媒体でファシズムについて語っており、ファシズムを次のように定義している。

ファシズムとは、国民の歴史並に伝統を基礎とし、現代に最も必要適切なる施設を施し、国民精神を統一し、以て樹立する実行的運動である<sup>16</sup>

ファシズムは、その国の歴史と伝統を基礎としている。だから、イタリアにはイタリアのファシズムがあって、日本には日本のファシズムがある。しかし、歴史と伝統を基礎としているからといって、復古主義という訳ではない。「現代に最も必要適切なる施設を施し」とあることから、現代社会に必要で、適切な政策は、たとえ社会主義や共産主義に近いような政策であっても、現代社会が必要としているのならば採用し、実行する。そして、「現代に最も必要適切なる施設」を実行する過程で国民精神を統一し、最終的には本当の挙国一致体制を築き、それを不動のものとする。——下位はファシズムをこのように語る。

そして、下位がファシズムにおいて最も重視していることが、「実行的運動」という点である。ファシズムは政治思想でもなければ、共産主義に対抗する反動勢力に貼られるレッテルでもなく、国民精神統一のための「大なる精神運動であり信仰運動である」という。<sup>17</sup>国民精神統一の過程で重要なことが、「実行的運動」なのだと述べる。そのためだろう、下位の著作においてファシズムについて述べる際、その思想や定義についての説明は少なく、上述した定義で完結。その代わりに、「実行的運動」であることを強調するように、ムツソリーニの行動や彼が進めた事業に紙数を割いている。そして行動や事業の結果を重視し、その一方で経過は軽視した。

---

<sup>14</sup> 高島前掲書 P.83

<sup>15</sup> 高島前掲書 P.101

<sup>16</sup> 下位春吉述『伊太利の組合制国家と農業政策』（ダイヤモンド社、1933年）P.8。下位春吉述『下位春吉氏熱血熱涙の大演説』P.91でも同様の定義を示している。

<sup>17</sup> 『伊太利の組合制国家と農業政策』P.4

例えばムッソリーニ政権の財政政策について、1925年（大正14年）に出版された下位春吉述『ファッショ運動』（民友社）の巻末に収録された論文「ファシスト治下の伊太利財政」（早坂二郎筆）では、ムッソリーニ政権下で達成されたとされる歳入不足の改善と通貨収縮は、前政権（ファクタ内閣）の政策を踏襲したに過ぎず、「彼等（引用者注：ムッソリーニ政権）の財政方面に於て示したる業績は、決して輝かしく傑出した近代的価値あるものではない。」<sup>18</sup>と早坂は批判。この批判に対して下位は、イタリア財政はムッソリーニ政権下で始めて立て直されたと強調して、従来の政策を踏襲したという批判は無知からくるものであり、乱暴な議論だと駁し、「学者としてならば、言語も場合によつては価値があらう。しかし為政者としては、実行なき言語のみの政府はゼロである事を、その論者は御存じないらしい。」<sup>19</sup>と皮肉った。つまり、真新しい政策ではなく、前任者の政策やありふれた方法を倣ったものであっても、結果が出せたのならば成功であり、その政策を実行した人の成果だというのである。下位は早坂の批判を乱暴だと批判したが、下位の言説は行動や結果を重視し、一方でその過程を軽視したもので、彼の言説もまた乱暴だと言わざるを得ない。

さて、下位はファシズムを思想ではなく、「実行的運動」であると定義した。その一方で、高島素之はファシズムには思想的体系は無く、極端な実行主義で成り立っていると見る。下位はファシズムが思想ではないと説き、一方で高島はファシズムに思想性がないことを問題にしているが、ファシズムが実行主義であるという点では両者の意見は一致している。しかし上述したように、高島は下位を信用していなかったことがうかがえる。それでは、下位は高島をどのように見ていたのであろうか。

1937年（昭和12年）、北吟吉（1885~1961）<sup>20</sup>が編者を務めて、『ファツシヨと国家社会主義』（日本書荘）という本が出版された。この本は、当時話題になっていた「国家社会主義」について批判的な論文をまとめたものである。論文の筆者は、編者の北吟吉はもちろん、五来欣造（1875~1944）や土田杏村（1891~1934）など当時の知識人が記したものが所収され、さらには狂信的な右翼思想家である簗田胸喜（1894~1946）の論考もある。また、下位春吉も寄稿している。そして、ここで槍玉にあがっているものが、高島の提唱

<sup>18</sup> 下位春吉述『ファッショ運動』（民友社、1925年）

<sup>19</sup> 下位春吉『ムッソリーニの獅子吼』（大日本雄弁下位講談社、1929年）P.16

<sup>20</sup> 哲学者。実兄は北一輝（1883~1937）。

した「国家社会主義」だ。それでは、高島が提唱する「国家社会主義」とは、どういう思想なのだろうか。

高島素之は、「資本労働の対立が、資本主義の存在が、国家滅亡の必然的原因」<sup>21</sup>であることを強調する。そして国家の滅亡を回避し、国家存続、国体護持のため社会主義を利用すべきだと論じた。カール・マルクス（Karl Marx, 1818~1883）の『共産党宣言』において、マルクスは「近代的国家権力は、単に、全ブルジョア階級の共通の義務をつかさどる委員会にすぎない」<sup>22</sup>と述べ、国家をブルジョワ階級のための機関、または支配階級が被支配階級を抑圧するための組織に過ぎないと言う。それに対して、高島は国家を支配・統制のための機関と考えた。

生物は、生存競争の中で自己を保存する必要がある。しかし、猛獣や毒蛇のように高い戦闘力や特殊な武器を備えているならばともかく、生存競争に有利な武器が与えられていない動物もいる。そういった生物は、自己保存の必要上、社会的に結合することによって、猛獣などに対抗しようとした。人間は、社会的結合を以て猛獣に対抗したのだ。自己保存の必要性から生じた社会的結合は、発達するにつれて社会的結合を維持しようとする社会的本能もまた発達し、さらに社会的結合は強化されていく。もともと、社会的本能が発達する過程で、自己保存本能も刺激され、社会的本能に対抗する形で猜疑心や優勝欲を形成。猜疑心や優勝欲（自分の力を社会的に誇示し、認識させようとする欲望）は自己保存本能と結合し、複雑なエゴイズムを形作ることとなった。このエゴイズムを放置していたら、社会的結合は破壊されかねない。しかし原始的な社会的本能では、このエゴイズムを抑えることは出来ないで、新しい社会的結合の要素として、「支配」という機能が生まれた。

そして、社会が複雑化し、異質結合が進むにつれて、「支配」機能も分化独立するようになる。この動きを進める一つの要因が優勝欲だ。その優勝欲に刺激され、社会同士が衝突し、一方の社会が他方の社会を支配するようになった。ここに征服者と被征服者の関係がつくられた。一方の社会が有していた「支配」機能は征服者の社会に移動したそのとき、支配階級と被支配階級が形成されることとなった。そうして、ある社会がある地域に定住し、「支配」機能が支配階級に帰されたとき、その社会を国家と言うようになる。<sup>23</sup>

<sup>21</sup> 高島素之「労働者に国家あらしめよ—国家社会主義の理論的根拠」（『国家社会主義』第1巻第1号、売文社、1919年）PP2-4

<sup>22</sup> K.マルクス・F.エンゲルス『共産党宣言』（岩波書店、1951年）P.44

<sup>23</sup> 高島素之『マルキシズムと国家主義』（改造社、1927年）PP161-176

国家の本来の機能は「支配」であり、階級支配は国家の本質的な要素である。しかし、今日の国家の支配階級には「搾取」という「不純要素が混じつてゐる」<sup>24</sup>。国家社会主義の目標は、支配階級が被支配階級の労働を搾取するという不純要素を除き、「支配」に特化した支配階級に純化することだ——と、高畠は主張した。

先に挙げた『ファツシヨと国家社会主義』の序文において、編者の北吟吉は高畠の提唱した国家社会主義を「皇室とか日本とか国家とかいふ安全語を冠して居るが、其の实体は和製ボルシェビズム」<sup>25</sup>であり、事実上の「一国社会主義」であると批判し、これを「撃滅」するべきだと断じている。北は、国家社会主義を「撃滅」しなければならない理由として、第一に産業が国有化された場合、その経営者には誰が就くのか、そして誰が任命するのかははっきりしないこと。第二に国営事業が多くなれば、利権をめぐる政権争いはますます過熱化することが予想されること。第三に国営事業の経営は国民の極一部に委ねられることになり、いずれは国営事業がそのごく一部の私有物となりかねないこと。——以上の三つを挙げた。そして、国家社会主義が成功するには「道德意識の濃厚な一大偉人か、少数偉人の一群か、政権を把握して、生産と分配とを科学的に統制し得る幸運な場合に限られる」<sup>26</sup>と論じ、また国家を成り立たせているのは官僚であることを考えれば、国家社会主義は「官僚を重役とする官僚資本主義であり、官僚専制主義」<sup>27</sup>だと批判する。

それでは下位春吉は、国家社会主義に対してどのような意見を持っていたのだろうか。先に述べたように、下位は北吟吉編『ファツシヨと国家社会主義』に、「ムツソリーニと国家社会主義」という題で寄稿している。その文中で、下位はファシズムと国家社会主義は異なることを繰り返し述べている。その根拠として、下位はファシスト党政権が 1927 年 4 月に制定した「労働憲章」<sup>28</sup>を挙げ、労働憲章の条文から「ファツシヨ政体の産業制

<sup>24</sup> 高畠素之『批判マルクス主義』（日本評論社、1929年）P.201

<sup>25</sup> 北吟吉編『ファツシヨと国家社会主義』（日本書荘、1937年）P.1

<sup>26</sup> 北吟吉編『ファツシヨと国家社会主義』（日本書荘、1937年）P.7

<sup>27</sup> 上掲書 P.8

<sup>28</sup> *La Carta del Lavoro*。1927年4月にファシズム大評議会（1922年末に設置された、イタリア政府と国家ファシスト党 PNF の調整機関）で採択される。労働憲章では、有給休暇や時間外勤務手当の増額などを規定する一方で、労働者及び労働組合に対する国家の優位を定めている。また第9条で、国家の経済への干渉は、私企業の参画が不足しているか欠如している場合、または国家の政治的利害が介在する場合に限っている。法令ではないので、法的拘束力はない。労働憲章の全文は、ミラノ大学私法・法制史学部のデジタル・ライブラリーに掲載され、インターネット上で公開されている。

<http://www.historia.unimi.it/sezione/fonti/codificazione/cartalavoro.pdf>

度は、民営尊重であり、従つて国営反対である事が直ちに首肯せられるであらう。」と述べる。ファシスト党政権の民営尊重の証左として、下位は鉄道、郵便、電信、電話、煙草などの国営事業が順次民営に移管されたことを挙げた。<sup>29</sup>確かにムッソリーニ政権初期に財務相を務めたアルベルト・デ・ステファニ (Alberto De Stefani, 1879~1969) が自由主義経済論者であり、貿易拡大と国営企業の民営化に賛成していたため、国家独占であった生命保険事業と電信電話事業は企業家側からの要求に従つて、国家独占を解消している。<sup>30</sup>しかし鉄道事業は、1905年に公共事業省が所管する国家鉄道局FS, *Ferrovie dello Stato*という半ば自立的な行政機関として国有化されており、ファシズム期においても民営化はされず、1985年に公社化、1992年によく国が株式を保有する形で株式会社に転換した。そして、民営尊重の自由主義経済路線は、1925年に財務相がジュゼッペ・ヴォルピ (Giuseppe Volpi, 1877~1947) に交代したことで、軌道修正<sup>31</sup>される。そして1929年に世界恐慌が始まると、イタリア政府は恐慌によって経営難に陥った企業を救済するための機関として1931年にイタリア動産公社IMI, *Istituto mobiliare italiano*、1933年には産業復興公社IRI, *Istituto per la ricostruzione industrial* をそれぞれ設立している。特にIRIはイタリアの三つの基幹銀行の経営権を手に入れ、さらにはそれらが所有する企業の株式の所有権も手に入れ、産業の国家統制を強めていった。<sup>32</sup>下位は、ファシスト政権は民営尊重だと説明したが、その実態は異なり、ファシスト党政権は産業を国家統制下に置きつつあった。

さて、下位はファシズムと国家社会主義を同一視するような見方を嫌っていたが、世間はこの二つを同一視していた。内務省警保局は1932年(昭和7年)に「ファシズムの理論」という題で、ファシズムの理論や日本国内におけるファシズムを信奉する団体、そしてファシズムに反対する団体を文書にまとめている。文書では、ファシズムは資本主義

---

<sup>29</sup> 上掲書 PP.26-27

<sup>30</sup> シモーナ・コラリーツィ著 村上信一郎監訳『イタリア 20世紀史』(名古屋大学出版会、2010年) P.118 イタリアの生命保険事業は1912年以来、法律により国家が独占していた。

<sup>31</sup> デ・ステファニは経済への国家介入に反対する立場を取っていたが、ムッソリーニが通貨リラの下落(1922年時点では1スターリング・ポンド=90リラだったのが、1925年7月には1ポンド=132リラになった)への対策を志向したため、財務相を保護貿易論者であったヴォルピに交代させた。その後、政府がリラを買うことで、リラ相場は1928年には1ポンド=85リラにまで上昇する。(ニコラス・ファレル著 柴野均訳『ムッソリーニ上』(白水社、2011年) PP.336-339)

<sup>32</sup> 上掲書 PP.159-160

経済が動揺したときに現れる特異な運動形態であるとしながらも、「一般に『反動』はすべて『ファッション』であるかの如き考へが可成り広汎に普及してゐる様である。」<sup>33</sup>と記述。そして、世間ではファシズム団体とみなされている団体が様々あるが、この文書ではファシズム団体を国家主義、反議会主義、反共産主義の三つの特色を持つものに限定して抽出した。そうして抜き出された諸団体を、この文書は主に二つの系統に分けている。一つは天皇と一般国民の間に介在する中間階級を排除し、君民一致の理想を実現しようとする日本主義系である。なお、上で取り上げた北吟吉編『フアツシヨと国家社会主義』は、序文で日本主義の立場を明確にしている。<sup>34</sup>日本主義系に対するファシズムのもう一つの系統が、高島素之が提唱した国家社会主義の流れをくむグループである。両者の違いは、日本主義系が「高踏的、浪漫的な謂はば一種独特の社会主義理論」であるのに対して、国家社会主義系は「マルクス主義の研究の上に基礎を置き、科学的な論陣を展開」していると、内務省警保局は分析した。<sup>35</sup>下位春吉はファシズムと国家社会主義は違ふと強弁するが、世間は同一のものとみなし、警察も国家社会主義をファシズム諸団体の二大派閥のひとつと位置づけていた。そして、高島素之もファシズムは将来的に国家社会主義になると予想していた。

1928年に没するまで、高島はムッソリーニの経済政策をつぶさに見た結果、政治においては「国家集権主義」であるのに対して、経済政策は「寧ろ極端なる分権主義を採用するもの」と見た。<sup>36</sup>高島は、ムッソリーニの集権的な独裁政治は産業の社会化の絶好の機会であったのに、資本家の要求に呼応して、自由主義的経済政策を採用したことは「論理上の破綻を意味すると同時に、また事実上の苦境を予兆するもの」<sup>37</sup>だと批判。しかし将来、社会の動き次第では、「その独裁的国家集権主義の苛烈さを民主的に緩和させて産業自由主義を救済するか、然らずんばその産業自由主義を放擲して、経済上にも、政治上にも、国家的集権主義を徹底的に一貫せしめるか」のいずれかを選ばなくてはならなくなり、ムッソリーニ政権は「結局、後者に落ちつくのではないかと信ぜしめる可能が比較的多いやうでもある。」と高島は予測した。<sup>38</sup>結果としては高島の予測が当たって、ムッ

<sup>33</sup> 『現代史資料 4 国家社会主義運動 1』（みすず書房、1963年）P.295

<sup>34</sup> 北吟吉編『フアツシヨと国家社会主義』（日本書荘、1937年）P.12

<sup>35</sup> 『現代史資料 4 国家社会主義運動 1』（みすず書房、1963年）P.296

<sup>36</sup> 高島素之『ムッソリーニとその思想』（実業之世界社、1928年）P.105

<sup>37</sup> 高島上掲書 P.112

<sup>38</sup> 高島上掲書 PP.113-114



ソリーニはイタリア動産公社IMIと産業復興公社IRIを使って、ゆるやかなものではあるが産業の集権化を成し遂げた。

高島素之は、1929年10月24日にニューヨーク証券取引所で株価が大暴落したこと（いわゆる「暗黒の木曜日」）をきっかけとする世界恐慌を見る前に没したが、ムッソリーニ政権のその後の経済政策を予見したことは、彼の言葉とその後のムッソリーニ政権の政策が証明している。それに対して、下位春吉は1927年から33年までイタリアで過ごした。ムッソリーニ政権が世界恐慌を経て、産業統制を進めつつあったのを見ていただろう。日本帰国後に出版された『下位春吉氏熱血熱涙の大演説』（1933年）では、下位は次のように語っている。

……現代イタリアの最初から今日に至るまで、いはゞイタリアそのものを、身自ら生活して来たのであります。随って書物や新聞雑誌などに出て来ない、隠れたる事実や思想の如きも、相当解ってゐる心算なので、それを腹藏なくお話致したいと思ふのであります。<sup>39</sup>

長くイタリアで生活し、ムッソリーニ政権についてよく知っていると言語した下位春吉が、ムッソリーニ政権の経済政策に関する理解が先に引いた「ムッソリーニと国家社会主義」で見られるように1920年代のそれで留まっていたのは、何故だろうか。

1933年以降、下位春吉が雑誌などに寄稿したテキストを見ると、「ダンヌンツィオの横顔」（『改造』20巻4号、1938年、改造社）や「人間ダンヌンツィオ」（日伊協会会報第3巻、1943年、日伊協会）ではダンヌンツィオとの交流の思い出を描き、「伊国に紹介される日本文学」（斎藤昌三編『書祭』人巻、1940年、書物展望社）ではイタリアにおける日本文学の状況を語り、「伊国宗教説話」（*Studi di Cultura Italo-Giapponese* 第4、5、7巻、1942年、日伊協会）ではイタリアの守護聖人について記している。これらのテキストでは、ムッソリーニやファシズムに関する記述は希薄だ。そして、第三章でも触れたが、1933年以降1941年までに下位春吉名義で出版された書籍（共著を除く）の中で、半分以上はイタリア語によるイタリア政府のプロパガンダのような冊子を翻訳したものだが、翻訳作品以外を見ると『社会労働問題講演集第2輯 伊国の産業政策と労働憲章』（関東産業団体連合会、1933年）、『ファッショ運動と伊太利の農村振興政策に就て』（長野県人東京

<sup>39</sup> 下位春吉述『下位春吉氏熱血熱涙の大演説』（大日本雄弁会講談社、1933年）P.12

連合会、1933年）、『伊太利の組合制国家と農業政策』（ダイヤモンド社、1933年）、『農村青年に与ふ』（上田屋書店、1941年）など、労働政策や農業政策に主眼を置いた作品が見られる。

労働政策について述べた下位の著作のひとつに、1932年に春秋社から出版された『ファッショ政体に於ける労働政策』という本がある。この本では、まず「ファッショ政府の労働政策を理解するためには、全世界を通じての労資関係の経程について、一般的な知識を有することが必要である。」<sup>40</sup>という書き出しで始まり、労働問題が社会的問題になるまでの歴史的経緯を述べ、イギリスやロシア、ドイツなど欧州諸国における当時の社会問題の現状を書き、社会問題に対して歴史上どのような政策が採られたのかを記述。そして、ファシスト・イタリアが社会問題に対してどのような政策を取っているのかを、労働憲章や法令、実際に行われた政策や制度を例示して説明している。序文において、下位は自身の専門は文学であり、法律や経済などには縁がなく、本文中で用いられた用語などは「その多くは、既に専門家の間に用ゐられてゐる常用の術語とは違つてゐるであらう。」<sup>41</sup>という断りが入れているが、労働憲章及びファシスト・イタリアの労働法を下位自身が訳し、実施されている社会政策や社会保障制度を丁寧に語っており、ファシスト・イタリアの社会政策を知る上で有益な書と言えるだろう。

農業政策について述べた本として1941年2月に出版された『農村青年に与ふ』を挙げる。この本は、1934年1月から12月までのわずか一年間ではあるが日本農林新聞社長に就いていた下位春吉が、日本農林新聞紙上に寄せたテキストをまとめたものである。巻頭には下位が日本農林新聞社長に就任したときに掲載された挨拶文が配されており、そこで下位は「在来のわが国の政治は、あまりにも商工業者のための政治」であり、「都市のための政治」であったと批判し、一方でファシスト・イタリアは農業本位の国是を樹立して、農業政策を刷新し、その政策は今や世界中で驚嘆の的となっている——と記述。<sup>42</sup>続く本文では、農村での取材<sup>43</sup>を基にした論説もある一方で、農村の疲弊を憂い、時の内閣である齋藤實内閣（1932~1934）を「スロー・モーション内閣」<sup>44</sup>と揶揄する。そしてやり玉

<sup>40</sup> 下位春吉『ファッショ政体に於ける労働政策』（春秋社、1932年）P.1

<sup>41</sup> 下位春吉『ファッショ政体における労働政策』PP.3-4

<sup>42</sup> 下位春吉『農村青年に与ふ』（上田屋書店、1941年）PP.2-3

<sup>43</sup> 『農村青年に与ふ』の記述によれば、長野県、愛知県、滋賀県、石川県、愛媛県、和歌山県、青森県、そして朝鮮と満洲を訪れている。

<sup>44</sup> 下位春吉『農村青年に与ふ』P.5

に挙げられているのが、1932 年から実施されていた農山漁村経済更生運動<sup>45</sup>だ。運動について下位は、『自力更生』とか『農村精神作興』とか、愚にもつかぬよまひ言で、農村が救はれるだらうと思つておいでなさる当局の愚かさが憐れである<sup>46</sup>と痛烈に批判している。

さて、『ファッショ政体に於ける労働政策』及び『農村青年に与ふ』の二つの書に共通するテーマは、貧富の差と地方格差についてである。下位は、古代のように外敵による武力侵攻によって国家が亡びることは現在ではありえないと論じるが、国内問題によって衰退する可能性を示唆する。

之れに反して、国家百年の憂ひは国内に在る。国家は国民自らの覚悟に依つて興隆もし、衰滅もする。その国家衰滅の禍根は、上下の貧富の懸隔と、都市と地方との繁栄衰頹の差とが深刻となるために生ずるのである。<sup>47</sup>

下位春吉がこう述べた『ファッショ政体に於ける労働政策』が出版された 1932 年（昭和 7 年）には、2 月から 3 月にかけて血盟団事件<sup>48</sup>が、そして 5 月 15 日には海軍の青年将校によって時の首相である犬養毅（1855~1932）が射殺されるという事件（五・一五事件）が起きた。いずれの事件もその背景に貧富の差と農村の疲弊があった。1929 年に起きた世界恐慌という嵐は、1930 年になると昭和恐慌として日本にも押し寄せ、経済は混乱。経済混乱の余波は当然農村にも及んだ。1930 年代の日本は、経済不況や農村の疲弊といった国内問題の解決が叫ばれていた時期であった。そうした問題山積の時期において、下位がファシスト・イタリアの労働政策や農業政策に関する作品を相次いで出したのは、当時の日本国内における社会不安や農村の疲弊などといった問題の解決を求める潮流に乗って、それらを解決する手段としてのファシズムを喧伝するためだったのだろう。

---

<sup>45</sup> 昭和恐慌以降、農村における経済対策として実施された運動。農村の自力更生を基本として、政府が毎年 1000 町村を経済更生指定町村に指定し、補助金を出して、土地分配の整備、土地利用の合理化、農村金融の改善などを進めた。（小学館編『日本大百科事典』の森武磨筆「農山漁村経済更生運動」より）

<sup>46</sup> 下位春吉『農村青年に与ふ』P.51

<sup>47</sup> 下位春吉『ファッショ政体における労働政策』P.74

<sup>48</sup> 日蓮宗の僧侶・井上日召（1886~1967）を中心とするいわゆる「血盟団」が、第二次若槻内閣の蔵相であった井上準之助（1869~1932）と三井合名理事長・團琢磨（1858~1932）を暗殺した連続テロ事件。

その一方で、ムッソリーニ政権の経済に関する下位の言説が、ムッソリーニ政権産業統制を進めつつあった 1930 年代の政策ではなく、1920 年代の自由主義的な経済政策に留まっていたのは、高島素之が提唱した国家社会主義と差別化を図るためであったと考えられる。

高島素之が提唱した国家社会主義は、1928 年に高島が没した後、高島門下の津久井龍雄（1901~1989）が 1929 年に国家社会主義政党として急進愛国党<sup>49</sup>を結党し、1932 年には社会民衆党を脱党して国家社会主義に転向した赤松克磨（1894~1955）が日本国家社会党を、同じ年に平凡社の創業者である下中弥三郎（1878~1961）が新日本国民同盟を結党している。急進愛国党は 1932 年に黒龍会の内田良平（1874~1937）が立ち上げた大日本生産党に合流したが、日本国家社会党と新日本国民同盟という二つの国家社会主義系政党の人員は合わせて約 2 万 5 千人いたと言われている。<sup>50</sup>そして先に取り上げた内務省警保局の文書「ファシズムの理論」において、国家社会主義はファシズム二大系統のひとつとして捉えられていた。2 万 5 千人もの人員を抱える二つの国家社会主義政党と、国家社会主義はファシズムの一種であるという世間の認識を前にして、下位はファシズムと国家社会主義の違いをわかりやすくするために、ファシズムは国家社会主義のような統制経済ではなく、民間尊重の自由主義経済であることを訴えたのだろう。

下位の初期の著書である『ファツシヨ運動』（1924 年）の冒頭において、当時の日本のマスメディアによるファシズムに関する報道がイギリスやフランス、ドイツの報道をそのまま引用する形で伝えられたため、「動もすれば自分の方に都合の良い判断をし、嫉妬心の眼を有ち、恐怖心の眼を以て見た、其報道批評が直に日本に来る。其処でファツシヨの真相を余り能く知ってゐる方がゐないと思つて、先づ第一に私は此問題を提げて日本国民に懇へて見たいと思ふ。」<sup>51</sup>と下位は記述している。公正に、嫉妬心や恐怖心で左右されずに伝えたいと語っていたが、その実下位はムッソリーニについて語るときムッソリーニがかつて熱心な社会主義者であったことを隠し、ファシストによる政権奪取を「ファツシヨ維新」と称するなど、公正とは言い難いものだった。そして下位がファシズムは統制経済ではなく自由主義経済だと述べたことは、下位が国家社会主義に対して持っていた嫉妬心

---

<sup>49</sup> 日本国体と日本民族の世界的発展、疲弊した国民大衆の政治的経済的社会的解放、現在の世界秩序の打破と日本の皇道に基づき新たな秩序の実現——の三項を綱領として急進愛国党は成立した。

<sup>50</sup> 田中真人『高島素之 日本国家社会主義』（現代評論社、1978 年）PP.279-288

<sup>51</sup> 下位春吉述『ファツシヨ運動』（国民新聞社、1924 年）PP.5-6

と恐怖心から生まれ出たものだろう。下位がどれだけ「ファッショの真相」を語っても、世間はファシズムと国家社会主義を同一視し、また下位が 1925 年に旗揚げしたファシズム政党「興国青年党」の勢力はほとんど振るわず、わずか二年足らずで自然解党しており、二万人超の人員を集めた日本国家社会党及び新日本国民同盟とは対照的であったこともまた、下位の嫉妬心を刺激したであろう。

## (2) 勃興するナチス・ドイツに対する日本人の視線

1930 年代において下位は、日本国内における様々な問題の解決策としてファシスト・イタリアの政策を紹介する論調を取ったが、1940 年から 1941 年にかけて出版された彼の著作は、そのほとんどがイタリア語によるイタリア政府のプロパガンダのような冊子を翻訳したものであり、ファシズムを積極的に提起するものではなかった。一方で先にも触れたが、1940 年代に雑誌などに寄稿された下位春吉のテキストを見ると、イタリアにおける日本文学の位置について下位自身がイタリアで経験したことを書いた「伊国に紹介されたる日本文学」（1940 年）や、イタリアの守護聖人についてまとめた「伊国宗教説話」（1942 年）、ダンヌンツィオとの思い出を語った「人間ダンヌンツィオ」（1943 年）など、ムッソリーニやファシズムに関する記述は希薄である。「伊国宗教説話」は、日伊学会（のち日伊協会）が発行する雑誌 *Studi di Cultura Italo-Giapponese* 上で三回（第 4、5、7 号）にわたって掲載されたテキストであり、「真にイタリアを知り、イタリアに親しむためには、その方面（引用者注：カトリック）の智識と理解とが必要である」<sup>52</sup>として、そのほとんどを守護聖人の説明に割き、ムッソリーニやファシズムに関する記述は冒頭で挨拶程度に述べられているに過ぎない。「人間ダンヌンツィオ」は、1943 年 3 月 1 日にガブリエーレ・ダンヌンツィオ没後五周年を記念して行われた日伊協会主催の講演会において、下位が行った講演をまとめたものであるが、その講演で下位はひたすら下位自身とダンヌンツィオとの交流の思い出を語るだけで、ムッソリーニやファシズムについてはまったく触れられていない。下位春吉は 1924 年以来ムッソリーニを称賛し、ファシズムを説いて回っていたのが、1940 年代に入ると下火になっていったのは、何故だろうか。

下位がムッソリーニやファシズムを取り上げることを控えるようになった理由のひとつは、1943 年にムッソリーニがイタリア王国首相を解任され、そして枢軸国の一翼を担った

<sup>52</sup> 下位春吉「伊国宗教説話（一）」（*Studi di Cultura Italo-Giapponese*、日伊協会、第 4 号、1942 年）P.113

イタリア王国も連合国に無条件降伏したことにあるだろう。例えば上述の「人間ダンヌンツィオ」が掲載された『日伊協会会報』が出版された日付は、1943年9月5日である。ムッソリーニがイタリア王国首相を解任されたのは同年7月25日であり、日本国内にそのことが伝えられたのは同年7月27日<sup>53</sup>。イタリア王国が連合国に無条件降伏したことが日本国内に伝えられたのは同年9月9日<sup>54</sup>であり、『日伊協会会報』が出版されたのはイタリア降伏よりも前であるが、ムッソリーニが解任されたことを受けて、編集作業中にムッソリーニやファシズムに関する記述を削除したと考えられる。

二つ目の理由として、下位の年齢を挙げる。1883年（明治16年）生まれの下位は、1940年時点で57歳であり、1935年度（昭和10年度）の男性平均寿命は46.92歳<sup>55</sup>であったことを考えると、老境に入ったと言っても差し支えない年齢であろう。また1937年3月6日付『東京朝日新聞 夕刊』に掲載された下位春吉へのインタビュー記事では、下位が好々爺然として孫を可愛がる一面が描かれている。<sup>56</sup>そして1938年3月には、下位曰く互いを「フラテルロ」（fratello 兄弟）と呼び合うほどの仲<sup>57</sup>であったダンヌンツィオが逝去した。ダンヌンツィオが亡くなったその翌月に発行された雑誌『改造』第20号第4巻（1938年4月）に、下位は「ダンヌンツィオの横顔」というタイトルで追悼文を寄稿している。テキスト中ではファシズムには全く触れず、ムッソリーニの名も1924年にダンヌンツィオがイタリア国王からモンテネヴォソ公爵 *Principe di Montenevoso* の称号を贈られた経緯の中でわずかに出ただけだ。また文体も感傷に浸ったような印象で、テキストは次のような文で結ばれている。

彼れの作品、彼れの軍功、彼れの生涯の数寄と転変との連鎖は、彼れの詩人としての純情を理解し、感得し得る人のみが首肯し得られるものである。

---

<sup>53</sup> 昭和18年（1943年）7月27日付『東京朝日新聞』1面。新聞の見出しでは、解任ではなく「辞任」とされている。「辞任」理由については、ムッソリーニは「最近健康勝れず第一線に立つことを困難ならしめたと見られてゐる」（昭和18年（1943年）7月28日付『東京朝日新聞』夕刊1面）と報じている。

<sup>54</sup> 昭和18年（1927年）9月10日付『東京朝日新聞』1面。イタリア王国が連合国と休戦協定を締結したことを発表したのは、1943年9月8日である。

<sup>55</sup> 「第19回 生命表（完全生命表）」（厚生労働省ホームページ「最近公表の統計資料」より、<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/life/19th/index.html>）

<sup>56</sup> 1937年3月6日付『東京朝日新聞 夕刊』3面。「……お孫さんの満春君（四才）が物凄いダッシュでこの祖父さんに飛付いて来る 眼に入れても痛くない程の下位氏の姿だ」という記述がある。

<sup>57</sup> 下位春吉「人間ダンヌンツィオ」（『日伊協会会報』第3号、日伊協会、1943年）P.43

そこに何等の矛盾もない。撞着もない。

たゞ一つの『詩人の純情』を以て一貫してゐる。<sup>58</sup>

ダンヌンツィオを理解できるのは自分だけだ、と下位が宣言しているような文であり、また「詩人の純情」を持ち続けたダンヌンツィオに対する憧憬の念を抱き続け、彼が亡くなったことによって寂寥を感じている下位の姿が見えてくる文でもある。

老境に入り、兄弟分であったダンヌンツィオが亡くなったことで、ムッソリーニやファシズムに対する情熱が失せてしまったと考えられる。一方で1937年（昭和12年）7月には盧溝橋事件に端を発して、日本と中華民国との間で全面戦争の火蓋が切られたのをみて、下位自身が従軍し、ダンヌンツィオと知り合うきっかけとなった第一次世界大戦を思い出し、下位はノスタルジーを感じたのではないだろうか。

そして三つ目の理由として、日本の人々の興味がイタリア・ファシズムからドイツ・ナチズムに移ったことを挙げる。下位春吉が日本に再帰国した1933年、アドルフ・ヒトラーは1月に政権を獲得したばかりであったのに対して、ムッソリーニは政権を掌握して十一年目を迎えていた。ヒトラーの名が日本の新聞紙上に登場するのは、1923年1月21日付『東京朝日新聞』夕刊の記事「独ファシスチ団起つ」中においてであり、記事中には「ババリヤファシスチ団首領アドルフ・ヒッター氏」として名前を挙げられる。<sup>59</sup>記事は、1923年1月に発生したルール占領（ドイツの賠償金支払い遅滞を理由に、フランス・ベルギー両軍がルール工業地帯を占領した事件）に対して、ドイツ国内の右派が当時のドイツ政府の対応を非難し、共和制打倒を叫んだという内容である。ヒトラー（記事中では「ヒッター氏」）は右派の一人として紹介されている。その後、1923年11月8日から9日にかけてドイツで発生したクーデター未遂事件（ミュンヘン一揆）で、ヒトラーは事件の中心人物として報道され、ドイツ右派の代表的人物として耳目を集めることになった。1932年には東京朝日新聞ベルリン特派員の黒田礼二<sup>60</sup>がヒトラーに対して単独インタビューを行い<sup>61</sup>、1933年1月30日にヒトラー内閣が成立したときには、『東京朝日新聞』は「惑星ヒトラー氏 遂に政権を掌握す」という見出しで伝え、ヒトラーについては「ド

<sup>58</sup> 下位春吉「ダンヌンツィオの横顔」（『改造』第20号第4巻、改造社、1938年）P.460

<sup>59</sup> 1923年1月21日付『東京朝日新聞 夕刊』1面

<sup>60</sup> 本名・岡上守道（1890~1943）。東京帝大法学部卒。1923年に朝日新聞に入社し、ベルリン特派員を務める。1943年、乗船が撃沈され死亡。

<sup>61</sup> 1932年1月3日付『東京朝日新聞』6面

イツ政界切つての大衆政治家で、その熱情的な言動はドイツ国民を魅了せずには置かぬものがある」と評した。<sup>62</sup>

ヒトラーに日本のマスメディアの耳目が集まっていたとはいえ、1933年時点で政権掌握十年を超えたムッソリーニにはその人気は劣っていたといえるだろう。1928年には日本国内でムッソリーニの伝記が三冊出版され<sup>63</sup>、同年に宝塚少女歌劇（現・宝塚歌劇団）の雪組公演で上演された「レヴュウ イタリヤーナ」にはムッソリーニが登場し、劇中ではファシスト党党歌「ジョヴィネツァ *Giovinazza*」が歌われた<sup>64</sup>。そして歌舞伎役者の二代目市川左團次（1880~1940）は同じ年（1928年）に、東京・明治座の五月公演で戯曲「ムッソリーニ」（小山内薫作）を上演している。<sup>65</sup>さらには1935年頃には大阪・澤井商店から「ムッソリーニペン」という商品名の万年筆が販売された。<sup>66</sup>伝記が三冊も出版され、歌舞伎役者がムッソリーニを演じ、ムッソリーニの名を冠する商品が登場していることから、日本国内ではヒトラーに比べればムッソリーニの知名度の方が上であり、またムッソリーニの名前が日本国内にあまねく広まっていたことがうかがえる。

その一方で、ヒトラーの名は、彼がドイツで政権を掌握して以来、日本国内でたびたび伝えられるようになったが、日本の新聞社の報道姿勢はヒトラーに対して好意的とはいえないものが多い。東京朝日新聞は1933年6月18日付夕刊で、「『国民革命』途上のドイツ」というタイトルで、約半年の間のヒトラー内閣についてのルポルタージュを掲載した。ルポルタージュを執筆したのは当時東京朝日新聞ベルリン特派員であった益田豊彦<sup>67</sup>（1900~1974）であり、彼はヒトラー政権を「一月末以来のドイツはたぎるようなヒト

---

<sup>62</sup> 1933年1月31日付『東京朝日新聞』2面

<sup>63</sup> 1月に澤田謙『ムッソリーニ伝』（大日本雄弁会講談社）が、2月には奥村毅『快傑ムッソリーニ』（榎本書院）、3月には薄田斬雲『我輩はムッソリーニである』（忠誠堂）が出版されている。

<sup>64</sup> 山崎充彦「“ファシスト”ムッソリーニは日本で如何に描かれたか—表現文化における政治的『英雄』像」（『龍谷大学国際センター研究年報』第15号、龍谷大学、2006年）

PP.207-210

<sup>65</sup> 山崎充彦上掲論文 PP.213-216

<sup>66</sup> 1935年1月6日付『東京朝日新聞』6面に、「ムッソリーニペン」の広告が出されている。

<sup>67</sup> 東京帝大法学部卒。1934年に朝日新聞に入社。1936年には、近衛文麿のブレーン集団である「昭和研究会」に参画する。戦後、朝日新聞大阪本社編集局長、同大阪本社代表取締役、同東京本社代表取締役などを歴任。



ラー熱と交錯したお祭騒ぎの絵巻物だ」<sup>68</sup>と表現した。益田はドイツが「お祭騒ぎ」になった理由として、まずナチス政権が成立した理由を次のように分析している。

百八十万の生命とすべての財力とをドイツから奪ひ去つた世界大戦、破壊的なインフレーション、非常識な賠償負担、慢性的な経済恐慌、殺人的な失業 矢継ぎ早に襲来したこれ等の災厄は、ドイツ国民の頭から推理力や判断力を、一口にいへば理智を、蒸発させてしまふに十分であつた。

(中略)

だから、十四年間野に叫びつづけたヒトラーの声が、栄養不良から弱<sup>原</sup>聴<sup>文</sup>に陥<sup>マ</sup>つて彼等の耳に天来の福音のやうに聞え、さい相の印綬を帯びたヒトラーの姿が彼等の弱視に救世主として映じたのも、あながち無理ではない<sup>69</sup>

そして益田は、第一次世界大戦の敗戦により「頭から推理力や判断力を、一口にいへば理智を、蒸発させてしま」ったドイツ国民に「お祭騒ぎ」を与えたのが、当時ドイツ国民啓蒙・宣伝相の職責にあったヨーゼフ・ゲッベルス（1897~1945）であると述べる。益田はゲッベルスを「ナチス党内きてのそう明な頭脳の持主でありおそらく同党第一等の戦術家」と評価。そのゲッベルスが、「理智欠乏症に陥つたドイツ国民に対して矢継ぎ早に国粹主義のお祭騒ぎの処方せんを与へ」たと指摘した。<sup>70</sup>その興奮を背景に、ヒトラー率いるナチスはドイツ国内では共産党をはじめとする左派政党を弾圧し、国外では強硬的な外交政策を進め、そして独裁政権確立のための諸政策を馬車馬式に断行していると指摘。彼は、ヒトラー政権の経済政策について次のように酷評している。

政府は最近しきりに失業の減衰を吹聴してゐる、しかし五六月の交に失業が減衰するのは毎年の季節的現象で異とするにあたらぬ、官許統計による最近の失業者数は五百二十五万だがナチス要人等のひそかに推定するところでは二千二百万を下るまいといふ、ドイツ全人口の三分の一が衣食に窮するとなれば、政府も安閑と空うそぶくにはゆかぬ、そこで農業団体、工業団体などを政府の統制下に引入れる一方、国有

<sup>68</sup> 1933年6月18日付『東京朝日新聞 夕刊』4面

<sup>69</sup> 同上

<sup>70</sup> 同上

鉄道に指令して労働者の新規雇入もやらせてみた、しかし焼石に水だ、家畜、肉類、脂ぼう類の輸入関税引上げもやつてみた、農業用土地財産の強制執行猶予令もだしてみた、マルガリンその他の脂ぼう類の生産統制も工夫してみた、しかし負債に悩む農業企業家にいくらか息をつかせただけで、赤貧のドン底にある農業労働者がすくはれぬのみか、農産物価格の騰貴を来して却つて一般下層消費者を苦しめる結果に落ちた<sup>71</sup>

続いて益田は、1933年5月1日にベルリン・テンペルホーフ空港で行われたメーデー式典（新聞中では「国粋主義労働祭」）において発表されたヒトラーの経済政策について、「それは抽象案であつて具体案ではなかつた、四年計画（筆者注＝ヒトラーが政権獲得時に公約として挙げた経済政策）の無計画性が暴露された、などと陰口をたたくものがあるのは、あながち無理ではない」と揶揄した。

1933年10月20日付『東京朝日新聞夕刊』1面には「凶に乗るナチス 日本人を侮辱し出す」という見出しが躍った。記事では、最近ドイツで公布された土地相続に関する法律で有色人種がドイツ国内で土地を所有する権利を奪われ、さらにはドイツ人と有色人種との結婚を規制する法律が検討されていることを伝え、このことは日本人に対するはなはだしい侮辱だとして非難。またドイツ在留邦人の子供が現地の児童らに差別的な言葉を浴びせかけられた上に顔面を負傷させられた事件があつたと報じ、そして記事は「日本人間ではドイツ政府の猛省を促し陳謝せしむべしと憤慨して居り、日本大使館においても両国の親交上遺憾なる事態なりとして適当な処置をとるはずである。」<sup>72</sup>と締めくくられている。この新聞記事はナチス政権に対する不快感を表し、そのナチス政権に対して日本政府が人種差別是正のために何らかの働きかけすることを記事の筆者が期待していることが窺える。

また『読売新聞』には、1934年1月17日、18日、20日、21日の四度にわたって「ナチスと日本人」というコラムが掲載された。コラムの筆者である勝本清一郎（1899～1967）は、第一回ではかつては日本人に対するドイツ人の態度は「ドイツ人ッてもものは所謂北方ゲルマンの特性として、非常に取ッ付きの悪い所があるんです。（中略）そして一旦取ッついてしまひさへすれば、あとは誠実に親しくしてくれる」<sup>73</sup>ものであつたが、ヒトラー

<sup>71</sup> 1933年6月18日付『東京朝日新聞 夕刊』5面

<sup>72</sup> 1933年10月20日付『東京朝日新聞 夕刊』1面

<sup>73</sup> 勝本清一郎「ナチスと日本人（一）」（1934年1月17日付『読売新聞』4面）

が政権を取ってからは「すっかり変わってしまった。」<sup>74</sup>という。変化の例として、公営プールへの有色人種の入場が禁止されたり、日本人を母に持つ研究者が国立研究所から追われたり、また日本人男性がドイツ人女性と話しているだけで警察に難詰されるようになったことなどを勝本は述べる。<sup>75</sup>勝本は、日本人に対するドイツ人の態度の変貌の背景にはヒトラーの人種哲学があるのは明白であると言う。連載第三回では、ナチスによるユダヤ人迫害にも触れ、またドイツ国内に居住する日本人にもその被害が及びつつあると語った。そして最終回で、連載コラムを次のように締めくくっている。

一方僕は日本人に対しては、ナチス運動の本質をもっとよくきはめて貰ひたいと思ふ。僕は日本人であるが故にナチスに反対でありナチスに反対であるがゆゑに、日本で日本人がナチスの真似事みたいなことをするのに反対なのである。特にカギ十字の旗なんかは止めて貰ひたいものに思ふ。仮にあの旗を日本民族中心の民族主義を現すものとしても、それではその旗のほかの東洋民族が付いて来ないであらう。何しろ異民族排斥なのだから。尚ほも問題が解決するまで、ヒトラー著「我が闘争」の三一八頁と云ふ数字を、日本人全体でよく覚えて置くことも好いことだらうと思ふ。<sup>76</sup>

勝本はナチスの人種差別的な考えに危機感をあらわにし、ナチスに迎合するような日本国内の風潮に釘を刺した。戦前における五大紙でも有力な読売新聞にヒトラーとナチスに対して警鐘を鳴らすような連載コラムが掲載されたことは、当時のナチス・ドイツに対する世間の評価の一端がうかがい知れる。

1931年（昭和6年）に発生した満州事変は、1933年（昭和8年）に結ばれた塘沽協定によって日本と中華民国との間の軍事衝突は一応の収まりを見せた。しかし、なお火種はくすぶっている状態であった。その中で、ドイツは中華民国に接近する。1933年（昭和8年）5月には元ドイツ共和国陸軍総司令官であるハンス・フォン・ゼークト（Johannes Friedrich Leopold von Seeckt、1866~1936）が中華民国の軍事顧問として招かれ、1934年（昭和9年）8月にはドイツの工業品および工業プラントを中国の農産物および鉱産物とバーターで交易する仮契約が中華民国財政部長孔祥熙（1880~1967）と対華武器貿易の

<sup>74</sup> 勝本清一郎「ナチスと日本人（二）」（1934年1月18日付『読売新聞』4面）

<sup>75</sup> 勝本清一郎「ナチスと日本人（三）」（1934年1月20日付『読売新聞』4面）

<sup>76</sup> 勝本清一郎「ナチスと日本人（四）」（1934年1月21日付『読売新聞』4面）

ためにドイツが設立したHAPRO (Handelsgesellschaft für industrielle Produkte, 工業製品営利会社) 代表ハンス・クラインとの間で交わされた。<sup>77</sup>ドイツと中華民国の接近は日本国内の新聞でも報じられており<sup>78</sup>、上述したナチスによる人種差別的な考えも含めて、日本の世論がナチスに対して冷ややかな目を向けていたことがわかるだろう。岩村正史著「昭和戦前期日本人のヒトラー像」によれば、1933年(昭和8年)から1934年(昭和9年)頃までの日本におけるナチス・ドイツ関連の論文の特徴は、ナチスに批判的なものが多く、またナチスの残虐性を強調しているものも多く、当時の日本の論壇の主流はナチス批判が優勢であった述べている。<sup>79</sup>

上に見るように、ナチス・ドイツに対して非好意的であった日本の視線は、徐々に好意的なものへと変わり、ついには日独提携を求めるようになる。ナチス・ドイツに対する日本の視線が変化したきっかけは、ドイツの国際連盟脱退にあったのではないかと考えられる。1933年(昭和8年)10月14日、ドイツが国際連盟脱退を発表すると、翌15日には日本の新聞で大々的に報じられた。『東京朝日』、『読売』のいずれも2面(当時は二紙とも1面全部を広告欄にしていたので、事実上の1面)で報道。『東京朝日』は「重大なる侮辱! 敢て脱退を宣す」という見出しを打ち出し、社説では「ドイツの現状に対する欲求と願望とを無視するに至ったことが、ドイツをして脱退の一途に走らざるを得ざらしめたもので、連盟の非現実的な挙そが、連盟本来の使命とする平和そのものと遠く相背馳する結果をもたらしたのある。」<sup>80</sup>と論じ、ドイツが連盟を脱退した原因は連盟そのものにあるという態度を取った。『読売』も『「現状神聖化」と『発展自由』の衝突 ドイツの連盟脱退は一つの必然』というタイトルの解説記事を載せた。記事では、ドイツはヴェルサイユ条約に反発しながらも、旧連合国に対する復讐心を放棄して、英仏との協調・平和外交に努めてきたが、ドイツが求めたザール地方や旧ドイツ植民地の返還、賠償の緩和といった問題に英仏が応じなかったため、ドイツは連盟を脱退した、と説き、ドイツの連盟脱退は日本と同

<sup>77</sup> 田嶋信雄「ナチス・ドイツと中国国民政府 1933-1936年(2)」(『成城法学』第80号、成城大学法学会、2011年) PP.5-6

<sup>78</sup> 1934年3月8日付『東京朝日新聞』において、中華民国がゼークトを軍事顧問として招聘したことが掲載されている。その他、ドイツから戦車を購入すること(1934年4月18日付『東京朝日新聞』2面)やドイツが中国国内の鉄道を整備する契約(1934年8月27日付『東京朝日新聞 夕刊』1面)も報じられている。

<sup>79</sup> 岩村正史「昭和戦前期日本人のヒトラー像」(『法政論叢』36(2)、日本法政学会、2000年) PP.210-211

<sup>80</sup> 1933年10月15日付『東京朝日新聞』2面

様に「必然」であったと述べている。<sup>81</sup>国際連盟を脱退した国同士、追いつめられた国同士として親近感が沸いたのであろう。

1935年（昭和10年）1月27日付『東京朝日新聞 夕刊』1面には、東京朝日新聞ベルリン特派員によるヒトラーへの単独インタビューの様子が掲載された。インタビューを行ったのは、1932年（昭和7年）のときと同じく黒田礼二である。黒田はヒトラーについて「今日の彼の態度は如何にも鷹揚で明かに一国の円満なる元首たる貫禄を備へて来た」と描き、ヒトラーの印象として「ヒトラー氏の地位がその言動から察して如何に安定してゐるか」「外交儀礼的の言葉を用ひないで直裁簡明に何事も、テキパキといつて退けるのは却て気持ちがいといふ感じであつた」と述べている。<sup>82</sup>黒田がヒトラーに好感を抱いたことがうかがえる。その好感を引きずったのか、1935年3月16日にヒトラー政権がヴェルサイユ条約の軍事制限条項の破棄を宣言したとき、朝日新聞は「屈辱条約の打開国民の輿望を實現」という見出しで報じた。<sup>83</sup>そして1935年（昭和10年）5月14日付『東京朝日新聞』2面に掲載された特集記事「欧州はどう動く」において、記事の筆者である黒田礼二は日独提携を説く。

連盟を脱退して以来日本はこの意味の地位を欧州の政界から失つて了つてゐる訳だ。換言すれば旧『連合国』の一員としての平和工作の参加を断念してゐる訳だ。然し乍ら欧州においてドイツの地位が確固を加ふるに比例して、東洋の脅威たるロシヤと旧連合国の盟主フランスとの提携は益々その緊密の度を加へるであらう。その際日本が日独提携といふ一種の切り札を西洋で持つてゐる事は寧ろ国際平和へのバランスとして推奨さるべき行き方でなければならぬ。<sup>84</sup>

1936年（昭和11年）になると、2月にはガルミッシュ＝パルテンキルヒェン冬季オリンピック（ガルミッシュ＝パルテンキルヒェンはドイツ南部・バイエルン州に属する街）、8月にはベルリンオリンピックが開かれ、日本の視線はますますドイツに向けられるようになった。また同年2月28日付『東京朝日夕刊』は、日本とドイツが中国大陸における

<sup>81</sup> 1933年10月15日付『読売新聞』2面

<sup>82</sup> 1935年1月27日付『東京朝日新聞 夕刊』1面

<sup>83</sup> 1935年3月18日付『東京朝日新聞』2面

<sup>84</sup> 黒田礼二「欧州はどう動く(5)」(1935年5月14日付『東京朝日新聞』2面)

経済提携にむけてアムステルダムで日独代表団が交渉を進めている旨を報じる。<sup>85</sup>同年 9 月 20 日付『東京朝日』には、東京駐箚ドイツ大使フォン・ディルクセン (Herbert von Dirksen, 1882~1955) の帰任を機に反共産主義のための日独提携が具体化するという情報が流れていることが報じられた。<sup>86</sup>その一方で、ドイツ国防軍内ではドイツ-中華民国提携論に勢いがあり、同年 4 月 8 日にはドイツと中華民国は HAPRO 条約を締結している。先述した中華民国財政部長孔祥熙と HAPRO 代表ハンス・クラインの間で交わされたパートナー貿易協定を、中国政府とドイツ政府による政府間協定に変え、さらにドイツ政府が中華民国に 1 億ライヒス・マルクの商品信用借款を提供するという内容だ。<sup>87</sup>この動きにドイツ駐箚日本大使館はドイツ政府に抗議し、またドイツ外務省も日独関係の観点から HAPRO 条約に苦慮し、さらにはヒトラーが HAPRO 条約を主導したドイツ国防軍の突出に不快感をあらわにしたため、ドイツ政府内において日独提携が優勢になった。<sup>88</sup>

そして 1936 年 (昭和 11 年) 11 月 25 日、ドイツ駐箚日本大使 武者小路公共 (1882~1962) とドイツ側代表ヨアヒム・フォン・リッベントロップ (Ulrich Friedrich Wilhelm Joachim von Ribbentrop, 1893~1946) との間で日独防共協定が調印。防共協定締結のニュースは、日本国内において『東京朝日』、『読売』共に即座に号外をもって報じた。翌 11 月 26 日付の朝刊でも、『東京朝日』、『読売』共に 2 面で日独防共協定成立を伝えている。もっとも『読売』は 26 日付の社説で防共協定の効果に疑問を呈し、また日独提携で日本もナチスのような体制になるのではないかという懸念をあらわにし、最後に「政府はこれ等につき外交上は勿論内政上にも相当の措置を執るのであらうが、吾人は無用な誤解を避けんがため特に十分な努力を加へんと切望する。」<sup>89</sup>と書き、防共協定に対する慎重な態度を見せた。一方の『東京朝日』は、26 日付朝刊の社説で

即ち日独協定の外交的意義はその規定する防共協定それ自体の活用如何の問題よりも、帝国政府が示した大なる外交的動作として、その国際政局に投じた波紋が、将来如何なる結果をもたらすかの問題に存するのである。(中略) およそ共産主義の宣

<sup>85</sup> 1936 年 2 月 28 日付『東京朝日新聞 夕刊』1 面

<sup>86</sup> 1936 年 9 月 20 日付『東京朝日新聞』3 面

<sup>87</sup> 田嶋信雄「ナチス・ドイツと中国国民政府 1933-1936 年(3)」(『成城法学』第 81 号、成城大学法学会、2012) PP.58-59

<sup>88</sup> 同上 PP.67-75

<sup>89</sup> 1936 年 11 月 26 日付『読売新聞』3 面

伝防止に利害を共にする国家は、悉く協定の精神を諒解すべく、そこに何等の疑念を挿む余地なき拘らず、各国言論界が強ひて協定の成立を重要視せんと欲するところに、その政治的意義を発見せねばならないのである。<sup>90</sup>

と伝え、防共協定成立により、日本とドイツが唱える反共主義が各国に広まり、日本とドイツの立場を各国が了解することを期待している。

『読売新聞』のように日独提携に対して疑問の声が上がったものの、1936年に日独防共協定は成立し、4年後の1940年（昭和15年）には日独伊三国同盟という軍事同盟に発展し、日本のドイツへの傾斜はますます強くなっていった。この風潮を前に、下位春吉も日独提携を論じるようになる。

### (3) 埋没する下位春吉

下位はすでに日独防共協定の一年前である1935年（昭和10年）12月に、国際事情研究会から『老獺大英帝国を倒せ』というパンフレットを出しており、そのパンフレットの副題は「日独伊の提携によりて世界領土の再分割実現を貫徹せよ」となっていた。『老獺大英帝国を倒せ』の著者は「佐々鴻吉」となっているが、1940年（昭和15年）出版の下位春吉述『イタリヤ参戦を回る世界政局の動向』（日本協会出版部）において、「私は今度帰つて来て、「老獺大英帝国を倒せ」といふパンフレットを出したのが昭和十年です。」<sup>91</sup>と述べており、また『老獺大英帝国を倒せ』の第七章「伊エ紛争の真相と誤れる日本の国論」は、下位が1935年（昭和10年）11月に出版した『日本人の誤りたる伊エ紛争観』（東京パンフレット社）と内容が似通っている。そのことことから、佐々鴻吉著『老獺大英帝国を倒せ』は下位の著作とみて間違いないだろう。

その『老獺——』は、冒頭で英国を童話「赤ずきん」の狼に例えるなど、紙数のほとんどを英国に対する批判に充て、終盤で、「持たざる国」である日本が大陸に、ドイツが東欧に、イタリアがエチオピアに進出することは「伸びんとする者の本能的意欲」<sup>92</sup>と述べ、植民地の再分割を論じる。ところで、この論の副題には「日独伊の提携」と書かれてはいないが、この『老獺——』本文中では日独伊提携について具体的な言及はなされていない。

<sup>90</sup> 1936年11月26日付『東京朝日新聞』

<sup>91</sup> 下位春吉『イタリヤ参戦を回る世界政局の動向』（日本協会出版部、1940年）P.5

<sup>92</sup> 佐々鴻吉『老獺大英帝国を倒せ』（国際事情研究会、1935年）P.35

おそらく、盛り上がりつつある日独提携論を見て、本来の趣旨から外れているが読者の関心を買うために「日独伊の提携」としたのだろう。むしろ下位の期待するところは日本とドイツではなく、日本とイタリアとの提携にあったと考えられ、その証左として『老獺——』本文中に次のような記述がある。

われ等のはかつての満州事変を想起しよう。四十二対一の決議をもつて、日本が孤立に陥った時、シャムの同情が如何に日本を感激させたか。今や『持たざる国』の一友人伊太利は、四面楚歌の中にある。真の俠気は、伊太利にこそ注ぐべきではないか。しかも伊太利がわれ等の宿怨たる『ジョン・ブル』を向ふに廻はして奮闘するのを見せられてゐる時、われ等は積極的に救援の手を伸べて、悲境に立つ伊太利を盛り立てねばならぬ。<sup>93</sup>

1935年10月、イタリアはエチオピアに侵攻しており（第二次エチオピア戦争）、日本の世論は有色人種国家エチオピアに侵攻した白人国家イタリアに批判的であり、頭山滿や国会議員などがイタリアの侵略を非難している。<sup>94</sup>下位は自身の著『日本人の誤りたる伊エ紛争観』と同様に、別名で出版した『老獺——』においてもイタリア擁護の論陣を張る一方で、日本の提携先としてイタリアを推したのだ。長年、日本国内でイタリア・ファシズムのあり方や歴史を伝え、ムッソリーニを称えて来た下位としては、安易に下位自身のスタンスをドイツに乗り換えることは二の足を踏ませるものがあったのではないだろうか。しかし1939年（昭和14年）9月にドイツ軍がポーランドに侵攻することによって第二次世界大戦が勃発し、翌1940年（昭和15年）6月にドイツがフランスを攻め落とすと、下位も態度を変えざるを得なくなる。

1940年（昭和15年）7月に出版された下位春吉述『イタリア参戦を回る世界政局の動向』（1940年6月に行われた講演会を書き起こしたもの）では、第二次世界大戦序盤戦におけるイタリアの役割を評価する一方、ドイツの電撃戦を称え、ヒトラーを「ヒットラーはなかなかえらい。ヒットラーは陸軍大学を出てゐませんよ。伍長上りのヒットラーはヒ

<sup>93</sup> 佐々鴻吉『老獺大英帝国を倒せ』（国際事情研究会、1935年）P.45

<sup>94</sup> 岡俊孝「伊・エチオピア紛争（一九三五年）と日伊関係の展開」（『法と政治』40(4)、関西学院大学、1989年）P.865



ンデンブルグよりよりもカイゼルよりもえらい。」<sup>95</sup>と誉めそやす。そして最後に下位は、1939年（昭和14年）時点で日独伊軍事同盟があれば、第一次世界大戦において日英同盟に基づいて青島を占領したように、フランス領インドシナを保障占領できたはずだと息巻き、「けれども今からでも遅くはない。世界建直しの事業に、日本も乗り出して、指図役になつて第一線に働くために、この際決心したがよいではありませんか。」とぶち上げ、日独伊提携によってアメリカ・イギリスと対決するべきだと語った。<sup>96</sup>

日独伊軍事同盟締結については、紆余曲折を辿った。日本政府内では1938年（昭和13年）頃に日独防共協定を軍事同盟へ強化するべきだという意見が出たが、当時の外相有田八郎と海軍首脳部は同盟強化に否定的であり、そうした中で1939年（昭和14年）8月に独ソ不可侵条約が締結されると、時の首相平沼騏一郎が「欧州情勢は複雑怪奇」という談話を残して辞任したため、日独伊軍事同盟論は立ち消えになってしまっていた。ところが1939年9月に欧州で第二次世界大戦がはじまり、ドイツ軍が瞬く間に欧州を席卷すると、「バスに乗り遅れるな」という機運に乗って、同盟強化の声が再び高まることになった。下位春吉が日独提携に触れるようになったのは、日本国内における日独提携論の高まりもさることながら、当時イタリアもドイツとの協調関係を推し進め、1939年5月にはイタリアとドイツが軍事及び経済分野での協力を目的とした鋼鉄協約を結んだことから、下位はイタリアも乗ったバスに日本も乗るべきだと考えたためだろう。

1940年（昭和15年）9月27日、日独伊三国同盟が締結されると、下位春吉は9月29日付『東京朝日』に「イタリアの友へ 詩人エンコに与ふ」というエッセイを寄稿した。エンコは、下位が1914年から24年までイタリア滞在していた間、1920年から21年まで下位が編集長として出版していた雑誌 *Sakura* に参加していた現地の詩人 *Elpidio Jenco* のことである。下位はエンコに宛てた手紙という体裁で、日独伊三国同盟締結の下位自身の感想を述べている。文中では、かつてナポリにおいてエンコたちと苦労を重ねながら *Sakura* を出版していた思い出をつづりながら、その頃から下位自身は日伊提携を目指していたことを書き、そして次のように結んでいる。

<sup>95</sup> 下位春吉述『イタリア参戦を回る世界政局の動向』（日本協会出版部、1940年）P.32

<sup>96</sup> 同上 PP.40-45

エンコ君、君は当時の「サクラの参謀本部」の部員と共に今日の僕の喜びを理解してくれると思ふ、僕等が描いてみた理想がこゝに現実となつて世界に大きな衝撃を与へた。

しかしけふの提携は政治的、または軍事的の打合せとして皆喜んでゐるやうだが、僕等は今少し深い基礎が必要だと思ふ、もしその基礎が現在強固でないとしたら国民はそれを強化する必要がある。外交官の手を離れてこれからは僕等の仕事だ、自重してくれ給へ、前途は遼遠である。<sup>97</sup>

下位はこの文章の中で、下位自身が長年説き続けていた日伊提携が成立したことを喜び、この提携を単なる条約で終わらせることなく、政治、経済、文化あらゆる方面で提携を促進すべきで、そのためにも「基礎」を強化するべきだと下位は訴える。ここで書かれている「基礎」とは、それぞれの国民の間における文化交流を示しているのであろう。エッセイの大部分を占める雑誌 *Sakura* の出版に関するエピソードと、「もしその基礎が現在強固でないとしたら国民はそれを強化する必要がある。外交官の手を離れてこれからは僕等の仕事だ」という一文から、「僕等の仕事」とは国民間の深い文化交流を示していることがわかる。そして文化交流こそが、「基礎」を深化する方法だと下位は言うのだった。

下位春吉が日本国内においてムッソリーニやファシズムについて語り始めたのは、おそらく 1924 年（大正 13 年）からであった。それから約十年（途中五年間はイタリアに滞在）にわたって、下位は日本国内でムッソリーニやファシズムについて大いに語り、日伊提携を訴え続けていた。しかし高島素之から「職業的紹介者」と揶揄されたように、下位の語るムッソリーニやファシズムは、日本人の嗜好や当時の日本が置かれた状況に合うように下位が修正したものであった。昭和に入ると、日本国内の貧富の差や農村の疲弊という課題を前にして、日本国内でムッソリーニの指導力やファシスト・イタリアの政策に耳目が集まるようになって、かねてからムッソリーニの指導力を礼賛し、ファシスト・イタリアの政策を喧伝し続けていた下位にも視線が集まるようになった。1930 年代前半は、下位に講演や執筆の依頼が舞い込み、下位がもっとも活躍した時期であろう。しかし、1930 年代後半になると、ヒトラー率いるナチス・ドイツの勃興を前にして、ムッソリーニの影が薄くなり、また下位の存在にも陰りが見えてくる。日本の世論が日独提携に傾く中、時代の流れに埋没しないように下位は日独伊提携を訴え、活動をし続けた。そして日独伊間で軍

---

<sup>97</sup> 1940 年 9 月 29 日付『東京朝日新聞』5 面

事同盟が結ばれると、下位は日伊両国の国民間における文化交流を提案するのにいたる。下位は、イタリアに赴く以前はダンテの『神曲』を研究し、童話口演に熱を入れ、イタリアに赴いてからは同地における日本文化紹介のために努力を傾けていた。日独伊三国同盟締結後、彼が文化交流を提案したということは、彼本来の姿に戻ったと評すべきだろうか。

先述したが、日独伊三国同盟締結後の 1940 年以降の下位春吉の出版物を見ると、そのほとんどはイタリア語によるイタリア政府のプロパガンダのような冊子を翻訳したものであり、ファシズムを積極的に提起するものではなく、雑誌などに寄稿された彼のテキストも、イタリアにおける日本文学の位置について述べたものや、イタリアの守護聖人についてまとめたもの、ダンヌンツィオとの思い出を語ったものであった。プロパガンダ冊子の翻訳は脇に置くとして、下位自身が執筆したテキストは上に述べたように、日本文学についてであり、イタリア文化についてであった。「イタリアの友へ 詩人エンコに与ふ」(1940 年 9 月 29 日付『東京朝日新聞』)の結びで彼自身が書いたように、将来の発展に向けて、文化に力を注ぐようになったのだろう。

下位の語ったイタリア・ファシズムは、先述したとおり日本人の嗜好や当時の日本が置かれた状況に合うように修正されたものであった。しかし、イタリアでファシズム政権が生まれた当初、その内情を知る日本人が少なかった中で、手が加えられたものとはいえ、ファシズム政権下の生活を実際に体験した下位の情報は貴重なものであった。そして、彼がファシスト・イタリアの農業政策や社会政策を伝えたことは、その当時として意義のあるものだった。

1943 年 7 月、ムッソリーニは失脚し、イタリア王国首相の座から追われる。しかし二ヶ月後の 1943 年 9 月 23 日、ムッソリーニはドイツ軍の支援を受けて、イタリア北部に「イタリア社会共和国RSI, Repubblica Sociale Italiana」を樹立し、その政権首班に就いた。RSIは事実上ドイツ軍の傀儡国家であったが、下位はムッソリーニの復活を喜び、1943 年(昭和 18 年)9 月 28 日付『読売新聞』のインタビューに嬉々として答えている。下位はインタビューで、ムッソリーニを不動明王にたとえ、イタリアを生まれ変わらせるためにも鉄腕の政治を断行し、ピエトロ・バドリオをはじめとした自由主義者・民主主義者を一掃して、理想のファシズム国家建設のために前進してほしいと、下位はムッソリー

ニにエールを送る。<sup>98</sup>下位は、ムッソリーニがドイツ軍の傀儡政権の首班に据えられても、ムッソリーニとファシズムを信じ続けたのだった。

---

<sup>98</sup> 1943年9月28日付『読売新聞』3面

まとめ

ベニート・ムッソリーニは 1943 年 7 月に首相を解任され、イタリア半島中部の山グラン・サッソ Gran sasso のホテルに幽閉された。そして同年 9 月に、ムッソリーニはヒトラーの命で動いたドイツ軍によって「救出」され、イタリア北部ガルダ湖畔の街サロ Salò で樹立した傀儡政権の首班に据えられる。ムッソリーニが持っていたかつての権威は、失墜していた。それでも下位春吉は、前章末でも引用したように、1943 年（昭和 18 年）9 月 28 日付『読売新聞』のインタビューにおいて、ムッソリーニの復活を祝い、ムッソリーニとイタリア・ファシズムの将来に声援を送っている。

当時のイタリアは、1943 年 8 月に連合軍によってシチリア島を落とされ、同年 9 月にはイタリア半島上陸を許す有様であり、同年 9 月 8 日にはムッソリーニの後をついで首相に就任したピエトロ・バドリオ (Pietro Badoglio, 1871~1956) はとうとう連合軍と休戦協定を交わして、降伏の道を選んだ。その一方で、ドイツ軍の後押しを受けたムッソリーニは、9 月 23 日にイタリア北部の街サロにおいてイタリア社会共和国 RSI, Repubblica Sociale Italiana を樹立し、連合軍との徹底抗戦の道を選ぶ。ムッソリーニとドイツ軍の動きに対して、イタリア王国 (バドリオ政権) は共同参戦国として連合軍と共同してドイツ軍及び RSI と戦うこととなった。イタリア半島は、ドイツ軍及び RSI 軍と、連合軍及びイタリア王国軍、そしてドイツとファシストからの祖国解放を掲げるパルチザンなど、さまざまな勢力が入り乱れる戦いが繰り広げられ、イタリア半島は事実上内戦に突入。下位がいかにエールを送ろうとも、ムッソリーニとイタリア・ファシズムの未来は暗かった。

ムッソリーニとイタリア・ファシズムに陰りが見えてくる中、それでも下位春吉がムッソリーニとファシズムを信じ続けていたのは、何故だろう。演劇評論家の田之倉稔 (1938~) は、著書『ファシストを演じた人びと』で、下位がイタリア・ファシズムを信じ続けた理由を次のように分析している。

下位もダンヌンツィオに魅せられ、心酔したひとりだった。しかし詩人の遊戯性、あるいは遊戯性への無邪気な共感からやがてファシズム・イデオロギーへの承認という、引き返しの難しい地点へと彼は踏みこんでしまうのである。訪伊の目的であったダンテ研究は、いつしかムッソリーニを日本に紹介することとかわってしまった。外国の同時代文化へコミットするときの陥穽がここにある。外部のものには、研究対象

の国における、同時代精神の対立抗争の地勢が読めないからである。同化の試みに目をくらまされる。(中略) ここには古典研究を目的としたイタリア滞在が、フィウメ占領体験と重なって、ひとりの日本のファシストが生み出される過程を発見することができる。外国の同時代文化・政治を支えている中心的精神に対して、その紹介者が自己同一化をはかり、自分の思想を投影するサンプルが下位春吉であった。<sup>1</sup>

田之倉の分析では、下位は友人であり、兄弟分でもあったガブリエーレ・ダンヌンツィオに魅せられ、ダンヌンツィオの遊戯性に対する無邪気な共感から、同時代はおろか後の時代でも論争的となるイタリア・ファシズムを認めるという「陥穽」にはまってしまった、と見る。そして、イタリア・ファシズムを紹介するうちに、その精神と同一化し、自身の思想をファシズムに投影したのが下位春吉である、と田之倉は論じた。

ダンヌンツィオは当時大人気の作家であり、人気作家と交流を持てたことは、文学者であった下位をしてダンヌンツィオに魅了されることは無理からぬことであつたであろう。そのダンヌンツィオのアイデアである手をまっすぐに伸ばす敬礼(ローマ式敬礼)<sup>2</sup>や、ダンヌンツィオがフィウメ占領中に公布したカルナーロ憲章Carta del Carnaroで採用された政策の一部を受け継いだ<sup>3</sup>ムッソリーニ政権やイタリア・ファシズムに共感を覚えるのもまた、仕方がなかつただろう。

その一方で、イタリア近現代史研究者である藤岡寛己(1956~)は、田之倉の分析に批判的だ。下位の実父は秋月の乱(1876年、明治9年)に関与し、幼少の頃は父母兄弟全員が炭鉱労働者として働かなければならないほど困窮していた過去を持つ下位という存在を考えると、ダンヌンツィオに対する下位の「無邪気な共感」や、下位がムッソリーニやイタリア・ファシズムに安易にはまった「陥穽」という表現は、「あまりにもモダニズム的ではないか」と批判する。<sup>4</sup>藤岡は、下位がイタリア・ファシズムを信奉した理由を次の

<sup>1</sup> 田之倉稔『ファシストを演じた人びと』(青土社、1990年) PP.121-122

<sup>2</sup> ニコラス・ファレル著 柴野均訳『ムッソリーニ 上』(白水社、2011年) P.167

<sup>3</sup> カルナーロ憲章では、国家の基本構成要素のひとつを生産者による協同体と定め、協同体を国家と生産者を結ぶ橋梁として、重視した。(藤岡寛己「フィウーメ占領期にみる革命的サンディカリズム——A・デアンプリスとカルナーロ憲章」(『駿台史学』第113巻、明治大学史学地理学会、2001年) PP.39-40)。ムッソリーニ政権も、労働者と雇用主による協同体を国家の一部として重視し、国会議員を協同体から選ぶ方式を採用した。(ニコラス・ファレル前掲書 P.346)

<sup>4</sup> 藤岡寛己「下位春吉とイタリア＝ファシズム——ダンヌンツィオ、ムッソリーニ、日本——」(『福岡国際大学紀要』25号、福岡国際大学、2011年) P.61

ように推察する。

……大杉栄や荒畑寒村とほぼ同世代だが、英語とイタリア語の習得に励み、早くして婿養子に入った下位にはマルクス主義に目覚める余裕も機会もなかったであろうし、ましてや至誠報国と天皇鳳下<sup>原 文 ママ</sup>に一命を捧げた秋月憂国の士<sup>原 文 ママ</sup>の精神を父親から多少とも継いでいたのであれば、時流に迎合するような立身出世主義も肯定できず、共和主義と国家の廃絶を唱道する社会主義や無政府主義にいたってはむしろ敵対物であった。したがって、社会の変革をこころざした多くの日本の青年たちと同様、下位も自然、自己のルサンチマンを国家主義<sup>ナショナリズム</sup>に転化させたのではないだろうか。<sup>5</sup>

下位は 24 歳のときに婿養子になったため、マルクス主義を信じる訳にもいかず、国家のためにあえて反乱者となった実父を考えると時流に迎合するような立身出世や、ましてや皇室を否定する共和主義や無政府主義に傾倒することはもつての外であり、立身出世やマルクス主義とは違う道を求め、そして幼い頃の貧困から来るルサンチマンとあいまって、国家主義に傾倒するようになった、と藤岡は考えた。

しかし、「英語とイタリア語の習得に励み、早くして婿養子に入った下位にはマルクス主義に目覚める余裕も機会もなかったであろう」と藤岡は分析するが、婿養子に入った後も下位は養父の事業を継がず、教師になり、口演童話に没頭するなど、家を気にかけない若者らしい奔放さを見せている。また、下位自身の研究のためにイタリア語を学び、さらには妻子を残して単身イタリアに渡るなど、家を興すという考えがあったかもしれないが、婿養子としてはいかながなものかと首をかしげたくなるような行いもしていた。実父の影響を受けて、至誠報国の精神を受け継いだ可能性は否定できないが、婿養子故にマルクス主義や無政府主義に傾くことができなかったという考えは、論者には受け入れがたい。

藤岡はその著書『原初的ファシズムの誕生』において、ムッソリーニを「稀代のカリスマ性とバランス感覚、絶妙の判断力、権力の在処への鋭い嗅覚をそなえ」<sup>6</sup>ていると評するも、ムッソリーニには確たるイデオロギーもないと断じ、また、イタリア戦闘者ファッシも結成された当時（1919 年）には思想と呼びうるものはなく、初期のファッショ運動はイ

<sup>5</sup> 藤岡寛己「下位春吉とイタリア＝ファシズム——ダンヌンツィオ、ムッソリーニ、日本——」P.61

<sup>6</sup> 藤岡寛己『原初的ファシズムの誕生』（お茶の水書房、2007 年）P.168

デオロギー的には烏合の衆であったと論じる。藤岡が下位春吉について論じたのは、この考えの延長線上にあるものだろう。下位も確たるイデオロギーもなく、ダンヌンツィオとムッソリーニを単純に結び付け、ファシズムという思想に飛びついただけだ——と。

だが、藤岡の下位春吉に対する評価——すなわち、ダンヌンツィオ、ムッソリーニ、ファシズムを安易に結び付け、ファシズムに傾倒したという考えを、論者は否定することはできない。

福岡県の青年・井上春吉は、2016年現在では福岡県下有数の進学校となっている旧制福岡県立東筑中学校（現・福岡県立東筑高等学校）<sup>7</sup>の生徒であり、周囲から将来有望と言われていた。<sup>8</sup>井上春吉は、東京で材木商を営む下位嘉助の目に留まり、婿養子として下位家に迎え入れられて、下位春吉となったが、幼少時の貧困経験もあり、同世代の青少年と同様に社会変革を求めるようになったとしてもおかしくはない。そういった考えを根底に持ちながら、下位春吉はイタリアに渡り、人気作家であったガブリエーレ・ダンヌンツィオと交流を持ち、さらには下位自身と同年であるムッソリーニが実力で政権を勝ち取る姿を見たのだ。また下位は、ムッソリーニもまた貧しい家庭で育ったこと<sup>9</sup>を知って、彼に共感を覚えただろう。ムッソリーニはその政権下において、労使協調を推し進め、社会問題の解決のための政策を実施し、農業生産の改善や農村の近代化を促すなど、社会保障を充実させた。下位は下位自身と同年の男が国家を強力に指導し、貧困に立ち向かう姿勢を見せたことで、ムッソリーニに倣い、また彼に対して競争心を持ったのではないだろうか。ムッソリーニ率いるファシスト・イタリアと比べて、社会保障政策は不十分であり、旧態依然とした農業を続ける同時代の日本を見て、下位は日本の政治家に対して不満を覚えたのではないだろうか。そして現状の日本に対する下位の不満が、ムッソリーニに倣おうという気持ちを強くさせ、その気持ちはムッソリーニやイタリア・ファシズムを信奉する原動力となったであろう。

しかし、下位春吉がきちんとファシズムを理解していたとは言い難い。彼が語るムッソ

---

<sup>7</sup> 卒業生には、出光興産第2代社長の出光計介（1900~1994）や俳優の高倉健（1931~2014）がいる。

<sup>8</sup> Reto Hofman, *The Fascist Reflection Japan and Italy, 1919-1950* (Columbia University, 2010)P.25

<sup>9</sup> ベニート・ムッソリーニの父・アレッシンドロは、熱心な社会主義者であり、政治に熱中するあまり、鍛冶屋の仕事をおざなりにしていた。その結果、生活費のほとんどを母・ローザの小学校教師の少ない報酬に頼らざるを得ない状況であった。（ニコラス・ファレル前掲書 P.34）



リーニやイタリア・ファシズムは、日本人の嗜好や当時の日本が置かれた状況に合うように修正されたものであった。第四章でも述べたように、高島素之は下位を「職業的紹介者」と批判し<sup>10</sup>、「ブローカー」呼ばわりしている。<sup>11</sup>下位は日本とイタリアの間に立って、イタリア・ファシズムの良い点ばかりを強調して日本に売り込み、そしてその過程を通じて下位自身の知名度を上げていったのだ。また第三章で述べたように、会津若松市の白虎隊記念碑を巡る騒動を引き起こし、さらにはイタリア政府のプロパガンダのような冊子の日本語訳を引き受けるなど、下位は功名心を満たすためなら何でもするという印象を持ってしまう。高島が下位を「ブローカー」だと誇ったことも、やむを得ないだろう。

それでは、高島素之が指摘する通り、下位はイタリア・ファシズムという思想を売り込む「職業的紹介者」なのだろうか。高島は、下位がイタリア・ファシズムの利点ばかりを紹介しているさまを見て、下位に思想性がないことを見て取り、批判したのだろう。論者も、下位には思想性がなく、ただイタリア・ファシズムを紹介していただけであったという点は否定しない。しかし下位は、ファシズムを思想ではなく、国家主義に立ち、国民精神を統一するための精神的な運動であり、実行的運動であると見ていた。<sup>12</sup>高島もファシズムに思想体系はなく、極端な実行主義で成り立っているとみていたが、高島はファシズムの思想体系に重きを置き、一方の下位は実行主義をファシズムの柱と見ていたのだ。この二人のファシズムに対する焦点の違いを考えなければならない。そのため、下位がその著書や講演会などでファシズムを論じる際、ファシズムの定義については「国民の歴史並に伝統を基礎とし、現代に最も必要適切なる施設を施し、国民精神を統一し、以て樹立する実行的運動」<sup>13</sup>というにとどまり、ファシズムの説明のほとんどをムッソリーニやファシスト・イタリアが行った政策の紹介に費やしている。ファシズムは精神的、実行的運動であるのだから、ファシズムの定義について長々と説明するのではなく、その運動が実際に行ったことを紹介するべきだと下位は考えていたのだろう。

また下位は、ファシズムについて「国民の歴史、伝統、国体を根本とした精神運動であり、信念運動であって、単なる社会運動ではない。」<sup>14</sup>と述べ、さらには「国民精神を統一

---

<sup>10</sup> 高島素之『ムッソリーニとその思想』（実業之世界社、1928年）P.167

<sup>11</sup> 高島素之『ムッソリーニとその思想』（実業之世界社、1928年）P.186

<sup>12</sup> 下位春吉述『伊太利の組合制国家と農業政策』（ダイヤモンド社、1933年）PP.8-15

<sup>13</sup> 下位春吉述『伊太利の組合制国家と農業政策』P.8。下位春吉述『下位春吉氏熱血熱涙の大演説』P.91でも同様の定義を示している。

<sup>14</sup> 下位春吉述『下位春吉氏熱血熱涙の大演説』（大日本雄弁下位講談社、1933年）P.92

するのだから、国家としては挙国一致でなければならぬ。一年や二年で変る運動ではいかん。永遠に動かし得ないものでなければならぬ。」<sup>15</sup>とも語っている。ファシズムは国民精神を統一するための運動なのだから、風向きによってその運動の内容を変えてはならず、劣勢になったとしても挙国一致の下、国民精神統一のために曲げるべきではない、と下位は考えたのだろう。さらに下位は、ファシズムを「信念運動」と定義している。「信念運動」であることから、下位はファシズムを国内問題の解決や国民精神の統一のために必要なものであると受容したのかもしれない。そのために、イタリアが劣勢になっても下位はムッソリーニやイタリア・ファシズムを信じ続けていたと推察できる。

下位春吉はファシズムを思想として取り扱っていたのではなく、ファシズムを精神運動として、そして信念運動として取り扱った。そして下位はファシズムを信念運動と考えていたため、ファシズムは国家と国民のために適切な運動であり、日本国家と日本国民のためになると信じていたのだ。そして日本人にも受け入れられるように、偏ったムッソリーニ像やイタリア・ファシズムを触れ回ることとなる。しかし、イタリアでファシズム政権が生まれたばかりのころは、偏ったものとはいえ下位が語るムッソリーニやイタリア・ファシズムの情報は貴重なものであっただろう。そして、彼がファシスト・イタリアの農業政策や社会政策を伝えたことは、その当時として意義のあるものであった。特に社会政策について記した下位の著書『ファッショ政体に於ける労働政策』（春秋社、1932）は、現在においてもファシスト・イタリアの社会政策を知る上で有益な書といえるだろう。

しかし下位春吉は、第二次世界大戦後、表舞台から引き摺り下ろされる。第三章の終わりでも述べたように、枢軸陣営への支持扇動を行ったとして 1951 年まで公職追放の憂き目にあう。消息が新聞等で報じられることはなくなり、1954 年に死亡したときも夕刊の片隅にひっそりと訃報が載るだけであった。<sup>16</sup>死後、下位春吉を伝える人は少なくなったが、近年になってようやく彼の存在がクローズアップされるようになる。2012 年には、静岡文化芸術大学において「ファシズムと文学——下位春吉をめぐって」と題するシンポジウムが開かれ、下位のイタリア滞在時における軌跡や下位のためのイタリア・ファシズムなどが論じられた。

下位春吉についての研究は、いまだ途上にある。下位春吉が記したテキストは、ほとんどがムッソリーニやイタリア・ファシズムを礼賛するものであり、下位を知る手がかりに

---

<sup>15</sup> 下位述『伊太利の組合制国家と農業政策』P.13

<sup>16</sup> 1954 年 12 月 1 日付『朝日新聞 夕刊』3 面

なりえない。他の人が記した下位春吉に関する情報や記述は少なく、あまりにも断片的である。下位春吉を知るためには、新たな史料の発掘とさらなる研究が必要であろう。

## 参考文献一覧

### 第一章

- 北村暁夫・伊藤武編著『近代イタリアの歴史』（ミネルヴァ書房、2012年）
- シモーナ・コラリーツィ著 村上信一郎監訳『イタリア 20世紀』（名古屋大学出版会、2010年）
- 藤岡寛己『原初的ファシズムの誕生』（御茶の水書房、2007年）
- ニコラス・ファレル著 柴野均訳『ムッソリーニ 上』『ムッソリーニ 下』（白水社、2011年）
- ロマノ・ヴルピッタ『ムッソリーニ —イタリア人の物語』（中央公論新社、2000年）
- 藤岡寛己「フィウーメ占領期にみる革命的サンディカリズム——A・デアンプリスとカルナーロ憲章」（『駿台史学』第113巻、明治大学史学地理学会、2001年）
- 藤澤道郎「ダンヌンツィオとローマ進軍」（イタリア学会『イタリア学会誌』32号、1983年）

### 第二章

- 今井清一『日本近代史 II』（岩波書店、2007年）
- 井上馨侯伝記編纂会編『世外井上公伝 第5巻』（内外書籍、1934年）
- 竹村民郎『増補 大正文化 帝国のユートピア』（三元社、2010年）
- 福家崇洋『日本ファシズム論争』（河出書房新書、2012年）
- 松岡八郎「第二大隈内閣の施政(一)」（東洋大学法学会『東洋法学』24(2)、1981年）
- 松岡八郎「第二大隈内閣の施政(二)」（東洋大学法学会『東洋法学』25(2)、1982年）
- 望月和彦「大正デモクラシー期における政界再編」（桃山学院大学『桃山法学』(15)、2010年）
- 国立国会図書館蔵「望月小太郎関係文書 38 井上侯・大隈伯会見要領筆記」（1914年）
- 『東京朝日新聞』
- 『大阪朝日新聞』
- 『読売新聞』

### 第三章

- 下位春吉『フアツシヨ運動』（民友社、1925年）

- 下位春吉『伊太利の組合制国家と農業政策』（ダイヤモンド社、1933年）
- 下位春吉『下位春吉氏熱血熱涙の大演説』（大日本雄弁会講談社、1933年）
- 下位春吉『イタリヤの参戦を回る世界政局の動向』（日本協会、1940年）
- 下位春吉「滞伊十八年 ダヌンツィオとムツソリーニとを語る」（『現代』14(7)、大日本雄弁会講談社、1933年）
- 下位春吉「ダンヌンツィオの横顔」（『改造』20(4)、改造社、1938年）
- 下位春吉「伊国に紹介されたる日本文学」（斎藤昌三編『書祭』人巻、書物展望社、1940年）
- 下位春吉「人間ダンヌンツィオ」（『日伊協会会報』3号、日伊協会、1942年）
- 下位春吉「伊国宗教説話(1)」（『日伊学会』4号、日伊協会、1942年）
- 下位春吉「伊国宗教説話(2)」（『日伊学会』5号、日伊協会、1942年）
- 下位春吉「伊国宗教説話(3)」（『日伊学会』6号、日伊協会、1942年）
- 高島素之『ムツソリーニとその思想』（実業之世界社、1928年）
- 藤岡寛己「下位春吉とイタリア＝ファシズム——ダンヌンツィオ、ムツソリーニ、日本——」（『福岡国際大学紀要』25号、福岡国際大学、2011年）
- 土肥秀行「下位春吉とナポリの文芸誌「ラ・ディアーナ」—下位春吉伝(上)—」（『イタリア図書』39号、イタリア書房、2008年）
- 土肥秀行「下位春吉とナポリの文芸誌「サクラ」—下位春吉伝(下)—」（『イタリア図書』40号、イタリア書房、2009年）
- 大内紀彦「ラグーザ・玉の発見と日本への帰国—下位春吉家の人々との交流を通じて—」（『イタリア図書』48号、イタリア書房、2013年）
- 有働玲子「大正期の口演童話 下位春吉・水田光を中心にして」（『研究紀要 短期大学部』第25(1)号、聖徳大学、1992年）
- 岡俊孝「伊・エティオピア紛争(一九三五年)と日伊関係の展開」（『法と政治』40(4)、関西学院大学、1989年）
- 石川龍星「日本愛国運動総覧」（『戦前社会思想事典第六巻』、大空社、1992年）
- 吉屋信子「私の泉鏡花」（『日本近代文学大系月報』13、角川書店、1970年）
- 総理府官房監査課編『公職追放に関する覚書該当者名簿』（日比谷政経会、1949年）
- Reto Hofman, *The Fascist Reflection Japan and Italy, 1919-1950* (Columbia University, 2010)

Indro Montanelli, “Shimoi”, *L'impero bonsai* (Rizzoli, Milano, 2007)

Benedetto Croce, “Ricordi e lettere di amici giapponesi”, *Quaderni della "Critica"*

Vol.2 No.5 (Laterza&Figli, 1946)

SAKURA (Napoli, 1920~1921) 国文学研究資料館のデータベースに全巻所収されている。

[http://base1.nijl.ac.jp/~kiban-s/database/sakura\\_pdfpage.htm](http://base1.nijl.ac.jp/~kiban-s/database/sakura_pdfpage.htm)

JACAR (アジア歴史資料センター) Ref. B03040726300 (外務省外交資料館)「宣伝関係雑件／嘱託及補助金支給宣伝者其他宣伝費支出関係／本邦人ノ部 第三巻」

JACAR (アジア歴史資料センター) Ref. B04012322200 (外務省外交資料館)「本邦記念物関係雑件／白虎隊記念碑関係 第一巻」

『東京朝日新聞』

『読売新聞』

#### 第四章

下位春吉述『ファッショ運動』(民友社、1925年)

下位春吉『ムツソリーニの獅子吼』(大日本雄弁下位講談社、1929年)

下位春吉『ファッショ政体に於ける労働政策』(春秋社、1932年)

下位春吉述『下位春吉氏熱血熱涙の大演説』(大日本雄弁会講談社、1933年)

下位春吉述『伊太利の組合制国家と農業政策』(ダイヤモンド社、1933年)

下位春吉『イタリヤ参戦を回る世界政局の動向』(日本協会出版部、1940年)

下位春吉『農村青年に与ふ』(上田屋書店、1941年)

佐々鴻吉『老獐大英帝国を倒せ』(国際事情研究会、1935年)

下位春吉「ダンヌンツィオの横顔」(『改造』第20号第4巻、改造社、1938年)

下位春吉「伊国宗教説話(一)」(*Studi di Cultura Italo-Giapponese*、日伊協会、第4号、1942年)

下位春吉「人間ダンヌンツィオ」(『日伊協会会報』第3号、日伊協会、1943年)

高島素之『マルキシズムと国家主義』(改造社、1927年)

高島素之『ムツソリーニとその思想』(実業之世界社、1928年)

高島素之『批判マルクス主義』(日本評論社、1929年)

高島素之「労働者に国家あらしめよ—国家社会主義の理論的根拠」(『国家社会主義』第1巻第1号、売文社、1919年)

田中真人『高島素之 日本の国家社会主義』（現代評論社、1978年）

北吟吉編『ファツシヨと国家社会主義』（日本書荘、1937年）

K.マルクス・F.エンゲルス『共産党宣言』（岩波書店、1951年）

三島由紀夫『小説家の休暇』（新潮社、1982年）

シモーナ・コラリーツィ著 村上信一郎監訳『イタリア 20世紀史』（名古屋大学出版会、2010年）

ニコラス・ファレル著 柴野均訳『ムッソリーニ 上』（白水社、2011年）

岩村正史「昭和戦前期日本人のヒトラー像」（『法政論叢』36(2)、日本法政学会、2000年）

山崎充彦「“ファシスト” ムッソリーニは日本で如何に描かれたか —表現文化における政治的『英雄』像」（『龍谷大学国際センター研究年報』第15号、龍谷大学、2006年）

田嶋信雄「ナチス・ドイツと中国国民政府 1933-1936年(2)」（『成城法学』第80号、成城大学法学会、2011年）

田嶋信雄「ナチス・ドイツと中国国民政府 1933-1936年(3)」（『成城法学』第81号、成城大学法学会、2012年）

岡俊孝「伊・エティオピア紛争(一九三五年)と日伊関係の展開」（『法と政治』40(4)、関西学院大学、1989年）

『現代史資料 4 国家社会主義運動 1』（みすず書房、1963年）

内務省警保局編『社会運動の状況』

小学館編『日本大百科事典』

『東京朝日新聞』

『読売新聞』

「第19回 生命表（完全生命表）」（厚生労働省ホームページ「最近公表の統計資料」より、<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/life/19th/index.html>）